

日本醫史學雜誌

第 26 卷 第 3 号

昭和 55 年 7 月 30 日発行

第 81 回日本医史学会
第 8 回日本歯科医史学会 } 総会抄録
日本薬史学会

特別講演

- 医学・歯学・薬学のシンボル「蛇杖」……………古 川 明…(257)
中国口腔医学発展簡史……………周 大 成…(260)
アユルヴェーダの薬物……………伊 藤 和 洋…(263)

会長講演

- 日本歯科医学発展の回顧……………鈴 木 勝…(265)
一般口演抄録……………(269)
雑 報……………(275)

通 卷 第 1419 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷 2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京 6-15250 番
電 話 03 (813) 3111 内線 544

医学文化館・開館2周年記念

*半世紀に亘る錦絵蒐集の歩み、その特異なテーマの全貌を世におくる!!
ユニーク

錦絵医学民俗志

オール
カラー版

中野 操 編著

編纂 (財)日本医学文化保存会 / 発行 金原出版株式会社

*庶民芸術の中に医学史の源泉を凝視した画期的な錦絵集

①本書は、医学史にご造詣の深い中野操先生がご研究ご診療のかたわら、三十数年に亘って苦心収集された医学関係の錦絵コレクション約二百点の中から、特に医学に関連の深い逸品を選び、中野先生みずから分類・編集し、適切な解説を付したものです。

②病気の錦絵、医事や医療に関連のある錦絵はその性格上流布されているものが少ない。そうした困難な条件の中で多年に亘り収集されたこれらの錦絵はまさに特殊な収穫であり、非常に稀少価値の高いものです。これらの錦絵の集大成と言える本書は、わが国で初めてのもので、医学的にも興味深く、また江戸時代の庶民生活や風俗の一面を知る上にも貴重なものと言えます。

③以上のことから、本書は浮世絵、錦絵の愛好家や収集家はもとより、多くの医家や江戸時代の風俗史、人情史、人事生活史に関心ある方々の必読必見の書と言うべきであります。



懷中鏡おはん長右衛門 五渡亭貞貞画

定価 68,000円

〔体裁〕A3判 二三〇頁
原色図版一八七点

金原出版株式会社

東京都文京区湯島2-31-14 (〒113-91)
電話 (03)811-7161 振替東京2-151494

第81回日本医史学会
第8回日本歯科医史学会
日本薬史学会
合同総会演題目次

特別講演

医学・歯学・薬学のシンボル「蛇杖」……………	古川 明……………(1)
中国口腔医学発展簡史……………	周 大 成……………(4)
アユルヴェーダの薬物……………	伊 藤 和 洋……………(7)
会長講演	

日本歯科医学発展の回顧……………	鈴 木 勝……………(9)
------------------	---------------

一般口演

1、いわゆる「ターヘル・アナトミア」と解体新書の比較(その一)……………	酒 井 恒……………(13)
2、木製ハンドルの抜歯用エレベーターが使用された時期……………	下 総 高 次……………(15)
3、岡山藩医学館教師ロイトルについて……………	石 田 純 郎……………(18)
4、わが国における草創期の胆のう外科について……………	松 木 明 知……………(21)
5、本邦における明治期の帝王切開について……………	松 木 明 知……………(21)
6、渋江抽斎編『直舎伝記抄』について——とくに桐山正哲に関して——……………	松 木 明 知……………(23)
7、森井恕仙とその医学……………	山 形 敏 一……………(24)
8、来日宣教医 Wallace Taylor (一八三五一—一九二三)に關して……………	長 門 谷 洋 治……………(25)
9、中国伝統医学(古代)と道教……………	吉 元 昭 治……………(27)
10、第四回内国勸業博覧会の歯科出品物……………	
第一報、歯科器材について……………	大橋正敬・仁平真佐秀……………(29)

- 11、何故W・ウィリス医師は江戸で高い俸給をのぞんだか？……………原 口 忠 男……………(30)
- 12、『鼈氏内科学』について……………安 井 広……………(33)
- 13、昔のX線界の周辺……………沼 田 久 次……………(34)
- 14、痘瘡および麻疹史資料への疑義……………三 井 駿 一……………(37)
- 15、明治当初の死亡届……………内田 醇、田代逸郎……………(39)
- 16、仏典にみえる健康観と特異な症候群……………杉 本 茂 春……………(40)
- 17、金沢における明治初期の体温表……………寺 畑 喜 朔……………(43)
- 18、アテナイの疫病……………羽 田 回……………(45)
- 19、江戸今世医家人名録初編の異本について……………中 野 操……………(47)
- 20、『清水氏講義録』——東京大学初代産科婦人科教授清水郁太郎の講義録……………松 永 勝……………(49)
- 21、大庭政世の事績(Ⅱ)——島根県における医療組合事業の展開と産青連の運動……………中 尾 敏……………(52)
- 22、日本史における価値観の変化に伴った各種学校・課程制大学・学科制大学・講座制大学の動き(医療関係を中心として)……………柴 田 幸 雄……………(54)
- 23、岡谷蚕糸博物館所蔵資料にみる製糸工女の医療費負担について……………清 水 勝 嘉……………(57)
- 24、岡谷蚕糸博物館所蔵資料にみる製糸工女の医療費負担について……………清 水 勝 嘉……………(58)
- (第二報、明治四十年代)……………
- 25、古代インドの公衆衛生……………杉 田 暉 道……………(60)
- 26、産業医としての先覚者 佐藤英太郎……………三 浦 豊 彦……………(62)
- 27、房楊枝について……………中 原 泉・本間邦則……………(65)
- 28、明治期の英文「成医会月報」に投稿している外国人医師たち……………蒲 原 宏……………(66)
- 29、平次郎解剖について、その場所と住民感情……………杉 立 義 一……………(68)
- 30、隋、唐時代の歴史書にみられる疾病……………山 本 徳 子……………(70)
- 31、中国伝統医学における季節の問題……………丸 山 敏 秋……………(73)

32、	曲亭馬琴の義齒について	本 山 佐太郎	(74)
	第三報 予後		
33、	ガブリエル・ブラバーズとその皮下注射器について	大 村 敏郎	(76)
34、	「松阪の入口・入歯師」と「明治期医学生の写真」について	柘 植 三 郎	(79)
35、	横浜外人墓地に眠る医人・薬人	大 滝 紀 雄	(80)
36、	明治初期に於ける入歯細工師の引札	竹 内 孝 一	(82)
37、	肢体不自由児リハビリテーションの先駆者としての高木憲次博士	福 嶋 正 和	(84)
38、	戦前の精神科病院における脚気の発生状況―巢鴨病院―松沢病院の統計を中心に―	岡 田 靖 雄	(87)
39、	比較語学的方法による身体意識史検討の試み(五) 成長・増殖	三 輪 卓 爾	(89)
40、	ツンベリーの来日とその意義	高 橋 文・川瀬 清	(91)
41、	明治時代発刊の医学書に見られる歯科にかかわる医学用語について	岡 田 治 夫	(93)
42、	仙台領の隠れた本草書「賢親本草」	ヒキノ ヒロシ	(96)
43、	カスバルの江戸での伝習動向について―「阿蘭陀外科医方秘伝」の紹介―	宗 田 一	(97)
44、	Bonwill 咬合器の史的考察	永 田 和 弘	(99)
45、	緒方洪庵の薬箱について	青 木 允 夫	(100)
46、	山田顕義と公衆衛生	西 川 溟 八	(102)
47、	歩兵屯所医師取締役手塚良仙知見補遺	深 瀬 泰 旦	(104)
48、	「臨牀歯科」の歴史について	長 谷 川 俊 夫	(106)
49、	歯固の変遷について(第一報)	長 谷 川 正 康	(108)
50、	伊沢信平関「小児歯牙衛生論」について	本間邦則・佐藤泰彦	(109)
51、	本邦における医学放射線技術文化の開発者	今 市 正 義	(110)
52、	現代史における日記の文献的利用性の事例研究	沢 井 清・清水勝嘉	(112)
53、	木床義歯の製作法について	新 藤 恵 久	(113)
54、	佐藤運雄著「歯科診断学」の推移について	新国俊彦・工藤逸郎	(113)

55、中国で口歯の医療に用いられた塩について……………	戸出一郎……………(116)
56、一九世紀前・中葉におけるリゾドントリピーの書誌学的研究……………	森山徳長……………(118)

特別講演

日本医史学雑誌第二十六卷三号
昭和五十五年七月
昭和五十五年七月三日受付

医学・歯学・薬学のシンボル「蛇杖」

古川 明

一、アスクレピオスとヘルメスの蛇杖

医学・歯学・薬学のシンボルには、アスクレピオスの蛇杖とヘルメスの蛇杖があるが、一括して「医術のシンボル」と略称し、また「蛇杖」を「杖」と略称する。ヘビだけを医術のシンボルとすることはあるが、杖だけをシンボルとするとはまれである。

アスクレピオスはギリシアの医神で、その杖には一匹のヘビがからみつき、医術のシンボルとして、健康から不老・不死までを象徴する。ヘルメスは商業・通信・交通などの神で、その杖には二匹のヘビがからみつき、幸福・平和などを象徴する。ヘルメスの杖は「カドゥセウス」(神の杖、聖蛇の杖、伝令の杖の意)と称し、この杖の上端には翼のついていることが多い。医術のシンボルは、元来はアスクレピオスの杖だったが、ルネサンス期からヘルメスの杖と混同され、現在では両者とも医術のシンボルとして用いられている。しかも、ともに「カドゥセウス」とよばれることがあるが、「カドゥセウス」は元来ヘルメスの杖のことをいう。

二、蛇と杖

古くからへビに関する概念は悪と善の二面で象徴されてきた。悪の面では、恐怖・排斥・誘惑・邪悪・戦い・死亡などの象徴となり、善の面では、再生（脱皮）・復活・守護・魔力・崇拜・神秘・賢慮などを象徴し、呪術・医師の象徴ともなった。ミノア期（前一、五〇〇年ごろ）には守護的意味で、家屋内のへビ信仰の風習があり、ギリシアでは、アスクレピオスをはじめ、ヒギエイア、ゼウス、アポロン、アテナらの神にへビを配し、聖蛇とした。ヒギエイアはアスクレピオスの娘で、衛生の神である。彼女はその杯でへビを飼育したので、「ヒギエイアの杯」が衛生や医師のシンボルとなり、この杯は「アスクレピオスの杯」ともよばれる。

杖といえば、病者、身障者、盲人、老人らの実用的支持具を考えがちだが、ここでは地上に生える植物的生命を象徴するものとみた方が意義がある。巡礼の杖、牧羊杖、魔法や魔術の杖、占者の杖、仏僧の魔除け杖、キリスト教の司教杖、ヒンドゥ教の梵棒などと同様、アスクレピオスの杖は権威・命令・力などの象徴となる。アスクレピオスの杖は元来は太い棒だったが、次第に細い杖として描かれるようになった。

三、世界の国々への医師のシンボル

一九五六年に、キューバのハバナで開催された第一〇回世界医師会会議に、オランダ医師会は医師のシンボルとして、アスクレピオスの杖を正しく使用しよう、各国の医師によびかけた。国連WHOは、地球儀を月桂樹で下からかこんだ国連のマークに、正しいアスクレピオスの杖を配して、そのマークとした。これに反して、米国や韓国の軍衛生部ではヘルメスの杖をマークとしている。そのほかの国でもこれを用いることがまれでない。歯学や薬学ではマークを変形することがある。例えばアムステルダム薬局方の扉画には、アスクレピオスの杖の一部が葉べらに代えて描かれている。

フランスでは医師のシンボルとして、アスクレピオスの杖の頭に楕円形の鏡を載せ、杖の両側に月桂樹（左）と柏（右）

の杖を配している。一八〇三年のナポレオン帝政時代の軍規に、「エピダウロスの蛇と賢慮の象徴である鏡で杖を飾る」と規定した。エピダウロスはアスクレピオスに関係深く、その遺跡が多い所である。鏡は眞実・誠実・神秘・天恵・知識・心の反映・未来の予見を象徴し、月桂樹は不滅を、柏は栄光と英知を象徴する。

四、キリスト教と蛇杖

アスクレピオスとフエニキアのエシムン神とともに古代の病氣治癒神だったが、これに劣らないのがイエス・キリストである。キリストの死後、ローマ帝国のコンスタチヌス帝は、ミラノの勅令（三一三年）でキリスト教を公認し、のちテオドシウス帝がこれを国教に採用して（三八〇年）、ほかの宗教を厳禁した。異端宗教のアスクレピオス神殿は壊滅され、以後中世にはアスクレピオスは全く忘れ去られてしまった。

古くからキリスト教徒には、「モーゼの青銅の蛇」が知れわたり、ペストが流行したときには、これがお守りとして作られた。文芸復興期になってから、ミケランジェロがバチカン宮のシステイナ礼拝堂の天井に描いたモーゼの青銅の蛇は、アスクレピオスの蛇杖と区別できないほどよく似ていた。ギリシア文化が再認識された時期だったので、そのころからアスクレピオスの杖が復活しはじめ、現在はキリスト教の医師団でも、これをマークに配している。

五、むすび

医術のシンボル「蛇杖」は、全世界の進歩した現代医学のルーツを示すものであるから、これを正しく理解、認識して、ながく後世に伝えるべきであろう。

中国口腔医学発展簡史

周 大 成

口腔疾患は人類の早期に罹患する疾患の一種であつて、北京附近の周口店で発見した約五〇万年前の北京原人及び約一万年あまり前の山頂洞人顎骨には既に歯周病を患った痕跡が見られた。

中国科学院考古研究所が河南省成皋廣武鎮で發現した新石器時代晩期の墓穴の中の十五体の人骨の口腔には七体が齲歯を有し、十体が歯周病を有していた。歯牙の磨耗により歯髓が壊死し、根端疾患を有する個体が五例もあり、智歯周囲炎の症例も見られた。これらの所見に依ると、中国においては、旧石器時代及び新石器時代には口腔疾患が相当に存在していたことが認められた。

口腔疾患に関する最も古い記録は殷代の首都であつた河南省安陽県の殷墟で発掘された今より三〇〇〇年あまり前の甲骨文の卜辞で見られるので、歯牙に関するものだけでも五〇片以上に達している。

中国科学院考古研究所が河南省安陽で発掘された殷代の奴隸と自由平民及び奴隸主の小型の墓葬を発掘した。その齲歯及び歯周病を調査して見ると、歯周病は男性が女性より高く、齲歯は女性が男性より高いことが分つた。

我国の最も古い医籍である「内経」には口歯方面に関する論述が数多く記載している。例えば乳歯及び永久歯の萌出期並に交換期が非常に近代の統計に符合している。

古人は歯牙を潔白、整齊にして容貌を美しくすることに注意した。“丹脣外朗、皓齒內鮮”(洛神賦)、“明眸皓齒”(杜詩)等は人類の奇麗な齒列に対して讚美している句であり、齒列不正を齟齬と称していた。

周礼に“雞始鳴、咸盥漱”と云う記載があり、含漱することは古人の良き習慣であったことがわかる。

紀元前二世紀、即ち西漢初年の名医であった淳于意が我国最初の齟齬症例を報告し、当時は病誌を“診籍”と称していた。此症例は司馬遷の史記に記述しており、患者の職業、病名、療法、処方、病種、病因等が詳しく記載しており、当時の口齒疾患の治療は鍼灸及び含漱剤を使用していた。

東漢時代の張仲景が“口齒論”一卷を著述した。これが我国における最初の口腔科専門であったが、後世に遺失した。張仲景の別の著作である“金匱要略”には砒素で齒髓を失活することが記載しており、これは世界における最初の齒髓失活剤である。Spoonar が砒素を齒髓失活剤として使用したのは一八三六年であり、約一、〇〇〇年あとのことであった。

所謂地方病性斑狀齒に関する記載も相当に古く、漢末の魏の時代の嵇康の著した“養生論”には“齒居晉而黃”と記しており、彼は所謂斑狀齒の原因がフッ素によることが未だ判らなかったが、山西省に住んでおれば齒が黃色になると云う生活環境と地方病との関係を認識していた。Eagar が斑狀齒を発見したのは一九〇一年であったが、当時彼もフッ素によることを知らなかった。

晋の時代には既に脣裂(兔脣)の手術をすることが出来た、術後には流質の飲食を用い談話を禁じていた。

隋の大業六年に巢元方が巢氏諸病源候論を著述し、書中の口腔病に関するものだけでも 十八論の多きに達し、その“拔齒損候”には拔齒後出血に関することが記載しており、これが我国最初の拔齒に関する文献である。

唐高宗顯慶四年(六五九年)蘇敬の唐本草に Amalgam で齒牙充填をすることが記しており、当時は“銀膏”と称し、それは銀箔、水銀、白錫等で処方した合金であった。イギリスの Bell が始めて Amalgam で齒牙充填したのは一〇〇〇年あまりあとの一八一九年であった。

唐時代には房楊枝で齒牙の清掃をしていた。齒磨剤は主に塩を使用し、中に数種類の薬を混じて揩齒することもあった。房楊枝は印度より中国に伝来したもので、それを使わずに指に塩をつけて揩齒する者もいた。

北宋末年に宋徽宗等が編集した「聖濟總錄」に口齒病を論ずるものが五卷もあり、これは宋以前の各種類の口齒疾患療法を総結したもので齒牙再植術（復安）を含めて内容が相当に豊富である。

一九五三年に前熱河省の大営子村で遼時代の附馬である衛国王の墓穴の随葬品中より二本の齒ブラシの柄を発見した、これは遼應曆九年（九五九年）の墓葬で、これに依ると宋以前の遼時代に既に齒刷牙子を發明して使用していた。

明万曆四十九年（一六一七年）陳實功著「外科正宗」に口腔外科疾患の療法とさし縫を附して、齒瘡（瘡瘍）、多骨疽（骨髓炎）、走馬疳（水瘡）、脣疽、頬疔、鵞口瘡、下顎脱臼、痰包（蝦蟇腫）、重舌、脣風、牙疳等について詳細に記述している。

この様に中国口腔医学の發展簡史を旧石器時代から清朝まで述べて見たいと思う。

（北京市口腔医院）

アユルヴェーダの薬物

伊藤和洋

人類はその発生以来、太陽の光熱に支配されながら百万年を経ていると言われるが、その太陽の熱さは今日なお変わっていないと同様に葉草の性質、作用も変わっていないとインドの伝統医学者たちは考えている。

また宇宙の天体は数十億年（地球は四十五億年）来、調和を保った運動を続けているがその宇宙を統率する秩序と同じバランスが人間の生体にも働いていて、生体は何時も一定の平衡状態において維持されるような能力を具えていると考えている。

つまり、ヴァータ（風）、ピッタ（胆汁）、カファ（粘液）など三つの体液と呼ばれる生命複合体が一定の平衡状態にある時は健康であるとし、平衡が失われた場合、食餌、薬物などで元の平衡状態に戻すように処置するのが生命の医学と称されるアユルヴェーダの目的の一つである。

ヴァータは宇宙の空気とガスの要素である風に相当するものであるが、人体の運動、刺激伝達作用、消化などに関連するあらゆる現象と関係がある。つまり、中枢神経系、自律神経系の働き、体内エネルギーの働き、細胞分裂なども、このヴァータの作用による。

ヴァータは痩せさせる働きをするから痩せた場合はヴァータを抑制する性質をもった甘、酸、鹹味の生薬を投与し、ヴ

アータを刺激する必要のある時は苦、辛、収斂味のある生薬で治療する。

ピッタは宇宙の熱と光の要素である火に相当し、人のピッタも体熱と関係がある。胆汁と訳されているが現代医学でいう胆汁そのものを指すのではなく、食物消化作用、精力と健康色、体温の正常調節作用などがある。したがって全身に熱感、部分的に焼けつくような燃えるような熱感が起きた場合ピッタを抑制する甘、苦、収斂味のある飲食物や冷の性質のある生薬（カファを促進する薬物）を投与する。

カファは宇宙の地、水の要素であり、アウルヴェーダでは粘液と訳されているが、私達のもつ粘液という概念だけでなく関節間の連結、身体を滑らかにする作用や身体を肥らせたり癒創作用、強靱性を与える作用などがある。カファが悪化（抑制）すると痩せ、陰痿、虚弱、性的衰弱、身体がカサカサしてくるのでカファを刺激すの甘味、酸、鹹味のある生薬を投与する。また脂っこい食物を摂取させる。

（なお各薬物については講演時に具体的に説明の予定）

（日本薬史学会幹事）

会長講演

日本医史学雑誌第二十六卷三号
昭和五十五年七月 昭和五十五年七月二日受付

日本歯科医学発展の回顧

鈴木 勝

歯牙・口腔における疾病、そしてその治療が、一般医学と同様に人間の発生とともに行われてきたことは想像に難くない。

しかし、そのものは学ではなく経験から得た口中治療であって、主に歯痛に対する戦いであった。

温古知新という言葉があるが、明日への躍進のためには、常に古きをたずね、歴史を踏まえて成し遂げなければならぬ。

われわれの歯科医学の分野も、長い時の流れの間にいろいろと紆余曲折の経過をたどって発展し、それには幾多の先輩識者の研鑽努力の積重ねがあり、今日のような現代歯科医学ができあがったといえよう。すなわち、それは意義のある歯科の歴史であり、従ってその歴史は今日なお生きており、さらに明日へと続くものである。そこで、これら先輩のたどった歯科医学への道を、次の順序で振り返ってみたい。

一、わが国最古の医事法制——医疾令

大宝律令（大宝元年、七〇一）は、わが国に残存する最古の法令であるが、唐律令を模倣した点が多く、そのうち医療に

ついで規定した医疾令には、体療・瘡腫・少小・耳目口齒の四科に分けられており、体療は七年、瘡腫及少小は五年、耳目口齒は四年とそれぞれの年限を修業させることになっていた。

しかし、この律令は実施されなかったのが国では齒科の名称が実際に用いられた年代は明らかではない。

二、わが国最古の医学書——医心方

現存するわが国最古の医学書である、『医心方』は、丹波康頼（九一二—九九五）が永観二年（九八四）に隋唐の医書から引用編纂した全三十巻で、そのうち齒科に関しては第五巻、牙齒病、唇口病とし、病源候論の所説を引用して記述されている。これは長い間医学教典として医生に利用され、室町時代に至るまで大きな影響を与えた。

三、兼康流、親康流と口齒科

丹波康頼から十数代後の子孫の丹波冬康が花園天皇の齟齬の治療を行ったことが花園院御記（正和三年、一三二四、五月十七日の条）に記されている。しかし、冬康は口齒科を専業としたのではなく、体療（本道）すなわち内科を兼ねていたと解されている。その孫、兼康は特に、口舌の治療をよくし、口齒科を専業としたことが『兼康家伝之秘書』（写本、享保五年・一七二〇、兼康上世栄庵）の序文から知ることができる。この兼康の生年と歿年は明らかでないが、山田平太氏によると冬康から推考すると南北朝末期（一三八〇年頃）から応永年間（一三九四—一四二七）までの人で口齒科を専業としたのはその晩年であろうという。この兼康とその子孫が代々宮中の口齒科専門の医官として仕えたことから、わが国の口齒科は室町時代（一三九三—一五七三）に発足したことになる。一般にこの兼康の口中療治法を継承したものが兼康流、それから五世親康とその長男宗康の療法を伝えたものが親康流と呼ばれ、後世の口中療治法はこの両派が主流をなし江戸時代末期まで続くのである。

四、口中医・入歯師・歯抜き

江戸時代には官職の上から口中医には禁裏付医官の口中医または口中医師と徳川幕府医官の歯医師があつたが、その他自由に街でその業をとる者に口中医（同名異質）、入歯師、入歯渡世者、歯抜きなど種々の名称があつた。口中医は単に口中療治を施し、入歯師には入鼻、入眼を兼業した者もあり、香具師の党である入歯師、歯抜きは一切の口中療治を実施せず入歯を主とした者が入歯師、抜歯を主とした者が歯抜きと呼ばれ、これらの中には居合抜きあるいはこま廻しをして民衆に親しまれていた者もいた。

五、明治初期の医制と歯科——小幡英之助

明治六年（一八七三）十二月二十七日、医制七十六条の稿を作成し、太政官に医制施行方を答申し、それにもとづき明治七年八月十八日東京府へ、九月二十七日京都、大阪の二府に布達されたが、この医制においては歯科の名称はなく医科一般の中に含まれ、口中科として表現されていた。しかも産科、眼科、整骨科及び口中科は今日で言えば専門医というような特殊標榜科扱いになっていた。

この医制にもとづき小幡英之助は歯科医術開業を目的として受験するわけであるが、「口中科」を嫌って医制にない「歯科」という名称で願出で受験し、明治八年十月二日に「歯科開業免許候事」とあるが、歯科医師という身分制度は法令上にも制度上にも存在しないので医籍第四号として登録された。このように「口中科」を嫌って「歯科」で試験を受け、今日の歯科医学の道を開いたことは偉大であるが、もしこの時、制度どおりの「口中科」で受験していたとすれば、今日の歯科学はいかなる歴史と発展をたどっていたのであろうか。

なお、日本の歯科医学の近代化は主として一、来日した米国人歯科医師（イーストレキ、エリオット、パーキンスら）、二、米国に留学し歯科医学を修得、帰国した日本人歯科医師（高山紀斉、一井正典、伊沢信平、佐藤運雄ら）、三、従（在）来

家（神翁金松、竹沢国三郎ら）の努力などによるものであって、これら現代歯科医学の発展に貢献した人々についても時間の許す限り述べてみたい。

（日本大学総長）

一般口演

いわゆる「ターヘル・アナトミア」

と解体新書の比較(その一)

酒 井 恒

解体新書卷之一の内容をいわゆるターヘル・アナトミアの内容と比較した。その訳の大部分はかなり正確である。その訳には、逐語訳として訳したと思われる部分、文の内容の前後を入れ替えた訳、更に、原文の意味のみを忠実に訳した部分が混在し、また、随所に、本文の一部として語を加え、あるいは小字の注を加えて、読者の理解を容易にしている。明らかに誤訳と判断される部分はごく一部にみられる。以下に主要な点を述べる。

第一表 解剖学の目的をはなはだ簡潔に表わしている。ローソクのあかりを硬機刷と誤訳し、腺の項では、*Neck* の名が落ちている。*Lyserus* についての訳は巧みである。

解剖学の利用の項では、其一及び其二はむしろ簡潔に過ぎているが、巧みな訳である。

第二表 三つの体腔を三等と訳し、「頭は最も上の腔所である」を上体者頭顱也と訳し、額については、原文よりも詳しく述べている。しかし、眉間には触れていない。頸では、前の頸と後ろの項を含めて頭茎と訳し、頸の混用を巧みに避けている。アダムのりんごを訳していないのは、その意を解し得なかったのではないか。陰部の訳は、その一部を欠き、臍を用うべきところに臍を用いている。手は上肢を、足は下肢を意味している。

第三表 固形の部分についての訳が不十分であり、線維の役割りの訳は、原文の意とは異なる。神経のはたらきについての訳は、原文の記載よりも詳しい。靱帯の訳は原文の意とは異なるが、不在関節者厚而大也とわかりやすい。骨の訳の一部を欠く、筋の訳に其本狭而其末闊を加え、また、原文の前後を入れ替えてわかりやすくしてある。その自如膜之状及び動脈の或集或脹或動は誤訳であろう。脈管についての訳は原文の意とは異なり、即血液之所行也と血液に限っているのは、*Vasa, Vaten of adens* を血管と訳し

たからであらう。「リンパは心臓へと導かれる」を主養心也と訳している。脂肪が小胞の中にあることを訳していないのは、その意を解し得なかったのであらう。神経液の訳は、むしろ、そのはたらきに重きをおいている。涙についての訳は原文よりも詳しい。脾液の訳には、むしろ、原文に勝ると思われる部分があり、胆汁の項では、蠕動運動を促進し」を蓋其汁至虫腸其氣尽矣と誤訳している。更に、残りの流動性の部分を、其他侈及子宮等之津液者各説条之云と略している。

第四表 原文にある骨格の説明を訳さず、また、骨幹の訳はやや不十分である。しかし、骨の隆起についての説明は原文よりも詳しく、その形による命名は、原文では五(頸突起、棘突起、尖突起、冠状突起、茎状突起)であるが、訳では三(頬車骨、稜骨、鳥喙骨)であり、両者の対応が明らかではない。軟骨による骨端での成長には触れていない。骨髓を髓液と訳し、骨の連結を附属と訳し、その分類の各項に小字で注を附している。関節には、疎而可按知を加えてわかりやすくし、可動結合を疎、不動結合を密と訳す。また、直接結合を無物繫之、間接結合を有物繫之

と訳し、縫合を犬牙咬と巧みにその状態を表わしている。

第五表 頭骨を体の一部と考えている。現在の用語では骨の一部であるものを、随所で、独立した骨のように命名し(骨の隆起の項参照)、後頭骨の後頭顆を完骨、茎状突起を披鍼骨、下顎骨の関節突起を轅骨と訳しているのがその例である。篩骨に分在左右を加えたために、かえって誤りになっている。下顎骨関節突起の注は原文には見られない。椎骨の上下の関節突起についての記載は、原文よりも詳しい。環椎、軸椎及び軸の訳は略されている。胸骨について、其蔽骨者軟而は原文にはない。肋骨溝及び肋軟骨には触れていないが、肋骨についての記載は、原文よりも詳しい。これは、彼らが十分に観察し得たからであらう。鎖骨の項では、膊骨頭が胛骨頭と誤り用いられているようである。肩甲棘を訳していない。恥骨を横骨と訳し、閉鎖孔(卵円孔)の名称を用いず、これを具体的に説明している。寛骨臼の記載が原文とやや異なる。肘頭の訳は原文の意とやや異なる。腸骨稜と橈骨の関節環状面を、同じく櫛と訳し、種子骨を、手では核骨、足では胎骨と訳している。爪の是著皮之处也は誤訳である。

ここには、いわゆるターヘル・アナトミアの原文を引用せず、著者が読解し得た本書の内容と解体新書の内容を比較した結果、気付いた点を原典と照合し、その一部を列記した。両者を比較して、後者がいわゆるターヘル・アナトミアの本文のみの翻訳であるといわれるが、その訳の正確なことは驚嘆に値するものである。また、翻訳の際の用語を作る彼らの苦心が各所にみられる。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

木製ハンドルの抜歯用エレベータが 使用された時期

下 総 高 次

文献資料の調査の結果、抜歯に用いられた木製把柄エレベータの歴史が意外に古いこと、またわが国で使用された時代の沿革も分かったので、この点について報告する。

一八九七(明治三〇)年発行 Rochester Dental Mfg Co.

(ニューヨーク)のカタログに、S.S. White 会社製の木柄エレベータが掲載されている。これは、金属部分の尖端が円錐形で螺旋状にキザミが入っており、把柄部は黒檀製円形(ヘウタン型)である。この他に、十六種の金属尖端部の付いたものがあり、価格は各七五セントである。また、

一九〇三(明治卅六)年発行の Johnson & Lund Dental Catalogue (シカゴ)にも、前記と同形式のものが当該社のマーク入りで掲載されている。木製把柄部が黒檀で八角形のものが一・二五ドル、黒檀まがいで円形のものが六三

セントである。

さて日本に関して、一八八一（明治十四）年八月、鰯屋岩本五兵衛出版のカタログ「医家器械図書」がある。これは、東京大学医学部の先生の校閲を得て、ドイツ ウェンドレル氏原著の機械書より選択したものである。同書にみられる「歯根抽出用螺嘴」は、金属把柄であるが、尖端螺旋部はネジにより交換が可能であり、前述の S.S. White 会社のもと同型に属する。また「アメリカ製山羊足 Geißel（cise）」は木製把柄エレベーターであり、何れも極めて古いタイプである。明治期前半における歯科器材は、すべて輸入品が用いられた。ではわが国における歯科器材の国産化は何時頃からであろうか。一八九一（明治廿四）年頃、瑞穂屋清水卯三郎は他に先きがけて、米英の歯科器材を輸入すると共に、模造ではあるが国産化を開始したとされているが、資料に乏しい。一九一〇（明治四十三）年発行の「日本歯科商社」カタログによると、既述したアメリカ各会社の本柄エレベーターと同形式のものが掲載され、しかも、「日本歯科商社」の製作したものとして、当社のマークが入っている。価格は特製一円、上製七〇銭、並製五五銭

とある。また、「大学式挺子」として、三本一組の木柄エレベーターが掲載されており、説明文には、「本器ハ帝国医科大学歯科教室ノ指導ニヨリ創製シタモノデ、弊社ハ多年医科大学ノ御用ヲ拝命シ、本器ヲ製作発売スルコトガデキタ」とある。価格は、三本一組が貳円、一本に付七〇銭とある。故中村平蔵教授（東京医科歯科大学名誉教授）生前の著者への私書によると、教授は一九一六（大正六）年十二月に、東京帝国大学医科歯科大学歯科教室に入局された。その頃は、著ら柄が木製で先が金属のエレベーターを用いた。黒褐色の木柄に金属の鋏が点状に出ている、柄は六角形又は八角形であった。それらは、教室主任の石原久教授が明治卅五年頃、二年間の欧米留学から帰朝した際、米国より持ちかえったエレベーターを、「日本歯科商社」に注文して、日本人向きの大きさに改造したものであるという。なお、「日本歯科商社」は、昭和一〇年前後に廃業している。金森虎男著『歯科外科学』一九三四（昭和九）年改訂版、歯苑社発行をみると、同氏考案による抜歯器械一式とそれを納めた器械箱が掲載されている。器械箱には、抜歯鉗子十四本と、木製把柄エレベーター九本が入っている。

製造会社は「鳥光齒科器械店」であり、同店が昭和十年九月に発行したカタログには、この金森式九本組エレベーターが、実物大に掲載されている。著者もこの型のエレベーター二本を持っているが、金属部は黒い木柄部に挿入され、更に外から鉾によりしっかりと固定されている。金森教授は、昭和四年一月卅一日から昭和九年四月まで東京高等齒科医学校教授、昭和九年四月廿八日から昭和廿六年三月卅一日の停年まで、東京帝国大学医学部口腔外科教授をつとめられた。鳥光齒科器械店は、昭和廿年の終戦直後に廃業しているが、恐らく昭和四年頃から昭和十五、十六年までの間に、この種のエレベーターが製造され、齒科医学校以外の一般にも多く用いられたと考えられる。

他方、著者の手許に、金属尖端部が対称性に嘴状をした黒色の木柄エレベーター一対がある。菱形のワク内にNYの字が入ったマークが付いている。これは、大阪における齒科商店の開祖「中井齒科商店」製と思われる。同店は一九〇〇（明治卅三）年中井安之助により創立され、齒科器材の輸入販売を行った。明治卅六年には工場を開設し、治療台や棒物一般を扱ったが、昭和十三年頃營業の失敗によ

り挫折した。当該エレベーターは、大正十一年頃の製造品と推定され、木柄部に挿入された金属部の維持形態に工夫がなく、脱離し易い欠点がみられる。おそらく当時は、大学等の指導なしに独自に作られたのではなからうか。

以上の如く、わが国における木製把柄の抜歯用エレベーターは、輸入時代、模倣製作の時代、日本人向きに改善の時代を経て国産化されるに到ったが、消毒、操作、耐久性などの諸点で、全部金属製エレベーターに及ばなかった。しかも、太平洋戦争終結後は、やがて社会の安定と工業技術の急速の進歩に伴い、全く新しい金属材料による全部金属性エレベーターの登場となったため、木製把柄抜歯用エレベーターの使用の歴史に、終止符が打たれたのである。

（大阪大学歯学部）

岡山藩医学館教師ロイトルについて

石 田 純 郎

現在の岡山大学医学部の前身である岡山藩医学館が、明治三年四月に開設された時、一人のオランダ人が教師として迎えられた。彼がロイトルである。ロイトルについて私は、日本医史学雑誌（一八卷二八二頁、一九七二）等に新事実を発表してきた。昨年オランダへ行く機会があり、ロイトルについて現地調査を行った。ロイトルが岡山を去った後の消息、没した年月日、場所等について新知見が得られた。又大阪病院、ついで大学東校の教師となったボードインの生年月日が従来信じられていた日時とちがう事も判明したので、あわせて発表する。

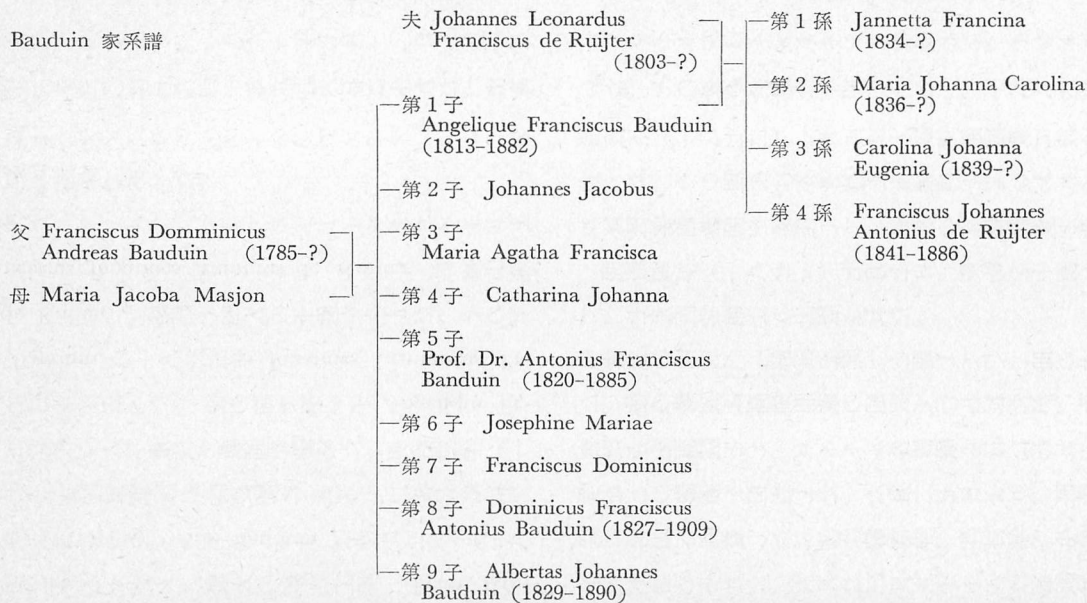
明治元年十二月（一八六八）、明治維新政府は医師免許制度の確立に関する方針を明示し、あわせて医学の研究を奨励して布告を行った。岡山藩はこれよりさき、すでに慶応三年（一八六七）正月に医学館の創立について藩医らに

諮問し、その結果を提出する様求めた。これに応じて藩医らは漢方派、蘭方派でグループにわかれて、あるいは単独でその意見を提出した。しかし朝廷と幕府の争いは、その計画を押し流してしまった。

前述の布告に基づき、岡山藩では明治二年（一八六九）十一月藩医田中玄順、中村謙輔、明石退蔵が、医学館御用掛に任命された。明石退蔵はオランダ人医学教師雇入れのため、明治三年（一八七〇）三月二十九日大阪へ赴き大阪病院の医学教師、オランダ陸軍軍医ボードインに面会した。四月一日にボードイン宅で最終取決めが行なわれ、ロイトル雇用の正式契約が四月十九日に結ばれた。

交渉の相手となったボードインは Antonius Franciscus Bauduin といい、一八二〇年六月二日生れ。オランダで最大かつ権威のある人名辞典 *Nieuw Nederlandsch Biographisch Woorden boek*. (一九三〇) では生年月日が一八二二年となっている。そのため、現在迄確認しえたオランダ及び日本の全ての文献では生年月日は一八二二年とされている。しかし今回小生が彼の出生地のオランダドルドレヒトの死亡届記録所の除籍原簿で確認した所、生年月日

Bauduin 家系譜



は一八二〇年と判明した。

このボードインは Franciscus Dominicus Andreas Bauduin の第五子としてドルドレヒトで生れた。父は商人であり、又現存するオランダ最大の鑄鉄工場「Penn Bauduin」の創設者である。A.F. Bauduin は文久二年（一八六二）九月三日陸軍軍医の時長崎に渡来し以後長崎精待館、大阪医学校、大学東校で教師を勤めた。明治三年（一八七〇）に日本を去った。彼の姉で第一子 Angelique Franciscus Bauduin は一八三三年 Johannes Leonardus Franciscus de Ruijter と結婚し四人の子供を生んだ。その第四子 Franciscus Johannes Antonius de Ruijter が岡山藩医学館へ来たロイトルで、つまりボードインとロイトルとは叔父、甥の関係であった。

ロイトルはオランダのアルフェン、アン、デン、レインのステイクト三〇に一八四一年六月六日に生れた。出身医学学校はまだ不明である。一八六一年七月一〇日から一八六七年十二月四日迄、オランダ東インド陸軍の三等軍医としてバタビア（インドネシア）のセマランで任に付いた。明治三年（一八七〇）四月にはロイトルは叔父ボードイン

と共に大阪に居た。

岡山藩医学館は明治三年春、岡山市門田東山の利光院に開設され、約六〇名の生徒が明治三年五月二三日に入塾し講義が始められた。六月二三日ロイトルは通訳高橋鼎蔵と共に岡山へ到着した。彼は解剖学、外科学、生理学、繙帯学などの講義を担当した。六月二七日より、医学館北隣の台崇寺を病院とし、ロイトルの診療も行なわれる事となった。彼の講義は高橋鼎蔵の通訳で行われたが、その内骨学の講義の内容が『解剖記聞』と題して、二冊の木版本として、七月医学館より出版された。

明治四年（一八七一）七月七日、契約を中断し、ロイトルは医学館教師を辞任して、通訳の高橋鼎蔵と共に岡山を去った。その理由は不身持とも罹病ともいわれている。明治五年（一八七二）一月には大阪箱館屋敷に彼は居住していた。その後の消息は不明であるが、一八八六年二月一日、ロイトルはインドネシアで没した。インドネシアのマランの Kloofjenglar 墓地に墓がある。

終わりに御指導、御教示いただいた岡山大学中山沃教授に深謝する。
（三菱水島病院小児科）

わが国における草創期の胆のう外科について

松 木 明 知

本邦における胆のう外科の歴史に関しては全く報告がない。

演者は日本麻醉科学史の研究のため、明治以来の医学雑誌を渉猟中であるが、胆のう外科の歴史に関して興味ある知見を得たので報告したい。

明治三十年以前には、胆石症は内科的にも診断されず、時として剖検により発見されるのみであった。本邦で最初に胆のうの手術をした一人は東大の近藤次繁であろう。

(弘前大学医学部麻醉科)

本邦における明治期の帝王切開について

松 木 明 知

演者は日本における西欧文化の受容の歴史に関して、これまで種痘伝来を具体的事項として取り上げ研究して来た。

今回は明治期における西欧医学の受容の歴史について、帝王切開術を具体的対象として取り上げる。

一昨年の本総会で、演者は明治期に入って本邦で最初に帝切が行われたのは、エルドリッヂらの明治十二年十二月二十五日であり、しかも従来児が死亡と伝えられていたが、母児共に健全であったことを報告した。

演者の調査では、明治期に全国で約一二例の帝切が行われている。

年代的に五年毎に区切って見ると、明治十五年以前は二例、十六年から二十年までは三例、二十一年から二十五年

までは二例、二十六年から三十年までは七例、三十一年から三十五年までは十例、三十六年から四十年までは十六例、四十一年から四十五年（一部大正元年含）は五十六例であり、年代不明が十六例であった。

地域的に見るとやはり東京が圧倒的に多いが、次いで九州、大阪、名古屋が続いている。北海道、東北地方は少し遅れており、例えば北海道では明治三十九年から四十一年にかけて、東北地方では、明治四十二年は山形で、四十四年に弘前で行われている。

個人的には東京の木下正中が最も多く、大正三年末まで五十八例を数えているが、その中明治期の分として明治三十五年一例、三十九年一例、四十一年四例、四十二年九例、四十三年七例、四十四年十一例、四十四年（大正元年含）七例の計四十例である。

全体的に見ると、適正としては、狭骨盤やカリエスなどもあるが、やはり炎症後の癒痕形成による軟産道の狭窄が多い。

手術術式としては経腹膜的縦切開やボローの手術が多かった。

明治三十年以前の死亡率は、母は三〇%（十例中三例）、児は六〇%（十例中六例）であったが、それ以降では少しく減少し、判明している分の三十七例について見ると、母は十一%（四例）、児は二〇%（七例）であった。

麻酔はほとんどすべてがクロロフォルム麻酔であった。

以上のことから産科領域における救急的手術としての帝切は、明治三十五年以降に全国的に行われる様になり、このことは、帝切を行える産婦人科医や外科医が、全国各地に赴任して行ったことを示すものであろう。

（弘前大学医学部麻酔科）

渋江抽斎編『直舎伝記抄』について

——とくに桐山正哲に関して——

松 木 明 知

慶大医学部北里記念図書館に、弘前藩江戸定府の医官であつた渋江抽斎の編になる『直舎伝記抄』が所蔵されている。本書について著者は既に『津軽の医史』の中でその概要を報告した。

『直舎伝記抄』は弘前藩江戸屋敷の医官の宿直日誌から抽斎が必要事項を抄出したものである。

「渋江抽斎」の報筆に際して、森鷗外が富士川游より借覧した時は八冊であつたが、現存するのは六冊のみで、他の二冊は現在行方不明である。

鷗外によれば、その内容の年代は元禄から安政に及ぶとも記し、また最古の一冊は宝永元年から天明五年、あるいはまた宝永元年から天保八年とも述べて、その記述自体が矛盾しているが、現存するものを調べてみると鷗外の記載

とは矛盾する。

『直舎伝記抄』編纂の目的は明らかでない。しかし現在行方不明ではあるが、鷗外の閲覧した一冊は、津軽の医官やそれに関係した事項が「津軽一統誌」、「津軽軍記」、「津陽開記」、「御系図三通」、「歴年龜鑑」などの誌書から抄出されたものであるという。恐らく抽斎は津軽の医史を目的とした資料として本書を作ったものと考えられる。

さてたとえ抄録でも、江戸時代の宿直医官の日誌が遺されているのは弘前藩のみであろう。この日記を通読することによって当時の医療体制の一端が窺われ、また弘前藩の定府の医師達の動向や序列などが細かに知られるので、医学史研究の資料としても洵に貴重であると言える。

『直舎伝記抄』によれば、弘前藩の江戸屋敷には常時一〇ないし一四名の表医者がいて宿直の任に当っており、近習医者に昇進すれば、その業務が免除された。

表医者になれば、その初期には数回先輩と一緒に当直する。しかし大抵は表医者が一人で宿直した。見習も加わって三人で当直することもあった。

一〇人から一四人が、一人ないし二人で宿直するのであ

るから、平均すれば一〇日に一回は当直することになる。

さて『解体新書』の翻訳に参加した桐山正哲についても、『直舎伝記抄』の記事によりその素養などが判明し、その研究は大いに進捗した。その結果は一部『津軽の医史』に発表した。

桐山が表医者となり御番見習が許可されたのは、明和七年九月二十一日であったが、『直舎伝記抄』に見える正哲の最初の宿直は同年「十月一日」であった。

次は翌明和八年三月五日即ち杉田玄白や前野良沢らが『解体新書』の第一回翻訳会を開いた日も正哲の当直日であった。尤もこの間に正哲が実際に宿直しても、その記事が抽斎によって抄出されていない可能性は極めて高い。

以来『直舎伝記抄』で見る限り、明和八年三回、九年三回、安永二年二回、三年一回、四年二回、五年四回、六年三回、七年〇回、八年三回、九年一回、十年二回、天明二年二回、三年四回、五年三回、六年八回、七年三回で、天明八年一月から近習医者となったため、これ以後宿直はせず、『直舎伝記抄』の宿直者欄にも正哲の名前は見られない。

(弘前大学医学部麻酔科)

森井恕仙とその医学

山形 敏一

文化一四年(一八一七)に創建された仙台藩医学校では大槻玄沢の医師育才案にもとずき、町医師でも学力あるものを医学校の講師(教授格)に採用していた。文政五年(一八二二)に一関藩医員佐々木中沢、翌六年に鶴岡の町医師小関三栄を招聘して蘭科を創設したのもそのあらわれである。

医学校の四代学頭に任命された森井恕仙(一七九七—一八五一)が松島周辺の町医師から拔擢されて医学校執任(病院長格)となり、次いで学頭に昇進して侍医を兼ねたのもそのような学風があったからである。

恕仙の祖先も父の名も明らかでない。世々仙台藩医員だったらしいが、恕仙の父は、恕仙の生れた寛政九年(一七七七)以前に事に坐して禄を除かれたためである。

恕仙は家学を受けたのち、渡部道可(初代医学校学頭)

と河野緝庵（三代医学校学頭杏庵の養父）より医学を学び、松島周辺で十数年にわたって町医師生活を送っていた。

恕仙は松井梅屋（初代医学校副学頭）より詩を学び、年少より詩人として頭角をあらわし、大槻磐溪（玄沢の二男、仙台藩学養賢堂学頭）より油井牧山、松井竹山とともに三井と併称されるようになっていた。

恕仙は天保一五年（一八四四）一〇月『百一堂方函』を著わし、張仲景の百十三法を正宗とし、和漢の医書を渉猟し、これに自家経験の処方を書き、一躍古方家としての名声を揚げた。恕仙が町医師から抜擢されて医学校執事に迎えられたのも当然である。次いで恕仙は黴瘡、痘疹、傷寒の治療法の三部作について撰述したようであるが、『黴治小成』（弘化四年、一八四七）しか伝えられていない。これは嘉永二年（一八四九）一〇月四日四代学頭に昇任し、次いで侍医を兼ね、嘉永四年七月五日五五歳で逝去したためであつたろうか。『黴治小成』にも経験を重んずる古方家としての恕仙の面目が良くあらわれている、

（仙台市）

来日宣教医 Wallace Taylor (1835 ～1923) いっしや

長門谷 洋 治

ウォレス・テイラーは一八七四（明治七）年に来日、在日三八年に及んだアメリカン・ボード派遣の宣教医で、同ボードのベリー John C. Berry とともに、医学面においても大きな貢献をなした。一八三五年六月十八日、オハイオ州生、ミシガン大学医学部、オベリン大学神学校卒、一八七三年按手礼を受け、同年妻とともに日本に向い、翌年元旦、神戸に着。当初神戸・大阪で医療に従事、七五年、岡山県が岡山病院へ彼を招こうとして、内務省・外務省と折衝したが、最終的に政府から妻の在住許可がおりず、この試みは実らなかった。同年、今度は京都の同志社が宣教師ラーネッド Dwight Whitney Learned とともに彼を雇いいれんとして、多少の曲折はあったが七六年三月、教師として発足初期の同志社に招請され、三年間の約束で、人身

窮理学などを講ず。当時の同志社工事の監督にもあたった。月給百円。医師である彼は生徒の健康管理にもあたり、御苑内にあった彼の家には、当時まだ珍しかった西洋医学による診療を希望する市民がやってきた。彼はこのことについて京都府に許可申請をしたが、府にこれを認めるだけの度量がなく、却って圧迫に出、七八年には彼が市民を診療し、投棄したということで新島襄を府に呼びだし、結局六月に彼を辞任させしめた。当時なお外人には種々制約があった上、仏教徒、邦人医師らの警戒心も強かったと推察される。

当時大阪でも川口の居留地以外では外人の医業は規制され、同じアメリカン・ボードのアドマス Arthur H. Adams が東区高麗橋四丁目に設けた診療所も名義は日本人医師高木玄真であった。七八年、アドマスは妻の病氣のため一時帰国することとなり、そのあとをテイラーが継ぐこととなった。そして島之内教会と密接な関係にあるやはりアメリカン・ボードの長春(ちょうしゅん)病院にも関係、実質的な経営者となった。八三年にはランニング Henry Laning により、川口にバルナバ病院ができるが、ともに八七年の

京都の同志社病院(院長ベリー)より早い発足である。長春病院からは Report of the Osaka Medical Work of the Japan Mission. ABCFM が発刊され、同院の詳しい診療統計などが掲載されている(一八八九、九一、九三年分が日本か米国にある)。彼は外科・婦人科に長じ、ことに腹部手術に優れていた。蒲原宏先生の教示によれば、英文の『成医学会医学雑誌』(SEI-I-KWAI MEDICAL JOURNAL)の一八九五年〜九六年にかけて Surgical Vivisection on the Intestines という論文を発表しているが、欧米の動向を紹介しつつ彼自身の経験をも記した当時のわが国医界を啓蒙するところ多いものである。それより先、一八八六年、同じ雑誌に脚氣についての論文 Studies in Japanese "KAKKE", or BERIBERI を発表していることも教えていただいたが、当時のわが国の大問題であった脚氣について血液学的・生理学的に追及した論文で、当時の『東京医事新誌』にも「脚氣病実験説」として発表している。一九〇〇年の Tokyo Missionary Conference では Medical Work—Its Results and Prospects と題して報告している。

一八八五年七月、中河内稲田村の大洪水時にはいち早く

出張救護に従事し、島之内教会よりも救護船二艘を出し五週間、さらに守口町に移って一カ月間、その終結まで献身、九一年十月の濃尾大地震のさいも長春病院から救護班を送った。その高邁な人徳はボード内のみならず、一般邦人にも深く大きな影響を与えた。一九一二年、七七歳で引退し帰国、オベリンで妻子とともに晩年を過し、二三年二月九日、八八歳で死亡、二五年には妻も八三歳で亡くなった。男六人、女一人の七人の子供があつたが、娘のハッティ Hattie Taylor は同じアメリカン・ボードに所属、一九一〇年来、わが国で働いた。

現在、テイラーが本国本部あてに送った報告書を解説中であり、これにより当人側からの動きの一端が明らかにすることが期待される。

(大阪府堺市)

中国伝統医学（古代）と道教

吉 元 昭 治

中国伝統医学のルーツをたずねるとき、道教との関係は従来考えられていた以上に重視されるべきであると考えらる。道教は中国で発生した。現世利益を追求し、不老長生、養生をその基本としているので、必然的に医学的部門が大きな要素となっている。更にその構成分野でもある、陰陽五行説、易、神仙説等と道家の思想（古くは黄老思想）を理論的よりどころとしている。中国医学史と道教との関係としては、医史学的方面よりは、富士川游、大塚敬節氏等の先人の優れた著作もあるが、演者は更により多方面より追求してみたい。

医学のみならず、道教と科学という問題についてはニードム氏を初めとし、科学史、技術史の方面から研究がなされつつある。

中国医学史の流れについては、王吉民氏等、三木榮氏

の、道教の構成については許地山氏のパターンがあるが、演者も中国医学史、陰陽五行説、道教等について考えてみた。素問にみる医学思想は何か、道家の思想にみられるものは何か、何故、斉といわれる地方で陰陽五行説や、神仙説が発生したか所論をのべたい。また、山海経、管子、淮南子、楚辭、史記、あるいは素問靈樞の諸篇より、道家に關与しているところもあり、更に従来考えられていたより以上、西域との關係も深いようである（考古学的、歴史学的にもいえよう）。つまり中国医学史のルーツを考えると、き単に、中国古典医書の研究にとどまらずより広い視野からみつめるべきであると思う。

道教に占める医学的部門の多いことは前述したが、道教々典の最も古いものの一つと考えられている大平經のなかにすでに充分うかがえるところがある。葛洪、陶弘景、巢元方、王燾、孫思邈、等は中国医史に名をとどめる人々であるが、道家そのものまたは道教の影響をうけている（わが国の医心方もまた然り）。また李時珍も奇經八脉考でものべるところがある。道教の修練は大きく、外丹と内丹とにわかれるが、前者は鍊丹ともいわれ抱朴子にくわしい

が、中国薬物学（本草学）に影響を与え、後者は精神修養に重きをおき、禪ともよく似たところもあり、いわゆる仙道として、現在までつづいている。その小周天、大周天は任脉、督脉を重視している。黄庭内、外景經は道教的解剖学ともいえよう。更に道藏、道藏輯要のなかに、黄帝内經素問、靈樞、八十一難經、肘後方、千金方等を初めとし、薬物、導引、胎息、養生、更には房中、符、呪（この二者は現在の心理的療法に通じるところもある）等々の典籍があるとところより、道教医学ともいえよう。更に日本に対する影響についてもみてみたい。

（北里研究所附属東洋医学綜合研究所中研究室）

第四回内国勸業博覧会の歯科出品物

第一報 歯科器材について

大 橋 正 敬
仁 平 真佐秀

われわれは、さきに政府主催の第一回（明治十年）、第二回（明治十四年）、第三回（明治二十三年）の各内国勸業博覧会および東京府主催の東京府工芸品共進会（明治二十年）に出品された歯科製品とその審査結果について報告した。すなわち、第一回博覧会の歯科器材出品物のほとんど義歯であり、第二回博覧会では義歯のほかに抜歯器のような簡単な歯科用器具出品物があり、第三回博覧会では、二十名の出品者によって歯科用反射鏡、歯科用椅子、足踏エンジン、抜歯器、義歯などが出品され、殊に前二回に比べ歯科用椅子や足踏エンジンなどの器械類がはじめて出品され、回を重ねるごとに歯科器材の進歩が認められた。

今回は、明治二十八年四月一日より同年七月三十一日まで

で京都で開催された第四回内国勸業博覧会の歯科出品物のうち、第一報として歯科器材について、同博覧会事務局編集の資料を調査したところ、次のような新しい史実を明らかにすることができた。

(一)内国勸業博覧会として今回はじめて歯科用金箱、アマルガム合金、蒸和釜、レーズ、ブローパイプ、咬合器などが出品された。

(二)歯科器材の出品者は十名（このうち堀内清頭は義歯の出品者でもある）で、若林唯造、堀口弥吉、松本儀兵衛および大溝筆吉の四名は前回に引続いて二回目の出品であった。

(三)清水卯三郎は、今回はじめての出品であったが、歯科器材四十点（約半数は堀口弥吉製造）と大量に出品し、当時の活躍が特に顕著であった。

(四)若林唯造は歯科手術用椅子と器械用簞笥、堀口弥吉は歯科用エンジンと往診用器械箱を出品した。蒸和釜の出品者は清水卯三郎と八神幸助（中沢寅吉製造）、歯科用金箱の出品者は清水卯三郎（辻村鉄之助製造）と鈴村福、アマルガム合金は清水卯三郎と堀内清頭で、他に抜歯器の出品

者が五名あった。

(四) 当時のわが国の科学技術より外観的な模造の容易であった歯科器械器具の出品は多かったが、化学的知識を必要とした歯科材料の出品は少なかった。

(六) 歯科器材出品者で、歯科専門業者は清水卯三郎、若林唯造および堀口弥吉の三名であった。他のものは歯科器材も製造したが、一般医療器械器具あるいは金属箔類を専門とする業者であった。

(七) 義歯の出品者は八名で、そのうち、歯科医師は堀内清顕だけであった。

(八) 出品の義歯はほとんどゴム床義歯および陶製義歯で、従来の木製義歯の出品はわずか一名だけであった。

(日本大学歯学部歯科理工学教室)

何故 W・ウィリス医師は江戸で高い俸給をのぞんだか？

原口 忠男

(註、訳文の責は筆者にあり、又文中の「・・・」はその長短に拘らず、文章の省略を示す)

日本医史学雑誌第二十六巻第一号に、主に太政官公文書より引用して「ドイツ医学採用前の別な事情(一)」と題して当時の様子を表現したが、今回は Public Record Office, London の記録の中の主にウィリス医師に関する記事をあげ当時の日本を考え、又ウィリスの人間性にふれたい。

「一八六八年十月二日 江戸。東久世よりパークス卿へ F・O・46/97」「・・・三条左大將はウィリス医師が越後に戦傷者を訪ねる事を許されるかどうか心配している。・事情は差し迫っている・・・」と政府から正式に英公使に、同医師の医療扶助を依頼している。

「一八六八年十一月十三日、ウィリス医師のメモ、新発

田に於て日本人戦傷者に医療扶助をして、F・O・46／98」「……ここで非常に重い梅毒症例をいくつか見た。

……英国では幸運にも稀でしかない。……ここで会った多くの医師は漢法で……銃創に使う無効な複雑な膏薬を放棄し、ヨーロッパ外科の長所をすばやく認める事を望む。……欧州医学の日本人への唯一の指導者たる和蘭医師を控え目だが非難する様な観察を意味する。長崎で教育された医師が実地の練習を持たず、多くの点で彼等が侮る漢法医と同様に無力な事は明白だ。……受傷の捕虜を一人も見ないのは残念で結論としては受傷した敵を無差別に殺す事を政府は許しているかと。私は三つの目的が達せられる事を望む。多くの不幸な戦傷者の医療と医療扶助の完全な中立性と慈悲の教訓。日本人の心の中に戦争の実行とつながる惨酷で無茶な人命の犠牲を軽減する為私の努力が全くの無効ではないだろう……」と日本人の心中に惨酷性ありと見ていた。三つの目的即ち戦傷に対する医療と医師に対する外科学の実地指導及び戦争当事者双方への完全な中立性の維持、更に慈悲の精神の教示はパークス公使と意見一致していた様である。

「一八六八年十月十七日ウィリスのメモ、江戸から高田へ、F・O・46／98」「……小便所として使う桶は家の隅の地中に埋めてあるので室内汚染し、住民の非衛生的な習慣となる。町や大きな村に女郎屋があり梅毒が流行す……飲料水は家からの下水を含み汚い。日本人は空気と水とに全く無関心に見える……」と行軍中の沿線問題に関心を示す。

「一八六九年一月二十五日 東久世中将（外務卿輔佐）よりパークス卿へ、F・O・46／107」「ミカドは欧州諸国の水準まで総ての分野の医術を日本の医師に習わせる為、西欧諸国のやり方で医学校と病院の建設を望んでいらる。すごい名声の英国の医師ウィリスは数年この国に住み我國の言葉をよく知り、人々の感情を理解する……土着の医師だけでなく戦傷者も亦最も深遠な感謝と尊敬を彼に対して感じている……。あなたは医術の総ての部門で此の紳士が教授する事に一年間従事するのを許すだろう……我が政府は将来彼に報酬を支給したい……」と依頼状を出している。一方、

「一八六九年二月八日 ウィリス医師からパークス卿

へ、F・O・46/107」……私は日本政府から病院と医学校を建てるための手伝いを一年間する様依頼された。

……政府から私に適する程の給料が払われるだろうが、之がないとその地位に伴う当然の経費に応じる事は不可能だ。……殆んど医科学のない日本で問題の奉仕をすれば彼等に恩恵を与える上、同時にこの国での外国人に対し最善の利益を増進すると思わざるを得ない。……私は従軍中の奉仕に何等金銭の補償を受けなかった。逆に従軍中かなりの経費（もてなし・贈物及び会津での戦傷者への差し迫った必需品）の支払をさせられた……。ウイリスは病院医学校の経営に広範囲の経費を想定したと思われる。又日本の役人の公金に対する態度を批判しているだけに、自らには厳正である為に充分な給料を望んだのであろう。

まして彼は蘭医よりは一層強く医学の実技教育の重視と衛生問題の改善を主張している点で高給に値するという自信があったろう。石黒忠恵男の実歴談（雑誌太陽第五卷第貳拾参号三四頁明治三二年）に「……そこで此時はウイリス氏は月俸八百弗にて大病院を主宰し、太政大臣三条公なり大学別当山内容堂侯なり、皆親密の交際を結び威勢堂々た

りしに……。」と当時のウイリスの勢をのべている。

ウイリスの所在に関係なく、英国の日本においての経済的収益は順調に進行しているのを見ても、彼の医療援助は第一義的には時々彼が述べている通り、国際的な友情と日本福祉を望んでなされたものと思う。

（魚籃坂病院）

『鼈氏内科学』について

安 井 広

『鼈氏内科学』三巻は初版は一八九三年（明治二六）七月から一八九四年二月にかけて出版され、その後増補され、一九〇二年（明治三五）二月から一九〇三年一月に第六版が発刊されている。本書よりさきに一八八二年（明治一五）から『内科病論』三巻が刊行され、これも増補されて版を重ねているが、『内科病論』が学生に講義をするためのメモを翻訳したものであるのに対し、本書は著者が“Lehrbuch der Inneren Medicin mit besonderer Rücksicht auf Japan bearbeitet”として独文で全文を書き、これを馬島永徳、本堂恒次郎、土岐文二郎が翻訳したものである。上中下三巻六冊から成るが、上巻は一、血液及新陳代謝諸病、循環器病 二、伝染病 中巻は一、呼吸器病 二、消化器病 下巻一 泌尿生殖器病 末梢神経病 二、中枢神経病 中毒を扱っている。著者は緒言で「抑モ医ノ

道タルヤ実業ナリ。技術ナリ。医者ノ業務ハ只病ヲ学ビ、病ヲ知ルノミニアラズ。学ビテ知リタル所ヲ実地ニ応用スル事、即チ人ヲ療シ病ヲ防グ事其ノ本旨ナリ」として「学説及ビ理論ハ短簡ニ論ジ去リヌ」と言っている。第二版の序で「診断ニ関スル各項ハ之ヲ集成シテ別ニ診断学テフ一書ヲ成シ」とあつて、一八九六年に『鼈氏診断学』二冊が刊行された。第三版では「特ニ神経編ハ大ニ改補セリ」とあり、四版序には「伝染病ヲ増補シ、上巻ヲ二冊トシタ」とある。第五版が出版された一九〇一年（明治三四）三月には著者は三回目の帰国中で同年九月に帰任した。翌一九〇二年東京大学を去り、宮内省御用となつたのであるから、第六版が出版された一九〇三年（明治三六）にはすでに東京大学に籍はなかつたのであるが、この年に発表された三浦謹之助らの回虫の不受精卵に関する記事などが収載されている。

なお著者にはほかに一八九〇年（明治二三）三月—一八九二年七月刊行の『鼈氏内科全書』七巻一一冊があり、詳細な内容のものであるが、呼吸器病篇のみで終わっている。

つぎに本書の中から特異とすべき記述を二、三挙げる。

循環器病のところで「レントゲン光線ニヨリ余ノ検証スル所ニヨレバ深吸氣ノ際心臓ハ稍々直位ヲ取り中心線ニ変位ス」とか、またレントゲン透視で大動脈瘤と診断したものが誤診であった例などを述べている。著者は一九〇一年に帰国したが、そのころドイツでは発見されてもないレントゲン線を医学に応用する試みがさかに行われていたもので、日本に帰任後レントゲン診断を行なったもので、おそらく日本では最初であろう。

伝染病では著者は猩紅熱や発疹チフスが日本にもあることを最初に報告し、本書に取り入れている。一八九〇年（明治二三）以後の流行性感冒の大流行の経験に基づいて「殊ニ格段ニ記載セザルヲ得ザルハ流行性感冒ニ繼発スル肺勞ノ驚クベキ多数ナル事之ナリ。然レドモ未ダ嘗テニ論及セル者ナシ」と言っているが、これは極めて重要な発言である。

そのほか日本人の食生活についての考証、婦人の帯溝についての記述などいずれも先駆的な業績である。

（愛知・吉良町）

昔のX線界の周辺

沼田 久次

私は昭和二年二十四歳でX線の途に入った。X線発見後三十余年がたっている。然しX線の状態は現在からみると序の口という有様であった。しかしX線管の焦点もない時代から営々と研究せられ、既に医療に活用できるまでに進歩させた先輩の偉業は高く評価さるべきである。この頃ある人からX線の神話を学会で発表してはどうかという話があった。神話という意味はすぐ理解できたが、同時に自分は既に神話の時代の人間になっていることに気がついて驚いた次第である。そこで実験を伴わない話なれば他の学会よりは本会の方が至当であろうと考えて本題を提出したのであって、尽く過去の経験かあるいは見聞したこと、やがては消滅する類のものである。

二十四歳の青年の一病院内のことであるから視野はせまいが、当時の斯界の一端を示していることと思う。

X線の装置、構造及びその購入、被曝のこと、管球について、X線の測定、癌患者の治療などについて、現在の頭で観察してみることとする。私は子宮癌を治療する病院へ就職した。我国でも又世界でもはじめてのX線技術者を養成する学校ができて私はその第一回生であった。それまでは病院で手のすいた若い人に教え込んでこの仕事をしているのが普通であるが、専門の教育をうけた人だということに幾分か注目されたい。しかし若い者がいきなり婦人科の病院へ飛び込んだのであるから変な気持ちであった。そこには独・米製の二台の装置があった。X線のわかった人は一人もいないで毎日十名近くの癌患者の治療を行っていた。

この理由は唯一人のX線の詳しい先生が転出されて、そのあとは操作方法だけ覚えて細々とやっている所であった。私は指導者も先輩もないままにここで十年余り仕事をしていたわけである。その間のX線室、装置、管球及び操作について話したいと思う。

当時クーリッジ管が実用に使用され始めた時であったが、深部治療専門の病院にガス管球が十個ばかり保管して

あった。どうしてこんな物があるかをいろいろ調べたがその理由がわからないまま五十年が過ぎて、この程ある古い先輩にこの話をしたところ、「往時はX線装置を購入するとガス管球数個をおまけとしてつけてくれる習慣がなくて、多分そんなことでサビ品として貰ったものだ」という話でようやく私も納得したことであった。

X線の測定のことであるが、私の第一の仕事はX線の質と量とを確かに行うことであった。これなくして多くの研究者がX線を動物に対して、又人体の種々の器官に対する実験をするのに甚だあいまいなことになるからである。X線の波長、物質の吸収、深達量などである。ここでのなみは不安定な測定器を以って確かなことを出さねばならぬ立場にあったなやみである。以下はここでは省略する。

一つだけ今と大いに異なる点をあげると、当時红斑量というのがあった。皮膚のやける色具合によって照射量をきめるのであるが、X線を差当って自分の四肢などに照射してみても、その皮膚の反応によってこれを行うことがあった。

どうせすきで入った仕事であるから幾分の傷害があることは覚悟の上だという、現在では考えられない意気込みと

いうものがあつた。

最後に、今日の放射線技師についてであるが、昔は徒弟制度とでもいうか、先輩について見習をして仕事を覚えたが、今日では修業年限三年の高度の教育が施され、更に厳重な国家試験が課せられている。技師の手がなければ放射線科の運営ができない存在である。にも拘らずその待遇では物心両面において十分でない現況である。現在二万に近い技師がいるが、そのうち医学博士四名、農学博士一名がある。この学位持五名は特殊な環境で学位をとった人々であるが、もし放射線大学あるいは放射線学部ができて、せめて学位をとる機会を与えるならば精神的にでも優遇することになってこれは放射線学の進歩にも大きく影響することとなると思う。男子が一生をかけて働き得る職場にしたいものだと考える。私の知人に井上喜代太君という人がある。彼は技師であるがX線医学の特訓を敢行して、医師会の協力のもとに小倉で放射線科を開業した。会長初め大方の医師から感謝されて三十余年つづけ、この程引退したが、彼は単にX線の撮影だけでなく、相談をうければX線フィルムに代つて納得がいくまで読影の相談に応じ、しか

も医師の領域を一步も侵すことはなかった。このいき方に反対の人に対して会長は「我々はいいいX線室をもっているが、そこへ行く廊下が少し長いと思つてすませたらどうか」という答だったという。医師と技師が一体となつてX線からよりよい情報を得る一つの方法である。うるわしい話ではないだろうか。

(沼田医学研究所)

痘瘡および麻疹史資料への疑義

赤斑瘡は概ね室町時代の中期（『親長卿記』⁽²⁾（長享三年—

一四八九—の流行）まで史書にその名が頻出する。

三 井 駿 一

二 天平九年の勘申

一 赤斑瘡の来由

天平七年（七三五）と同九年にわが国を襲った大疫に対し、それぞれ豌豆瘡（痘瘡）、赤斑瘡（麻疹）と異った病名が決定されていることは、当事の典藥寮の医学水準を世界に誇示するに足るものと評価しえる。

二種の病名のうち、前者は『病源論』（六一〇頃）、『千金方』（一六八二）、『外台秘要』（七五二）、『聖恵方』（九二二）にそれを容易に見出せるが、後者についてはこれらの諸書に、斑、斑瘡、赤斑、発斑、発斑瘡の名がしるされるだけで赤斑瘡は存しない。

したがって典藥寮の命名は天平七年の流行病に対しては中国名をそのままに踏襲したに反し、翌々年のそれには独自の病名を新造したものと想像を許そう。

『朝野群載』（一一四七）に収載せられる「典藥寮勘申痘瘡治方事」はそれが天平九年六月の日付を具えていることから、この年の流行病を豌豆瘡とする根拠ともせられているが、別に同年六月廿六日付の太政官符が『類聚符宣抄』（一〇九三—一一二二）に転載保存せられ、これには明らかにその流行を赤斑瘡と決定する。

二通の文書は形式、内容とも相互に異質で混同を避けるため、その相違点を要記すると、一つは典藥寮の勘申（答申）であり、他は太政官符（地方行政官庁への通達）であること、2. 病名に痘瘡と赤斑瘡の別があること、3. 薬治療法に対する基本指針を全く相違すること、すなわち、前者ではいくつかの処方为例示されるに拘らず後者では薬物療法を排撃する。

したがって、この二通の文書は同一流行病を対象として

作製されたものと考えすることはできない。また典藥寮の答申と背反する内容の太政官符が流行地に向けて通達されることはありえないであろう。

しかし、勘申を天平七年の流行時のものとし、官符をそのままとすればこの矛盾は全く解消する。すなわち、勘申の末尾にある天平九年は天平七年の誤字と断定できるのである。なお題名に見える疱瘡の病名は仁寿三年（八五三）の流行以後の用字であるので、当然豌豆瘡と改めるべきである。

三 虜瘡は痘瘡か麻疹か

虜瘡は現在痘瘡に当てるのが通説である。しかし、この名は『肘後備急方』（葛洪—二八三—三四三頃、陶弘景—四五六—五三六）とそれからの引用を明らかにする『外台秘要』に遡ることができるが、両者の叙述は必ずしも一致しない。すなわち、現存の『肘後』は虜瘡を時行と呼ぶに對し、『外台』では天行発斑瘡とし、その他の措辭にも異同がある⁽⁴⁾。

時行は特定の伝染病を指定するものでない。発斑を『病原論』について検すると、時氣、温病の条下に見え、斑瘡は傷寒、熱病条下に、また斑毒は小兒雜病下に記述がある。これらの諸候が痘瘡でないことは、別に登⁽⁵⁾（豌豆瘡、疱瘡の条を立てていることから明瞭である）。

『外台』の引用は虜瘡を發斑瘡に同定していることで特異である。編者王焘は原典からの忠実な抽出を意図しているので、この同定を『肘後』にまで遡らせることに抵抗はない。

時代を下って『聖恵方』の熱病發斑諸方の条には「須臾ニシテ遍身シ、皆白漿ヲ戴ク」とし、『肘後』の原文に相似の解説と、同一処方載せるが、その典拠は示されていない。すなわち、『聖恵』もまた虜瘡を麻疹と理解する。

『肘後』の虜瘡の記事が葛洪の手になるか、陶弘景の増補に出るかは遽かに決定しがたい。しかし、麻疹皮疹が紅斑（赤斑）に終るもの、壊死状（黒斑）を呈するもの⁽⁶⁾の他に、漿液を盛るものがあることが許容できれば虜瘡を麻疹とすることに不自然はあるまい。

注

1 典藥頭（くすりのかみ）は物部韓國広足（『続日本記』）

2 『大日本史料』 八輯二八 頁二五八

3 本誌 二四卷 頁一九一—一九三 昭五三

4 『外台』の引用は『肘後』直接と張文仲（？一七〇〇）の著者からの引用を併せ載せる。現存の『肘後』では連続して一節となつてゐるのに、わざわざ重引した理由を明らかにできない（『証類本草』一一〇八—一一一六—升麻の項に同じ部分の引用が『外台』からなされてゐる）。『肘後』のこの条に見える建武と永徽の年号について范行準は『中国予防医学史』（一九五五）で、前者を四九五年、後者を元徽の誤りとし、四七六年と断定する。

5 多紀元簡（一七五五—一八一〇）『医賸』卷中 頁八

6 『千金方』傷寒例第一に、「ソノ熱ノ微ナルモノハ赤斑出ヅ。コノ候ハ五死ニ一生ス。劇シキモノハ黒斑出ヅ。コノ候ハ十死ニ一生ス」との華佗（二〇〇頃）からの引用は、麻疹について述べられたものであろうか。

（帝塚山学院大学）

明治当初の死亡届

内田 醇・田代 逸郎

死亡届の書式に関する由来、資料を詳かにしないが、宮崎県においては明治廿一年八月廿五日県令第五十二号開業医取締規則第七条

「施療の患者死亡したるときは第一号書式に拠り死亡届を其家族又は親戚隣佑等に授与すべし」

に示されたのが最初である。この書式は「医制八十年史」などにも図版で例示されている所謂明治初期の死亡届と同一のものである。

これ以前は恐らく明治七年八月十八日の医制四十五条

「施術の患者死去する時は医師三日以内に其病名経過の日数及び死亡する所以の原因を記し—虚脱痙攣窒息等の類を云う—医師の姓名年月日を附し印を押して医務取締に出すべし」

明治八年五月十四日の改正第二十四条

「……………医務取締及び病家に出すへし」

に依って何等かの届出がなされたものであらうと想う。

たまたまこの届出と推察される資料を入手出来たので御
教示を乞うものである。

医按一道

長崎金屋町

松井 ヤマ

年七十三歳

九月三日午前第十二時金子保五郎宅ニテ患者有之ヲ報ジ
治療ヲ請フ即チ一診セシニ從來度々大患ニ罹リ殊ニ老衰即
今必止脈細数ニテ不整嗜眠シテ醒覺シ難ク傍觀者云フ黒色
ノ便ニ粘液ヲ交ヘ自下利シテ知ラズ玆ニ於テ興奮劑ヲ与フ
レトモ奏効ナク午後一時ニ斃ル

第一大区八小区三ノ四百三十六番屋敷

士族 邦成長男

明治八年九月四日

福島 度識 ㊦

(宮崎市)

仏典にみえる健康観と特異な症候群

杉 本 茂 春

妙法蓮華経随喜功德品一八、「世々無口患齒不疎黃黒 唇
不厚褻欠 無有可惡相 舌不乾黑短 鼻高修且直 額広而
平正 面目悉端嚴 為人所喜見 口氣臭穢」、「口の病氣に
罹ることはない。舌は痛むことなく、齒が抜け落ちること
はない。また、黒くなったり、黄色くなったり、不揃いとな
ることもなく、また、唇は醜くはならぬ……」となつ
て、齒・舌・唇・口の病氣に罹らないことを肉体的な健康
の第一条件に数えている。

妙法蓮華経莊嚴王本事品二七、「齒白齊密常有光明 唇
色赤好 如頻婆菓」、「口の中にはよく揃った齒なみが輝や
き、ビンバ果のような唇を持ち……」となつて、齒・唇の
整った健康を讃美して、健康観を飾っている。

これらの健康観をうけて、最も醜い症状、牙齒疎欠を先
頭にした一連の症候群がある。

妙法蓮華經普賢菩薩勸發品二八

牙齒疎欠 Hutchinson's teeth Mulberry molars

醜唇平鼻 Mucocutaneous lesions about nose, mouth and

anus, Saddle nose

手脚繚戾 (Periostitis, Osteoperiostitis)

眼目角眊 Chorioretinitis Optic atrophy Iritis

身体臭穢 Maculopapular rash Rhagads

惡瘡膿血 Mucous patches

水腹短氣

諸惡重病 Meningitis Periostitis Hepatitis Jaundice Spl-

nomegaly Nephritis Fever Hemorrhage

とあって、さながら梅毒の皮膚科的所見、先天性梅毒の症候群と重なってくる。しかも「短氣」は喘息・肺結核または精神病と訳出されて定説がない。「夭折の兆候」と理解すると、自ら癩との鑑別を示している。

金光明最勝王經除病品二四「衆生有四病 風黃熱痰癰

及以總集病 云何而療治 何時風病起 何時熱病発 何時

動痰癰 何時總集生」と、疾病理論の四原則を問い「病有

四種別 謂風熱痰癰 及以總集病 応知発動時春中痰癰動

夏内風病生 秋時黃熱増 冬節三俱起」と素朴な病理論

を展開している。また「風熱癰俱有 是名為總集 雖知病

起時、応觀其本症」と、風・熱・癰、それぞれの症状を

二・三合併具備するものを總集と名付ける。そして、好発

時期の如何にかかわらず、その本症を觀察すべしと喝破し

て、特に季節的に好発する伝染性疾患の他、随時随所に発

生する伝染性疾患の存在を思わせる記載となっている。

さらに「謂味界血肉 膏骨及髓腦 病入此中時 知其可

療不」と、可治・不可治の判断にまで説き及んでいる。

「驗其無死相 方名可救人」と可治の症状を説き、不可

治の症状は

諸根倒取境

尊医人起慢

親友生瞋恚

是死相応知

とあって、現代の新精神医学は、とにかくあらゆる精神病、特に中年後に起こった精神病の場合には、まず、進行麻痺を考えることであると結んでいる。しかし、原因として梅毒菌を知らなかった当時は、ノンネ Nonne の四反応

を検する術はなかった。

左眼白色変 角膜実質炎

舌黒鼻梁皸 鞍鼻

耳輪与旧殊 耳朵の血腫

下唇垂向下 動眼・滑車・顔面神経麻痺

とあつて、これら死相をあらわす症候群を勘案すると、脳梅毒又は先天性梅毒にせよ麻痺性痴呆を思わせて、梅毒の精神科の所見と重なってくる。

大般涅槃經一八

数寒数熱 虚脱発作 体温下降 体温異常 発熱

骨節疼痛 関節症 骨膜炎 骨膜骨髓炎

目赤流淚 動眼・滑車・顔面神経麻痺

耳声聞外 耳鳴 幻覚症

咽喉結痛

舌上裂破 舌・口腔粘膜障害

其色正黒

頭不自勝 頭重 頭痛

体枯無汗 汗・脂の分泌異常

大小便利 便秘

閉塞不通

身卒肥大 体重の減少または病的増加

紅赤異常 血管運動麻痺による充血

語声不均 言語障害 発語異常

或癡或細 言語失調

挙体斑駁 丘疹蕾疹 バラ疹等発疹

異色青色 悪栄養による貧血 Malnutrition Anemia Hepatitis

Jaundice Splenomegaly Nephritis

と記載された症候群は、近代精神科学、内科小兒科学の説く梅毒性症候群と甚だ相似している。

薬物として、訶梨勒 (*Terminalia chebula*, *Terminariae Fructus*, *Mirobalanum*) 北インドから南方地に分布するシクンシ科の果実があげられている。風 (*Vāta*)、熱 (*Pitta*)、痰 (*Kapha*)、総集 (*Saṃnipāta*) で、インド医学の病理論と一致している。

(大阪歯科大学)

金沢における明治初期の体温表

寺 畑 喜 朔

演者は金沢大学医学部百年史の編纂に従事した際、貧病院における三測表と題して一枚の写真を百年史に転載した。（＊明治三年金沢大手町旧津田玄蕃邸に金沢医学館と病院が開設され、卯辰山養生所を貧病院と称した。この貧病院は明治六年卯辰山から殿町へ移転した）。この三測表（金沢市松本三都正所蔵）は二葉からなり（和紙三・五・〇三×二二・五三）、February 1876, Yagi 40 jaren geb. boer te Nagasaki (Kango), 八木長右衛門、貧院と記されており、明治九年二月二日午後から同月二十四日午前まで体温、脈搏数、呼吸数を記録したものである。この三測表から如何なる疾病であったかは推測できない。

金沢における明治初期の外科治療について検索中、藤本純吉記述による「外科患者治驗録」（藤本文庫）の中に陰茎梅毒性表皮癌の症例を発見した。対象患者は農民八木長

右衛門である。本症例はつぎのごとく記述されている「患

者自言フ十六歳ノ時ヨリ麻疾ニ罹リ膿ヲ排泄スルコト多ク又時トキハ出血スルコトアリ而是慢性ニ陥リ二十年間余依然トシテ治セス今ヲ去ルコト六年前ニ当テ陰茎ノ前皮ニ小瘡ヲ発シ敢而疼痛ナシト雖衣服ノ摩擦ニ由テ剝脱サレ其部潰瘍面ニ陥リ爾后漸々陰茎腫起疼痛ヲ発シ且利尿困難ヲ起スト今ヨリ四年前ニ当テ其潰瘍面漸々増大シ丈龜頭ノ梢上部ニ於テ潰瘍深部ニ侵蝕シ利尿ニ当テ其部ヨリ尿ヲ洩シ漸々固有ノ尿孔狹窄シ方今ニ至テハ全ク填塞シテ只新尿孔ヨリノミ洩セリト其初小瘡ヲ発シテ后潰瘍ヲ来セシヨリ白日ハ疼痛ナク作業ニ妨ナシト雖夜間ニ当テ疼痛ヲ発シ時トキハ安眠シ難キト屢々之アリト明治八年一月廿八日当院ニ入室シテ治ヲ乞フ 保爾篤児満氏（*Holtzman）診テ左法ヲ与フ 幾那皮煎八写 毎時一食匙、乳酸鉄一錢 沃剝一錢 健質亜那X 枯倫僕末各適宜 右為六十九三回五粒宛

患部ハカルボルシュール二「ペルセント」ノ者ヲ貼

ス 二月二日午后陰茎及両辜丸ヲ切除シ后縫合ス（是レ纏糸法アリ結節法アリ）且終カテーテルヲ挿入シ置キ利尿セシム同四日朝縫合糸ヲ除去ス而其創面膿ノ排泄過多ナル

カ故ニ一日数回微温水ヲ以テ注射シ后カルボルシユール二
ペルセントノ者ヲ貼ス二月十一日体温四十度ニ昇リ脈搏百
三十動ニ上ルヲ以テ左法ヲ与フ 硫酸規尼涅二十四氏為三
包朝昼夕一包宛 同廿三日体温脈搏殆ント平常ニ復スルヲ
以テキニーネヲ止ム」以上が三測表に対応する病状経過で
ある。

引続きこの患者は入院治療を受けており、つぎのように
記録されている。「三月八日創面ハ漸々小トナリ治ヲ趣ク
ト雖創縁ノ周囲爰彼ニ小ナル結節状ヲ触ル保兒篤爾滿氏日
是レ恐クハ癌結節ナラン故ニ若シ之ヲ除去セズンバ創面ハ
癒合ストモ不日ニハ亦再発スルナラント同日午后三時頃其
創面ノ周囲ノ皮膚等ヲ二拇横徑斗圈状ニ切除シ后五箇ノ縫
合ヲナス但シ一箇ハ結節縫合ニテ四箇ハ纏糸縫合ナリ而カ
テ一テルヲ挿入シ置ク事前ノ如シ同十日縫合中間ニ絆創膏
ヲ貼シ后帽針ヲ除去ス同十一日絆創膏及縫合糸ヲ全ク除去
シ清潔ニシタル后絆創膏ヲ貼ス此時創面ノ上方稍第一癒合
ヲナセリ同十三日絆創膏自ラ剝脱シ創面全ク開綻ス故ニ一
日ニ數回微温水ヲ以テ清潔ニシカルボルシユール二ペルセ
ントノ者ヲ貼ス同十九日未タ創面全癒セスト雖モ漸々快方

趣ク由テ患者ノ望ミニ任せ出院ヲ免ス」

つまり、本例はホルトルマンの一手術治療例であり、三
測表の実在との関係が明確である点で貴重である。外科患
者治療録（明八・一二—明治九・九）には本例のほかホル
トルマンが関与した症例が十五例余記載されている。

金沢医学館（明三—八）にはスロイス、つづいて金沢医
学所（明九—一二）にはホルトルマンがお雇い外国人医師
として、金沢で医学教育を担当した。彼等の外科関係の講
義録（いづれも藤本純吉筆記）として、スロイス講義録で
は軍陣治療書、外科手術論、眼科手術学抄、ホルトルマン
講義録では外科各論卷一—六、外科手術学卷一—六があ
る。このように講義録が存在しながら、この方面の実地治
療の実証は今日まで不明であった。その意味で藤本純吉の
外科患者治療録はきわめて貴重なものと云える。

今回は二枚の三測表と治療録をめぐり、当時の金沢にお
ける外科治療の断面を分析し、評価を加えたい。また、ホ
ルトルマンの全般的な外科治療の実績については次回に報
告する予定である。

（金沢医科大学）

アテナイの疫病

羽 田 回

病気の横綱格である疫病は古来より文明を破壊し、人心を荒廃に導いてきた。

かくも重要な疫病の出発点が紀元前四三〇年の「アテナイの疫病」であることに異論はないのだが、遺憾ながら現在に至るもその正体は謎のままである。

古代史に名高いペロポネーソス戦争のさなかに発生し、当時の史実家のトゥーキュデデースによってその病態が詳細かつ的確に記載されたにもかかわらず、その疫病が何であるかの結論は現代の史実家によって異っている。ある者はベスト、他の者は天然痘、更には発疹チフス、果ては麻疹か麦角病などと意見が分かれ、その正体は現在に至るまで謎のままであり、恐らくこれらいくつかの疫病が同時に発生していたのであらうと結論されている。

しかし、トゥーキュデデースの病態内容が極めて的確

であり、その著書「戦史」が近世の碑文学や考古学の資料が明らかにしたように正確無比に違いないと評価するならば、現代の史実家の言うようにいくつかの疫病をごちゃまぜにして記載したとの結論は到底納得できるものではない。

演者は昭和四八―五四年までの大阪市立桃山病院感染症センター在職中「腸チフス」に異常な興味と情熱を覚えるようになった。

頭の中から爪先までの全身を犯す多彩にして苛酷な病状や、あらゆる他の感染症の発熱をすべて包括してしまいう一日から、如何に抗生剤の乱用の為とは言え半年以上も続く不可思議な発熱などからみて、チフスがひょっとしたら「原点の病気」ではなかるうかと疑われたからである。

「腸チフス」は古代から中世にかけての華々しい疫病史には登場しない程、更に今日に至るまで予防接種の是非やその特徴的な自他覚所見の本態が不明な程、何も判っていないし、難解な病気である。

演者は「腸チフス」の検討を続けるうちに、チフスは腸の病気ではなく「肝チフス」と言うべき肝臓の病気ではな

かるうかと考えるようになり、臨床データーに些かながら動物実験をそえて、昨年の感染症学会総会、ビタミン学会総会、肝臓学会西日本支部総会で「肝臓を中心としたチフスの発生病理」についての発表を行なってきた。

「チフス」として肥握すれば、チフスの遅脈、バラ疹、白血球減少、脳症などの特徴的な他覚所見や、症状を欠く発熱や、頭痛、倦怠感などに始まる自覚症状などが明快に説明されるし、チフスの隅から隅までを見通すことも可能であり、更に「実験チフス症」に生涯を賭けた小林六造博士のように一匹のチフス菌に化身して全身を洞察することも夢ではない。

演者は「アテナイの疫病」が「腸チフス」であろうと推論している。

発病初期の結膜炎、齒齦炎、口腔出血などのビタミン欠乏症状、筆舌を越えた嘔吐と恐らく低カルシウム血症によるテタニーに基づく痙攣、近代に水浴療法が試みられた程の激しい熱感、生きていても身のおき所に困る程のそれこそじっとしても体を動かしてもどうしようもない程の倦怠感、高熱が続くの急に悪くなり死ぬこともなく七―八日

目を過ぎると治ってくる者もあり、何か抵抗力（免疫）がついてくるような病気であり、しかも回復期に腸の潰瘍を合併すること、極期の恐らく低血糖症と高アンモニア血症による脳症の後遺症とも言わべき痴呆と不能、チフスに必発すると言われた糖尿病に基づくと思われる激しい口喝や記載の地味な発疹に伴なう二次感染（膿疱）、多彩なチフスの症状で目立つ呼吸困難の欠如などはまさしく両者の一致点を示している。

流行初期に毒でも入れたのではないかと疑われた如く、激しい口喝と熱感、貯水池、泉などの水を介しての貴賤、老若男女を問わない広範な伝播を暗示する。

家きん類が人肉を喰い死んでいったのは恐らくサルモネラ菌血症（動物では人チフスを起さない）の為であろうし、触ればすぐうつるのはどんな疫病にも当てはまらないものであり、その惨状からみて、伝染力の極めて強いことの過剰表現であろう。

他方「アテナイの疫病」では潜伏期が「幾日も経ずして」と短かそうなこと、ビタミン欠乏症状が強いこと、皮疹のニュアンスが若干異なることなど、両者の不一致点

も存在するが、この程度の違いは「菌の毒力の変遷」と「処女感染」を考えれば矛盾するものではない。

チフス患者の、それこそ体を構成する全細胞が「うつ血」と「低栄養」でふやけてぼろになった状態を考えると、極期のもうろうとした意識の中からのすがりつくような患者の眼や、地獄の中をさまよったと回顧する回復患者の心の底からの言葉は「アテナイの疫病」から生命をとりもどした者が、死者や病人に対して深い憐みを禁じ得なかった心情と酷似するように思えてならない。

以上の概要を図説のスライドで報告する。

(御堂筋ビルクリニック羽田内科)

江戸今世医家人名録

初編の異本について

中 野 操

先きに大滝紀雄氏が御発表になった「江戸今世医家人名録 初編」について、同じ文政二己卯歳十一月にやや内容を異にした二種類のものが出ているので、同じ年にこうした出版が別々に行われたという意味で報告しておきたい。本医家人名録を、過去において私は三点を管見している。

- (1) 順天堂大学山崎文庫本(略 山崎本)
- (2) 大阪商科大学森文庫本(略 森本)
- (3) 慶応義塾大学医学部図書館本(略 慶応本)

このうち森は山崎本の系統であるが、所々に落丁があるが、とびら、第一丁、奥付、その他内容に於て少なからぬ異同が見られ、同じ年次月次に発兌された両書になぜこ

のような不一致が認められるのか私には不可解というの他
ないのである。

そこで両書の異同について対照してみよう。

一、とびら（異同なし）

樸涯先生 同輯
得斎先生

江戸 医家人名録 初編
今世

文政己卯十一月 両塾蔵版

二、「序」（異同なし）

文政二年歳在己卯冬十月

白土雙儀撰

竜山老樵応需書

三「医家人名録凡例」（異同なし）

己卯十一月 延沢尚賢識

四、第一丁（異同あり）

（山崎本）
樸涯 武好一
得斎 潤賞 同輯

伊部

内・浅草馬道

同・白川、裏茅場町

稲村 敬徳
岩瀬 玄策

内・津山、住吉町

（慶応本）

樸涯 武井周朔同輯
得斎 稲葉潤賞

伊部

内・両国薬研堀

内・表茅場町植木店

同・白川、裏茅場町

内・津山、住吉町

石川 玄常
井上 玄英
岩瀬 玄策
井岡 道貞

その他にも名簿には前者にありて後者になきものまた前者になくして後者に在るもの、順序の不同等多く見えるが省略する

五、奥付（異同あり）

（山崎本）

江戸 医家人名録 二三編 近刻
今世

（慶応本）

江戸 医家人名録 二編 近刻
今世

井岡 道貞

文政三庚辰年初夏発売

江戸書肆

本石町十軒店

西村宗七板

(大阪市阿倍野区)

「清水氏講義録」

— 東京大学初代産科婦人科教授

清水郁太郎の講義録 —

松 永 勝

清水郁太郎の生家(福山市吉津町一番十五号)に保存されている「清水氏講義録」は、第二第三第四第六第七の五冊である。「清水氏講義録」が他にも存するということが知らぬので、講義録は第七が最終であるか否かは不明であるが、その内容より察して最終であろうと思われる。第一及び第五の内容は不明であるが、第一は「婦人科学」第五は「産科学」であることは間違いない。何とならば、第二は「婦人科学」が、第三以降は「産科学」が記述してあるからである。大きさは、縦二四cm、横一四・五cm和紙一枚を半折し、一丁に一行二〇字、二〇行に、丁寧にカタカナ及び漢字で記してある。従って一頁につき一〇行×二〇字の割である。これを和書の体裁に綴じてある。

筆者は全卷同一人物である。学生であろう。それは、全

卷通読して、文章及び項目列挙にまずい点があり、講義内容が理解できぬまま清書した感があるからである。但し表紙の清水氏講義録の字は他の人物である。

「清水氏講義録」の内容は次のようである。第二は八三丁一六六頁。婦人病学之部とあり、項目を別記しないで、処女膜閉鎖乃チ腔内閉鎖・子宮外口閉鎖・子宮内口閉鎖の記述があり、次いで次の項目が別記してある。二重生殖器ノ一側血腫、子宮口狭窄、子宮腔部兩側切開法、子宮肥大、子宮腔部肥大、(一)腔部肥大 子宮萎^(萎)宿症、急性子宮炎、慢性子宮炎、急性子宮内膜炎、子宮全内膜炎、子宮頸管炎である。

第三は五七丁一一四頁。産科総論之部とあり、産科学と項目を挙げて骨盤の説明があり、次いで以下の項目が挙げである。男女二性骨盤差異、妊娠^(妊)整理、胎児ノ發育、胎児血液^(血)順還、胎児子宮内位置、多子産、子宮外諸臓器ノ変位、産婦診断法、消息子診断ハ用ヒサルヲ要ス、妊娠各種徴候、妊娠ト他病トノ區別、初産ト経産トノ關係、妊娠時期及ヒ幾月ノ區別、多産ノ診断、胎児ノ生活診察法、妊娠

中ノ摂生法である。

第四は六八丁一三六頁。産科生理之部とあり、分娩ノ生理、胎児位置診断法、分娩経過、分娩器械的作用、子宮収縮ノ摸形、子宮収縮期ノ形状位置、腹壁、腔収縮、娩出力ノ作用〔開大期〕、娩出期理学的作用、子宮筋纖維収縮模様、分娩器械的作用 即チ胎児產道ヲ經過スル方向ヲ云フ、顔面位置ノ理学的作用、臀部位置、双産、分娩ノ全身ニ及ホス作用、分娩時間、分娩ノ摂生法、産婦ニ麻醉藥ヲ用ユルノ可否、産褥ノ生理として母体ノ摂生、乳汁分泌、分娩ノ診断法、分娩後嬰兒ノ摸様、尊婦ノ摸生法、尊婦ノ食物、嬰兒ノ摂生法の項目がある。

第六は四三丁八五頁。顔面産及前頭産、臀産、複産以下一項目あるが、これは卷四の顔面位置ノ理学的作用以下と内容は同じであるが、同一文章ではない。卷四は八三頁分に相当するから第六が二頁分多い。尚項目名は右に挙げた以外、分娩後初日ノ嬰兒ノ摸様と初日ノが入っている点が第四と相違する。

第七は八五丁一六九頁。項目は挙げてないが胎児死亡の記載からはじまる。日数ヲ超過セシ分娩、妊娠中母体死

亡、分娩病理及治方、陣痛^(陣痛)違常論、第一陣痛微弱、第二陣痛過劇、産道軟部^(軟部)違常として生殖器發育不全、子宮閉鎖并ニ狭窄、腔及ヒ外陰部狭窄、子宮位置變化、産道^(軟部)輕部腫瘍として筋腫ス纖維腫、子宮癌、膿腫、血腫、脱腸、硬便積尿、尿石、卵巢腫瘍、肉腫、胞蟲「エヒーコロリス」、骨瘤、卵ノ違状、胎兒^(胎兒)違常と併記して胎兒發育過劇、胎兒連胎、心臟欠亡症、頭蓋欠亡症、腦水腫、腹内諸病、腫瘍、胎兒ノ位置異常、胎勢^(胎勢)違常、臍帶ノ圧迫、臍帶下行症、産道軟部ノ損傷、子宮破裂、子宮ノ圧迫ニ由ヲ穿孔スル者、頸管ノ破裂、腔裂創、腔口損傷、分娩時ノ失血、前置胎盤ノ失血、分娩時ノ臍帶出血、後産期ノ出血、子宮外翻症、子癇、分娩中母体ノ死亡、分娩時胎兒ノ呼吸及ヒ過止及ヒ其死亡である。

疾病の記載は沿革として独英仏の先人諸家の説を、項目によつては自家例も併せ述べ、原因、剖検、症候、診断、予後、治療を講義している。治療はドイツ流であるが、日本古来の方法も述べてある点に興味をひかれる。

嘉永三年水原三折は日本の産科婦人科学を集大成した「産育全書」を発刊したが、この講義録は産育全書の記載

と全く異なり、現代の教科書を読む感がする。これは、第一回文部省留學生としてドイツ留学し、従来日本の産科婦人科学を、近代科学のレベルにまでひき上げようとした清水郁太郎の意気込がうかがわれ、感無量なものがある。

(福山市)

大庭政世の事績 (II)

—島根県における医療組合事業の展開と

産青連の運動—

中 尾 鑛

島根県において産業組合による医療事業が開始されたのは大正八年のことであり、全国の草わけ事業として評価すべきことは、すでに第七十八回学会（昭五十二年）で報告した。

大庭政世は、千石興太郎とともに、島根県が生んだ産業組合運動のバイオニヤーであり、医療の光に恵まれぬ僻遠の寒村（島根県鹿足郡青原村）に、産業組合医院を設立し、わが国の医療組合運動の展開に対し、先駆的役割を果した功労者である。

大庭政世は「産業組合が理想の目標に向って、其主義精神の徹底を期せんとせば、各種の事業を兼ねた総合経営を

なす外はない……」（大庭著、農村産業組合経営論、昭和四年）と述べ、信用、購買、販売、利用などの諸事業を併せて営むことが小生産者としての農民を守る道であるとの理念をかげ、産組の「利用事業」の一環として医療事業を創設しなければならぬ、との信念をもって全国に呼びかけ、産組運動に画期的影響を与えた人である。

大庭が青原村産業組合の土壌に播いた一粒の種子が、どのように発芽、波及、成長していったかを、島根県における医療組合事業の展開と、産業組合青年連盟による医療組合運動の観点から考察したい。

(一) 島根県における医療組合事業の展開

島根県内における同事業の展開は、次の四つの段階に区分することが出来る。

○第一期（町村単位組合による草創の時代）

青原組合医院（大正八年、大庭政世によって創設）

秋鹿病院（大正十三年、八束郡秋鹿村信用組合——加藤

佳吉組合長——によって設立）

○第二期（広域を診療圏とする総合病院の創設）

石西購買利用組合共存病院（昭和六年設立）

産業組合設立によって広域にわたる総合病院をつくれ、という大庭の多年の主張が実現し、鹿足郡と美濃郡にまたがる病院が設立された。大庭のほかに、下森知（左鐙組合長）、神崎直三郎（日原村長）、村上幸衛（日原組合長）などの努力がみわたるのである。

分院は昭和七年に津和野と益田の両町に（のちに津和野共存病院、美濃共存病院となる）、同九年には六日市村に開設された。

○第三期（連合会が組織され、その所管となる）

石西購買利用組合連合会・鹿足病院（昭十五）

〃 〃 〃 津和野病院（昭十七）

前の時期は農家（組合員）の個別出資であったものを改め、鹿足郡内の十一の産組が出資して連合会組織をつくり、連合会が二つの病院を所管することになる。

○第四期（農業団体の統合により農業会へ移管）

農業会の設立によって農業会鹿足病院（日原）、鹿足第二病院（津和野）となる。

戦後早々の昭和二十一年から雲南共存病院（大東町）の

設立準備が進められ、高橋英夫（現・島根県農協連合会々長）らの努力によって二十三年三月に完成した。

以上をまとめて産組病院の発展形態をみれば、次の三つのコースとなる。

(イ) 共存病院として一貫しているものは、日原と津和野の共存病院である。（鹿足郡厚生農業協同組合連合会の所管）

(ロ) 石西共存病院益田分院（昭七）は、美濃共存病院として独立し（昭十五）、その後、益田日赤病院（昭二十九）へ発展する。

(ハ) 戦後に設立された雲南共存病院は、雲南厚生農業協同組合連合会によって経営されたが、昭三十六年以後は大東町など十町村の組合立病院として発展している。

(二) 産業組合青年連盟による医療組合運動の展開。

島根県において医療組合事業の重要性が広く農村社会に認識されたのは、大庭政世らの先駆者の強い影響をうけて、産青連の若者たちが、医療組合運動を県下全域にわた

って展開したことに負う所が多い。

昭和四年以降、県下各地に結成され、昭七年に至って県連合会を設立した島根の産青連は、運動方針の中に、農村保健運動をとり上げ、大庭政世の石西共存病院を範として、各郡に連合会組織の共存病院を設立する運動を展開する。なかでも最も熱心な医療組合運動を讀けたのは大原郡産青連（高橋英夫理事）、簸川郡産青連などである。

大原郡産青連の運動は戦後に結実し、雲南共存病院が大原郡大東町の地に、昭二十三年に設立された。高橋英夫らの多年の努力によるものである。

簸川郡産青連による医療組合新設の運動は結実するに至らなかったけれど「協同先駆」（全国産青連の機関紙）などの資料を通じて、昭和初期に行われた産青連の若人たちが、共存病院にかけた期待が、如何に大きかったかを、ふりかえってみたい。

（島根医科大学経済学教室）

日本史における価値観の変化に

伴った各種学校、課程制大学、

学科制大学、講座制大学の動き

（医療関係を中心として）

柴田 幸雄

大学の始まりは矢張り何と言っても中世におけるパリ大学、ボローニヤ大学に求めねばならない。（いわゆる三学四科が中心）（『中世の大学』ジャック・ヴェルジェ著 大高順雄訳 みすず書房 昭和五四年）しかし夫々の大学の出発とその発展はその国の歴史のちがいによって自ら変ってくる事は申すまでもない事である。しからば日本の大学はどうであろうか。江戸時代以前の場合は仏教等にもとづく密教（『講座密教②密教の歴史』春秋社 昭和五二年）や五山文学（漢文学）などに発し、幕府の儒学にもとづく藩校等があげられるが（大学、小学）庶民の寺小屋などいまだ学校としての形態をととのえてはいない（一部国学などの

興隆も考えねばならないが）明治に入り明治五年所謂学制公布以来飛躍的に発展した日本の学校制度は世界の注視的となり世界一文盲のない国家を形作った。私は以前衛生検査技師（後に臨床検査技師に発展するが）の出發を戦時中の衛生兵の問題に求め現実とその開設に関係したため（国立大阪南病院附属臨床検査技師学校）現在における各種学校の問題点を医史学的立場からとらえて来た。（医療関係にはこの種の学校が多い）さらに経験した同志社女子大学の管理栄養士専攻の開設に当り、同志社におけるキリスト教教育の歴史と新島襄の同志社病院、看護婦学校の開設とその廃校、医学部設置の夢とその不実現（これには長門谷氏の数多くの論説がある）を同志社の歴史と日本教育史、宗教史の面からみて、日本における神仏混淆的思考とキリスト教的思考の相あわざる所以を考慮してきた（『日英比較語入門』煤垣実著 大修館書店 昭和三六年・同志社百年史 昭和五四年・同志社時報 No.五六 昭和五〇年・「しばらくさ」学報十四号 昭和五〇年・北野百年史 昭和四八年・ウィスコンシン大学百二十五年史 昭和五〇年・創立九十年再興十年 皇学館大学史 昭和四七年・鮫光百年史

昭和五二年）このようにみた場合 現在大学における講座制、学科制、課程制の存在は（国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令 昭和三九年・学校教育法 第五章 大学 昭和二二年・医学部設置基準要項 昭和四〇年）明治二六年の講座制の出發（ドイツアカデミズムをとりいれるための帝国大学令改正）にその端を發するが井上毅による主として俸給の面で出發した講座制も大正一五年以降の（日本の社会に、歴史的にみて長所と短所とを持つとはいふものの）タテ社会の影響をうけ、ある面から権力主義の悪例とまでみられ或いは廃止に進もうとする考えもあちこちにみられる。（『帝国大学の誕生』中山茂著中公新書 昭和五三年）しかし上山氏の唱えられる日本歴史の中に継続せられている中国とは異なる日本特有の律令制が新憲法にも残存しているという考えからもわかる如く（『日本の国家像』上山春平著 NHK 大学講座 昭和五四年後期）家父長的社会（日本の家族制度の特殊性）天皇制社会の長い歴史をふりかえる時（『日本家族制度史概説』福尾猛市郎著 吉川弘文館 昭和四七年・『新体制の指導原理』石川興二著 有斐閣 昭和一五年・官報附録 週報

第二二一号 昭和一六年一月一日〜第二四〇号 五月一四

日号…『大東亜共栄圏』西村真次著 博文館 昭和一七年）
講座制もその一端をしめし 価値観の時代による変換にもか

かわらず（特に昭和二〇年以降における変化は著明であるが）『ロシア宗教思想史 宗教と社会主義』田口貞夫著

ぺりかん社 昭和五二年…『日本史における価値観の系譜』

笠原一男著 評論社教養叢書 昭和四七年…『講座比較文

化 第七卷 日本人の価値観』研究社 昭和五一年…『古

代史の道 考証学六十年』坂本太郎著 読売新聞社 昭和

五五年…『近世革新思想の系譜』市井三郎著 NHK大学

講座 昭和五三年後期…『神皇正統記』ドイツ医学から導

入された研究を中心とした講座制の日本的特色が中心と成

り、ついでアメリカから導入されてくる大学院制度も、医

学部においてはアメリカとは逆に教育よりも研究にその焦

点がおかれる事となつて来ている。（日本語における学生・

生徒のコトバのちがいが、ドイツ語でははっきり区別され

るが、英語ではとくに米語においてその区別があやふやに

成る事もこの問題点の一つの現われであらう。）日本全国

を風靡した大学紛争以来新しい教育カリキュラムが種々

論議せられてきてはいるが、この日本の長い歴史の上に継
続されてきた価値観を医史学的に検討した上で新しい教育
制度を出発させる事がのぞましく歴史を疎外した性急な改
革は只教育間の闘争をのみひきおこしその進歩とは成りえ
ないと考え講座制の出発とその後の歩みをふりかえり、そ
の長所短所を考えるためあえて一つの問題提起を行ったわ
けである。

最後に一言記しておくが、フランス人が学問は国際的だ
が個人には国家があると言っているように、日本国、日本
人、日本語、そしてまた細かく言えばその個人にはそれぞ
れ出生、育ち、そして方言が関係を持つてくる。この個人
の歴史も考慮にいれねばならぬという複雑な因子を考えて
いかねばならないであらう（『日本語の特質』金田一春彦
著 NHK大学講座 昭和五五年前期）

（愛知医科大学生化学）

岡谷蚕糸博物館所蔵資料にみる

製糸工女の医療費負担について

(第一報 明治二十—三十年代)

清 水 勝 嘉

生糸は明治の初年から昭和初期まで輸出産業の主軸であった。そのため製糸業は他の産業に比較して早い時期から生糸の大量生産方式を確保し、品質の統一をはかり、わが国の資本主義形成の先がけとなった。

とくに長野県諏訪郡は明治の中頃より急速に器械製糸業地帯として頭角をあらわし、全国でも有数の生糸の生産地となった。そのため多数の工女を必要とし、県内で充足させることができず、岐阜、新潟、山梨などを中心に県外からも多くを集めた。

明治期の諏訪地方の製糸工女健康状態にふれているものに「職工事情」がある。また「平野村誌」のなかにも「工女病症調」の一覧表が載っており、当時のことを知る

ことができる。

ここでは「改良社 同製糸所」の明治二十四年の「工女試験差引勘定帳」と二十六年の「工女試験勘定表」の二冊から三人の工女の医療費等の負担の内容について、次にその概要を示す。

米窪トワ

一金 四錢 四月七—八日 渋川薬価

水虫ヨリ、クスリ

加藤ギン

壹円也 十一月廿七日 齒マジナイニ行代ノ事

菅沼タネ

一金 十二錢 四月十九日 渋川薬価

一金 七錢 四月廿八日 あんま代の事

一金 二十錢 四月十五日 アンマ行代の事

明治三十年代のものとしては「明治三十六年 薬価仕訳帳 癸卯 竜上館 製糸工場」および「明治三十七年

帳 癸卯 竜上館 製糸工場」の二冊の延三八

薬価仕訳帳 甲辰 竜上館 製糸工場」の二冊の延三八

九人の工女の薬価負担を調査すると次のことがわかった。

薬価負担回数九〇%以上は夏挽期間に集中していた。工

女一人一回の平均薬価負担額は十四—十五銭であつた。負担日の記載は一日おきが多く、医師の往診は隔日であつたと考えられた。この他にも「雇人日勤録」により薬価負担日の就業状態についても併せて報告する。

(防衛医科大学校公衆衛生学)

岡谷蚕糸博物館所蔵資料にみる

製糸工女の医療費負担について

(第二報 明治四十年代)

清水勝嘉

演者の手許にある明治四四年の公笠原組の「製糸工女契約書」の契約条項のうちのいくつかによると「本契約就業期内ハ貴殿ノ工場ニ於テ製糸工女トシテ欠勤ナク就業為致可申候事但病氣其他止ヲ得ザル事故アルトキハ此限りニアラズ」就業期間中ノ賄料及開閉業ノ際ニ於ケル往復旅費荷物運賃等ハ貴殿ニ於テ御負担被下候事」とあり、寄宿舎に入っていた製糸工女は食費を必要としていなかった。そのため「製糸計算簿」にみる内賃金の内訳は実家への送金、小遣い、呉服代などであり、そのなかでも目を引くのは「……薬価」と「牛乳代」である。これは病氣時の医師の診療費の負担が工女個人のものであつたこと、提供される食事以外のもの、ここでは工女が自発的に飲用した牛乳代

も個人の負担であつた。

今回、笠原組の明治四四年度の「製糸計算簿」七冊と四五年の同じもの二冊、および四五年の「工女内貸帳」より薬価負担状況（眼科・歯科を含む）と牛乳代の負担について分析した結果を報告する。

四四、四五の各年ともに工女一人一カ年間の薬価負担状況は負担〇の工女を除いて算出すると次のようになる。

明治四四年

A 群 二、三七±二、〇七円。 B 群 二、六〇±二、二八円。 C 群 一、〇七±〇、八七円。 D 群 一、三二±一、一六円。 E 群 二、一四±二、三九円。 F 群 一、〇七±一、八二円。 G 群 二、七三±一、〇五円。

明治四五年

D' 群 一、八四±一、八二円。 E' 群 一、五四±一、三九円。

各年の各群によって異なっているが、工女一人の年間賃金と薬価負担額との間に一定の相関を見い出すことはできなかった。

眼科の薬価負担は四五年になく、四四年の四五九人の全

本工女のうち四人であつた。

四四年の歯科薬価負担は合計一〇円五二銭で、八月と十二月の二回に分けて、二〇人の工女が負担していた。四五年は七人の工女分で合計五円二五銭であつた。

牛乳代の負担は四四、四五年ともに八・九月に多くあつた。これは労働強度と関係あつたと考えてよいであらう。

（防衛医科大学校公衆衛生学）

古代インドの公衆衛生

杉田暉道

一、はじめに

インドは独自の社会構造をもった、特異的な世界といえる。住民は百以上の人種に細別されており、使用する言語は主なものだけでも数十種類あるといわれている。さらにカースト制度が厳然と存在しているので、インドの社会はさらに複雑なものとなっている。しかし、インドの歴史的な発展過程は世界史の発展に大いに貢献することが認められつつあり、とくに精神文化については高く評価されている。そして精神文化のみでなく、政治、社会、文学および医学の各分野についても再検討する必要があることがわかってきた。

このような意味で、古代インドの医学の分野の中の公衆衛生について検討することは、世界の公衆衛生史の発展に寄与するところが極めて大きく、また公衆衛生のありかた

に極めて示唆するものがあると考えられる。

二、インダス文明における都市計画

紀元前二五〇〇年から一六〇〇年の間に、インダス河流域を中心にして極めて高度な文明が栄えた。その中心はモヘンジョ・ダロおよびハラッパであった。これらの遺跡をみると、都市全体はいくつかの大きなブロックに区画され、道路が縦横に貫道し、街路の両側に建物が規則正しく並んでいる。住居は厚い煉瓦の壁で囲まれ、煉瓦で作った立派な井戸を具えている。浴室は、地階または階上に設けられ、その排水は雨水や屋内の汚水とともに、管によって汚水溜に入り、やがて街路の下水溝に流れこむようになっている。

このように都市計画が整然と行われ、給水設備、排水設備が完備し、公衆浴場の施設を有していたことは、この文明の水準がきわめて高く、公衆衛生面の技術も高度であったことを示している。

三、アーユルヴェーダの成立

紀元前千五百年頃、アーリア人が北西地方からインダス溪谷に侵入し、先住民をインド亜大陸に追い出した。紀元

前六世紀に、ペルシアのアケメネス朝のダリウス一世の軍隊がインドの北西部を攻略し、四世紀にはギリシャのアレクサンドロス大王が同じくインドの北西部に侵入した。これをきっかけにして古代インドにおける最初の統一帝国、マウリヤ王朝が実現した。この王朝の帝王の中でもっとも偉大なアシヨカ王（在位期間、紀元前二六八～二三三年）は最南端の一部を除き、全インドを統一した。彼は仏教に帰依し、これを国教とした。

ヒンズー教は古代ではバラモン教と呼ばれ、アーリア人がもたらした古い宗教とインドス文明の宗教的な伝統とが結びついたものである。ヴェーダはヒンズー教の最古の古典である。ヴェーダは四種に分かれているが、この中のアタルヴァヴェーダは呪法の集大成されたものである。これは二つの部分からなり、一つは「調伏」の呪文で、他の一つは治療を目的とする呪文である。アーユルヴェーダはこのアタルヴァヴェーダから展開し、チャラカ、スシュルタ、ヴァーグバタらによって大成した。

四、古代インドの公衆衛生

(一) 感染症

ペストその他の疫病が流行している地域にすることが危険であることを知っていた。痘瘡に対しては、患者の皮膚のできものからとった膿で発病するのを防いだ。

(二) 個人衛生

飲食物についてはとくに詳細に述べている。そして食物は種々の異った成分を含み、調理法にも種々の方法がある。それによって効能も異なる。これらをよく知らなければ、医師は正常人の健康を維持し、病人に対してはその病を治すことはできない、と強調している。日常生活の節制の厳しかったことは、他の古代民族とは比較にならなかった。

(三) 社会政策

社会政策的施設については、仏教出現時代の諸国王は、仏教の感化によってこれを実行していたが、これを大規模に行ったのはアシヨカ王であった。彼は貧しい人々の為に施す「施しの家」を設立した。人間のためばかりでなく、動物の病院までも設けた。

五、むすび

古代に偉大な文明を築いたインド民族は、公衆衛生面に

においても優れた業績を残した。しかしインド民族は、古来宗教性が強い為に自然科学も常に宗教と結びつき、日常生活の節制も次第に宗教的な戒律の形に変化して、本来の意味を失うにいたった。また、インド人は内向的、反省的であるために、客観的自然対象に対する観察、考察を重要視しなかった。これが上記の偉大な業績が後世にまで長く続かなかった大きな原因と考えられる。

(横浜市立大学医学部公衆衛生学教室)

産業医としての先覚者 佐藤英太郎

三 浦 豊 彦

佐藤英太郎は現在の兵庫県生野町の人、慶応三年（一八六七）二月に佐藤誠軒の子として生れ、八歳の時父を失った。明治十七年（一八八四）二月上旬、ドイツ語の勉強をはじめ、同年十一月に、東大医学部別課に入学した。

佐藤は別課医学科の第十八回生で、明治二十一年（一八八八）一月から卒業試験を受けはじめた三十八人の一人であった。別科の最後の卒業生だったのである。明治二十一年（一八八八）五月五日に卒業証書を受け、同年九月十二日「医術開業免状」を得て、第三千百十九号で医籍に登録されている。この間数カ月、佐藤は大学附属第一医院で外科を佐藤三吉教授に、小児科を弘田長教授について勉強した。医師開業免状を得た九月に郷里の生野に帰り医業を開いた。

生野鉦山は徳川幕府直営の鉦山であった関係で、明治政

府は明治元年（一八六八）十一月に官収し、仏人コワニー（Cointet, F.）を技師長にして採鉱と製錬の近代化をはかった。生野には鉱山支庁がおかれたが、明治四年（一八七）八月十四日は工部省に鉱山寮がおかれ、生野支庁となった。明治初年には二人のフランス人医師をやとっている。

さらに明治十九年（一八八六）には生野鉱山は大蔵省に属することになったが、明治二十三年（一八九〇）に佐渡鉱山とともに宮内省御料、つまり皇室財産に編入され、御料局生野支庁がおかれた。

開業医佐藤英太郎は明治二十三年（一八九〇）四月に御料局生野支庁の傭医となった。これより先、生野鉱山で火薬爆発事故があり、負傷者が発生した、他の医師がぼうぜんとしてなすことを知らなかった時、佐藤医師が、新知識でてきばぎと処置し、自分の医院の蔵の前の石畳の上で腕を一本切りおとすような手術をして鉱山に認められたためだという。

明治になって最初の塵肺関係の論文、坪井次郎の「塵埃吸引病」が発表された明治二十三年（一八九〇）の「医革新聞」第三二六号に坪井の弟子の佐藤英太郎が「鉱夫肺病

ニ就テ」という論文を書いている。そして生野鉱山での二例の鉱夫肺病を報告している。生野で煙毒といわれたものは鉱夫肺病に一致するともいっている。

開業しながら生野鉱山の産業医をしていた佐藤英太郎はさらに明治二十五年（一八九二）に「坑夫社会ノ所謂煙毒ニ就テ」という論文をかき、三年間に煙毒患者五人を経験したといい、これらはいわゆるツエンケル（Zucker, F.A.）の塵埃吸入病にはかならないと書いている。

しかも、生野鉱山の坑夫頭などは、少なくとも二、三十年坑業に従事したものは皆略痰になやんでいる。しかもこの人達も統発症または合併症のため、不幸の転帰をとることが多いともいっている。

一八八三年（明治十六年）にドイツでは疾病保険が制定される。この制度を導入して日本で最初の鉱夫共済組合病院が設立されたのも、生野鉱山であった。

明治二十二年（一八八九）に宮内省御料局の生野支庁の技長になった工学博士大島道太郎はドイツのフライベルグ鉱山大学に五年間学び、ドイツ事情にくわしく、ドイツの疾病保険を参考に、生野支庁共済組合をつくった。佐藤は

明治二十四年（一八九一）から組合の医員を嘱託されている。はじめは自宅診療所で組合員の診療をしていたが、明治二十六年（一八九三）十月から鉾山に医務所を設けている。

明治二十九年（一八九六）に佐渡、生野両鉾山は三菱に払い下げられた。佐藤らはこの時共済組合の前途を憂慮していたが、宮内省から払下げの時、この共済組合を充分保護して永遠に維持するという条件がつけられていたので、三菱も引き続きこれを保護した。

明治三十年（一八九七）には三菱共済組合病院が完成し、佐藤はこの病院長になっている。

この組合は鉾主と鉾夫の醸金でできており、常勤の鉾夫は本人も家族も治療をうけることができたし、廃人になった時には扶助料も支払うことになっていた。現在の健康保険と労災保険を一諸にしたような性格であった。

佐藤英太郎は東京医事新誌に二回に分けて「生野鉾山鉾夫共済組合」の概略を紹介しているので、今になっても当時としては進んだ共済組合の様子がわかるのである。

佐藤は明治四十三年（一九一〇）まで、この組合の病院

長を勤めた。

当時を考えると、きわめてすぐれた産業医といえることができるのである。

（労働科学研究所）

房楊枝について

中原 泉・本間 邦則

部では嚼面以外をみがくことは難かしく不可能であった。以上のことから房楊枝の効果は、前歯部において著明であり、臼歯部では期待できないと思われる。

(日本歯科大学新潟歯学部)

房楊枝は江戸時代に用いられた歯ブラシ用の楊枝であり、楊柳が主材である。房楊枝は一端を房にしたものと両端のものとがあり、房状にしない方の端は先細に削り、舌こぎに使用した。江戸時代の錦絵には、房楊枝を用いているのを画いたものが多いが、その房楊枝の手に持つ方法は、興味あるものである。それは親指と小指を曲げてその上に房楊枝をおき他の三指で保持するもの、親指に房楊枝をのせて他の四指で保持するもの、親指と人差指ではさんで他の三指を軽くそえるようにして保持するもの、などと「房楊枝を保持する方法」がある。この房楊枝を用いて、歯をみがいてみると、前歯部の唇面とくに上顎はよくみがかれるが、臼歯部をみがくのは困難である。実験的に、歯の表面に試薬を塗布して、房楊枝を用いてみがいてみると、前歯部の歯間空隙以外はよくみがかれた。しかし臼歯

明治期の英文「成医会月報」に

投稿している外国人医師たち

蒲原 宏

高木兼寛らによって創刊された成医会月報は明治十五年にその創刊号を世に出したのであるが、はじめは全文日本語のものであった。しかし明治十八年からはその附篇として日本語の本文とは別に英文による論文を掲載するようになった。

わが国における英文医学雑誌の最初のものとして在日外国人医師は勿論アメリカ・イギリスにおいても注目されるようになった。

やがてこれは成医会月報の附篇 (Supplement) から脱して The Sci-I-Kwai Medical Journal とその名称を改めることとなる。

これには来日外国人医師の消息がよく窺かがわれるばかりでなく、その学問的な業績、及び成医会の図書館であった

東京医学図書館 Sci-I-Kwai Medical Library and Museum に収蔵されていた、欧文の著述、購入寄贈図書、雑誌が毎月収載されていて、大震災で可成り焼失したとされている現東京慈恵会医科大学図書館の旧蔵書の輪廓を窺い知ることができるのである。

またこの英文雑誌は成医会即ち Society for the advancement of medical science in Japan の機関雑誌でもあり、名誉顧問として、橋本綱常、池田謙斎、長与専斎、石黒忠恵、戸塚文海、松本 順、伊東方成があり、外国人では William Anderson, E. Baelz, J.C. Hepburn, William Wills, R.T. Wilson (Baltimore), H.C. Wood (Philadelphia) がその名をつらねるが、その実務は E.S. Eldridge, W. Norton Whitney があたっていたが、W.N. Whitney の帰国後は日本人医師で運営することとなる。

明治十八年から三十八年頃までは日本の衛生状況特に陸海軍及び内務省関係の統計資料が詳細な英文で紹介されている。しかし在日及び旧在日外国人医師の投稿も多く、ことに W.N. Whitney の日本医学史、佐藤泰然伝、長与専斎伝などの日本医学の紹介論文 Wallace Taylor の内臓外

科手術に関する論文 William Anderson, Spencer Higgins の投稿論文などがみられる。ことに執筆の多いのは東京府病院に勤務していた。アメリカ人医師の Albert Sydney Ashmead による、在日外国人医師の日本関係論文の英訳紹介である。

これは Collection of some foreign opinions on pathological matters peculiar to Japan とうう表題の下で E. v. Baelz, Theodor Eduard Hoffmann, Wilhelm Doernitz, A.L. Agathon Wernich, C. Remy, Charles Anglada, A. Woelkopf の業績を紹介したもので、独・仏語からの翻訳であるが、在日中のもの又は帰国後の発表論文をきわめて詳細に翻訳してをり、現在においても当時の日本の医療・衛生情况进行る貴重な資料と考えられる。これは Ashmead の帰米後の仕事である。彼は帰国後は明治二十七年頃までニューヨークにあって積極的に日本人留学生の世話を行なう親日医家としてその役割を果たしたようである。

成医会月報にも Advertisement : Rooms and Board for Japanese tourist, at reasonable rates, at No. 45 Macdougall Street, New York City. Doctor Ashmead (formerly of the

Tokio-Fu Hospital, Tokio), will assume charge of sons or daughters of Japanese gentlemen, entrusted to him. English tutoring a speciality. correspondence solicited. と広告しているのがみられる。

在日外国人医師、帰国した在日外国人医師らの消息を知る上にも英文成医会報の明治十八年から明治四十年までの収載記事はきわめて重要な資料であると考えられる。

この英文篇は各大学とも欠号が多く大略整っているのは東北大学医学部図書館のみであり、閲覧利用にきわめて不便な収書状況であるというのが現況である。

明治中期における日本国内における英米関係の医学交流史上貴重な資料を遺した外国人医師たちの業績を再検討する必要があることを全資料について調査から指摘したい。

(新潟ガンセンター)

平治郎解剖について

その場所と住民感情

杉 立 義 一

天明三年六月二五日に橋南谿・小石元俊らが伏見奉行小堀政方より刑屍体を払下げられて実施した平次郎解剖は『解体新書』刊行後既に九年を経ており、吉村蘭洲の画いた解剖図はより精細となり、元俊の解説には病理解剖的記述もでている。本稿ではこの解剖の行われた場所の考定と解剖に対する住民感情について考察する。

淡輪家旧蔵で現在は武田科学振興財団所蔵の蘭洲真写の平次郎臓図には、小石元俊の撰した補遺並小引がついている。そのなかに「伏水之刑場者豊後橋西之地呼曰平戸者是也」とある。豊後橋は現在の観月橋である。伏見の御香宮所蔵の文化五年伏見市街図をみると、伏見奉行屋敷の西側の道路を南に進み、豊後橋西方の宇治川支流にかかる橋を渡った所に「セイバイ場」とかいてある。これが伏水之刑

場でありこの辺を平戸といった。現在では御香宮前から西奉行町（市宮桃陵団地）の西側の道路を南に進むと、宇治川流派にかかる平戸橋に到る。今は改修されて流派という小川になっているが、当時は水流も多く寺田屋前の舟付場まで宇治川がいきりこんでおり、セイバイ場のある場所の一つの島となっていた。平戸橋を渡った東側に八千代大明神があり、それに隣接して京阪宇治線がはしり宇治川堤坊につづいている。この附近（伏見区平戸町）が伏見刑場跡である。

平次郎解剖に対する住民感情を考えるにあたり、伏見騒動という事件が参考になる。小堀家は近江国浅井郡小室の出身で、二代政一（遠州）は茶道・作庭の方面で著名であるが、伏見奉行として二五年間も在任した。六代政峯も名奉行であった。七代政方は伏見で生れ明和七年に伏見奉行に任ぜられ、初めの一年間は善政をしいたが、次第に側近の甘言によって悪政を重ね、住民は重税にうちひしがれて、政方に対する怨嗟の声が町に満ちた。政方が平治郎解剖を許可したのは、このような状況下であった。

平次郎臓図の元俊の序文には「小室侯の三人の侍医と京

医橋東市俱に志此に深し而して相共に公に懇請する者年有り公亦其志其請に誠ありて其事其道に益あるを知る也」と、さらに補遺並小引のなかで「犯人平次郎はもと西州の

産にして来りて伏水晶中街に住む、先に罪有りて之を境外に斥逐し其名を除く、凡そ除かれた者は再来すれば法は殺

して赦無し、今平次郎は竊盜を犯るに及び再住之律の故に遂に追る能はざる也、橋東一はかつて公に告げて曰く、伏

水の人は刑死者有ると雖も其屍は之を賜うを願はず。同郷人生は其面を識る、死すとも其屍を剖くに忍びず。平次郎

は其伏水に住むと雖も亦夫れ土着人の比に非ざる也、公之將に屍を賜うの命有るや、平次郎は土人の熟識する所なる

をもつて他盜の一朝来りて罪に罹る者の比に非らず。故に之を拒んで曰く、若し之を賜はば則ち土人は公を以て不仁

と為し將に相謗りて曰く、其赤子を見て猶秦人の越人におけるが如しと、胞脊公即ち之を断つて曰く、仁安は人命を

重んずるにあり、屍を賜わざるに在らず。医之觀臓は人命を重んずるの故に非ざるか、屍を賜はざるは誹謗の策に非

ざるか、人命を重んずるは天下之公道也、誹謗は一人の私謀也、公道は仁者の由る所に非ざるか、私謀は不仁之為す

所に非ざるか」と。さらに元俊は「吾輩今宿志を遂ぐるを得。其道將に達せんとす。是皆公之仁徳なり」と政方の理解ある態度を称讃している。

御香宮の正門を入った左側に高さ数メートルもある円柱状の伏見義民之碑が立っている。

これは小堀政方の正政にたえられず、文珠九助・丸屋九兵衛ら七人の伏見町人が、天明五年六月一日江戸に於て寺社奉行に直訴に及び、その結果同年二月二六日政方は罷免され領地没収となつて一応目的は達したが、直訴した七人の義民は病死または牢死し関係者二百余人も処刑された。この伏見騒動の一部始終を、事件落着七年後の寛政七年に、伏醉隠士という人物が詳細にかき綴つた『両中之鑑子』という文書がある。その巻五に政方が平次郎の解剖許可をあたえた事を次のように言語に絶する行為と断じている。

「貧のため錢五百文を盗んだだけで死罪を申付けられ出入の医師の願いをきき届け給う。仍て彼貧者が首をはね、むなとこより男根までたち開き手足に至まで方々にきり……五臓六腑の有胎をみて絵師に図を画かせける。哀れというも愚なり、先公は罪人が当地の者の時には許可されず、他

隋唐時代の歴史書にみられる疾病

山 本 徳 子

国者の時に願ひ出るように申された……五臓六腑を見たりとて療治方に益なるべき様なし、臟腑内景の図、先哲の肝胆をくだき其図世に行て足りぬ、なんぞ死者をひらきて活物の疾病を治る事、理有に似て愚昧の至りなり、悲しむべし憐むべし さればこの三人の医 開臓以後大名人に成しという沙汰もなし、他の医家数多有といへどもいづれか其場へ到りしはなし、いかがの心底にて開臓願して五臓を見しや、笑ふべし笑ふべし 夫故輕き罪の重き仕置をすすめ、其罪いかでか遁るべき、後人の誹判をまつのみ」と。

この伏酔隠士のような考え方は医家のなかにも根づよくあったが一般住民の解剖に対する考え方を代弁している。元俊の補遺並小引は天明四年冬十月に平安の欽賢堂で記したものであるが、その文中には当時の伏見住民の感情を意識して、小堀政方のために配慮している節がみとめられる。

(京都市)

中国医学における最初の病理学書として知られている『諸病源候論』(五十卷)は、隋の太医博士・巢元方によって煬帝の大業六年(六一〇)に著わされたものとされている。同書は疾病を六七門に分類し、病因と病理そして症候についての一七二〇条が著録されている。その詳細な記述は、すぐれた内容を有していて、後世の中国医学に与えた影響は大きなものがあり、たとえば、唐の孫思邈の『千金要方』や王焘の『外台秘要』および宋の『太平聖恵方』などはこれに拠っている。

巢元方の詳細については明らかではない。しかし、太医博士(『病源論』)とあり、また、太医令(『開河記』)とも記されていることからみると、太医署の医官であったものと考えられる。前者の場合おそらく太医署の医博士であろう。そうすると医術の教授者であり、後者は一切の医療の

法をつかさどる長官である。いずれにせよ、疾病に関する知識は必要であったものと解される。

では、『病源論』に記されている疾病は、当時において、実際にはどのようなものであったのか考察を試みる。資料としては隋および唐代についてのものを用いる。歴史書・類書・小説など種々のものがあるが、いまは、まず、歴史書ことに正史（唐・魏徵等撰『隋書』八五卷、後晋・劉昫等撰『旧唐書』二〇〇卷、宋・歐陽修等撰『唐書』二二五卷）による。

隋は唐に比べると短命な王朝であったためか記録も少なく、『隋書』における疾病の記載も非常に少ない。そのなかで記述の詳らかなのが李徳林伝である。すなわち、

徳林は母が死んだため職を去り（喪に服していたが）、勺飲、口に入れざること五日、因って熱病となった。全身に瘡を生じたが、哀泣して絶えず。……湯薬ものまなかった。全身洪腫すること数日間、一時に急になおり、身力が平常に復した（隋四二）

とある。このことから、『病源論』の熱病に適合させることは、にわかには断じ難いが、一応、熱病での瘡の症候に

類似性がみられよう。

唐代の場合も、種々の疾病のことが記されているものの、病名、病状などが具体的に記載されていることは少い。しかし、それらのなかでも多いのが風病と疽および瘡である。なお、一例ではあるが外科の腹部の縫合があったことが記されている。ともあれ、いまは、風病についてをのみとりあげることにする。

(一) 高宗（六四九—六八三）は風疾で苦しんでいた。頭が重くて、がまんできないほどであった。侍医が頭の百会を刺して出血させたところ治り、帝は「眼が明らかになった」といった（半年後に死んだ）。（旧五、新四）

(二) 文宗（八二六—八四〇）がにわかには風恙となり（太和七年十二月）、一カ月余の間、ものを言うことができなかった。薬によって少し効きめがあった（旧一七四）

(三) 庫狄嶽が風痺で苦しんでいて、手は弓を引くことができなかった。諸医は治療することができなかったが、甄權はその肩の隅の一穴に鍼をしてなおした。弓

が射れるようになった(旧一九一)

(四) 御史大夫の杜淹が風毒を患い、腫れた。太宗が甄立言に診させたところ、立言はいった「今から十一日の午の時に必ず死ぬでしょう」と。はたしてその通りであった。(旧一九一)

(四) 李好徳は、もともと風疾があり、言語が妄妖であった。蘊古が称していた「好徳は癲病でその徴がある」と。(旧一四〇)

(六) 李紳が会昌四年(八四四)に、にわかに中風恙となり、足がしまりがなくなつて、朝謁することができなくなった。……六年に死んだ。(旧一七三)

(七) 哥舒翰は酒をこのみ、声色を極めつくしていたため風痺となり、体不仁であった。(新一三五)

右の(一)～(七)において、これだけの症候では、簡単には断定できないが、『病源論』に当てはめてみると、だいたいにおいて風病についての症候はみられるように思う。ただし、一つの症候にそのまま適合させるのではなく、数候にわたっている、というより、数候のなかのどれかというところが決められないのである。

以上のことから考えられることは、歴史書における記載とはいへ、当時の医書と関わりのあったことがしられよう。

さらに、『隋書』、『旧唐書』、『唐書』の撰者たちは、当然のことながら医官ではない。文人官僚であり、かれらは、当時の社会におけるエリート階級のものである。これらの書に記されている疾病についてのことがらは、当時の、かれらの疾病観をも表現しているように解される。

(大阪大学教養部生物学教室)

中国伝統医学における季節の問題

丸山 敏 秋

中国伝統医学の興味深い特質の一つとして自然界と人体との密接な関係の認識をあげることが出来る。身体観・疾病観をはじめ、治法・養生等、あらゆる面に深く関与しているかかる認識から、マクロコスモス（自然界）とミクロコスモス（人体）の静的（空間的）あるいは動的（時間的）対応関係が委細示されている。季節と人体との対応影響関係はその一つの典型と言えよう。

演者は先に『素問』『靈樞』を中心とした古代中国医学における五行論の考察を発表し（第三十一回日本東洋医学学会学術総会）、その中で四季と五行の問題についても言及した。それは次の様な点である。

四季と五行の融合という数的にも厄介な問題は、中央と土の位置づけをめぐるさまざまな立場が先秦漢代の諸文献中に見え、医書においても反映している。医書の記述を

見ると、まず季節をあくまで四季で貫く立場があり、また五行論の観点より四季を包摂して説く立場が存している。

後者においてはさらに五行の土の位置づけをめぐる、土に特定の季節（長夏・季夏など）を設ける場合と、土を中央に置いて特定の季節に当てない場合の二つの立場がある。

『素問』『靈樞』においてはこれら三つの立場が混然と共存していることから、五行相克（勝）論適用の不完全さなど、記述にさまざまな混乱・不統一が生じ、一つの大きな問題となっている。

かかる問題をふまえて、今回はさらに鍼灸系医学の原典である『素問』『靈樞』において季節と人体の関係が如何に認識され、医学理論に組み込まれているかを明らかにし、そこに見出される問題点の考察を試みる。

そのためにはまず古代中国人の季節観を熟知しなければならない。春夏秋冬の四季の認識は早くから農業の実際と不離であり、『詩経』豳風七月に見える農時暦から、やがては政治と密着した『礼記』月令の如く時令へと進んで定着した。この時令思想と素・靈などの医書における季節の認識は極めて深い関わりがあり、先に述べた様な四季と五

行の問題は両者に共通して認められる。

素・靈における季節と人体の關係については、①季節と疾病、②季節と脉状、③季節の治法、④季節と養生という主要な四つの方面から考察を進める。そこから先の如き問題が出現すると共に、雑家的な性格を有する両書の記述の先後關係についてもある程度の示唆が得られよう。

ところで中国伝統医学の原典の段階において自然界と人体の密接な対応關係の認識が明示されているのは鍼灸系医学の場合であり、湯液本草系医学の場合、それが全くと言ってよいほど認められない。このことは両医学の特質を示すものであり、かつ両者の折衷融合が図られた金元医学において一つの問題となつて現われてくる。かかる通時的な視野に立つて医学理論の考察を行うに際しても季節の問題は一つの手がかりとなる筈である。

以上のように共時的及び通時的観点から中国伝統医学における季節の問題を捉えて考察を試みるのが今回の発表の主旨である。

(筑波大学大学院)

曲亭馬琴の義齒について

第三報 予後

本 山 佐太郎

曲亭馬琴の日記は饗庭篁村が明治二十四年四月『国民之友』に「馬琴翁一期著述二百八十余部其他雜著抄書等数知れず其の力の余り此の精細なる日記あり機根のよき誠に驚くべし……はかなき此日記尚ほ翁が孳々勉学の有様をうかぶに足るものあり故に抄出す」と初めて紹介された。

更に「馬琴翁の日記我家にあるは文政十・十一・十二と天保三・四年の五冊のみ、思ふに此日記尚ほ数十冊ありしものならん……」とあるように、当時馬琴の日記は数十冊即ち数十年分の存在を認められた。

しかし関東大震災による焼失と散佚により、現存されているのは和田万吉翁が謄写した天保二年分を含めて、文政十年から天保五年分迄（文政十三年即ち天保元年の分は散佚）と嘉永二年の八年分のみである。

馬琴日記の活字翻刻は一部抄出はあったが、完全な翻刻は昭和三十一年一月に至り漸く暉峻康隆らによって『早稲田大学図書館月報』に文政十一年戊子日記から連載された。

ついで木村三四吾の手によって、文政十年雅俗日記・四が昭和三十三年七月から「ビブリア」に翻刻、連載された。

ここで我々は初めて馬琴の日記を通読出来るようになり、文政十年六月五日に馬琴は総義歯を装着した事実を知ったわけである（第一報）。

そしてその総義歯の製作者は、日記の記述と田安家の御広敷御用人蜂屋茂橘の蒐集品の中から考証して、牛込神楽坂に住む入歯師吉田源八郎であると断定した（第二報）。

しかし文政十年六月五日以降の日記の中には義歯の修理についての記載は多く見られるが、その予後についての記述は見当らない。

「質実にして文飾なく瑣事といへども洩らさず記すところは是れ翁の性質を見るべき所なり」といわれるように、必ずや義歯についての感想が一言あってしかるべきと思われる。

るが、所在不明の文政十三年庚寅日記に記載されていたのではないかと考えられるのである。

馬琴をして「曲亭少壮より口痛の患いあり、文化年間、日夜著編にいとまなかりし頃は、日毎に齧る為に苦しめられざることなし、……云々」といわしめた近世物之本江戸作者部類は、文壇の消息或は時評といったようなものを取扱っているの、近世文学の中では珍らしいものであるといわれ、温知叢書本を以て通行しているが、これは甚だ誤脱の多い悪本たるの難をまぬかれ得ぬテキストであるといわれている。

そこで披見し得る写本東京都立中央図書館所蔵の加賀文庫本、反町文庫本と、国立国会図書館静嘉堂文庫所蔵の石川豊翠軒本の三部を校合し、天保四年癸巳日記と天保五年甲午日記の中の近世物之本江戸作者部類に関わり合いのある記述から、その執筆の過程と動静より秘書といわれている近世物之本江戸作者部類が、馬琴の四友（木村黙老、殿村篠斎、小津桂窓、石川豊翠軒）以外に示された事実はない。

この四人に「総義歯と云ふ物を用ひしより……云々」と

義齒についての感想を打ちあけたとも思われる記録は、江戸神田明神下同朋町の自宅において天保五年正月五日に、馬琴自ら書き誌したのである。

総義齒を装着してより丁度六年七ヶ月経過してからである。

ガブリエル・プラバースと

その皮下注射器について

大村 敏郎

内服・外用・注腸など薬剤の投与法の中で皮下注射が行われるようになったのは意外に新しく、一八五三年のことである。最初に行ったのはスコットランドの Alexander Wood で神経痛の局所療法としてモルフィネを注入したことが知られている。

この Wood と並んでもう一人、皮下注射の歴史に欠くことの出来ない存在が「プラバツの注射器」として有名な Gabriel Pravaz である。ところがこの人物は母国フランスにおいても「知られざる著名人」の一人といわれる程、名前と作った器械が有名なのに、その生涯は知られていない。昨春秋、東フランスに彼の生地を訪ねたのを機会に、彼に関する二・三の文献を調べたので御紹介してみたい。

なお名前の読み方だが、従来プラバツと呼ばれている

が、現地ではブラバーズということを確認してきた。Pott や Oss で終る名前はサボア地方の特有なもので、同じサボア出身の有名人には音楽家のベルリオーズがいる。

Charles Gabriel Pravaz は一七九一年、フランスの Pont de Beauvoisin (ボン・ド・ボボアザン) に生れた。年代から解るように大革命の真最中である。父が医者であり、伯父達が僧侶であった為、教育的環境に恵まれ、幼ない時から古典語を勉強して、グルノーブルに出て数学を学び、郷里に帰って科学を教えていた。その後パリのエコール・ポリテクニクに迎えられたが、一八一五年には退職し、医学を志すことになる。一八二四年三十三歳で喉頭結核に関する論文を書き学位を受けている。翌年から老人病院の医師として十年間を過す。この間、当時としては新しい、整形の領域にとり組んだ。

結婚した相手の祖母が女学校の校長をしていた関係で、校医となったが、彼の脊柱彎曲症の原因研究が評判になって、やがて学生の寄宿舎を診療所に変えてしまふのである。当時スコリオーズはイギリスの Pott がいうように結核性のものと考えられていた。分院がパシーとリヨンに出

来る程繁盛したらしい。

他の仕事としては、先天性の肘関節脱臼の治療に圧縮空気浴をさせて、組織の血行と栄養を改善させ固定をしかりさせる法を開始し、一八四七年に発表している。

又動脈瘤の治療に、細い針を通して電気凝固を試み(一八三〇年)、ついには針つきの注入器で動脈瘤の中に塩化第二鉄を注入することを考案し、一八五三年にリヨンの獣医学学校で馬に実験したが、臨床に応用する前に、この年 Pravaz は死亡している。この注入器が Pravaz の皮下注射器と後に呼ばれるようになる。

実物はリヨンのオテル・デュ博物館にあり、長さは十センチ程、全体が銀製で、ピストンは螺旋ねじで、少量づつねじりながら注入するようになっている。針の長さも十センチ位あった。一八五二年に Charrière によって作られたものと説明がついている。

昨年私が Pravaz のふるさとを訪ねた目的は、生地について何か彼に因んだものを見てきたい。そして彼の生地が Pravaz をどのように受けとめているのか知りたい。又医学とは無関係だが、ギエール川をへだててボン・ド・ボボ

アザンという名の町が二つ並んでいる。その奇妙さも解明しなかった。

結果は大成功で、町立病院の庭に Pravaz の像がついた記念碑を見出し、町のメインストリートに彼の名がつけられており、県境の橋の上から見えるイゼール県側の二軒目に彼の生家も存在した。丁度バリから来あわせた Pravaz の子孫の一家との遭遇もあった。

人口三千人のこの町の人々は Pravaz の業績を誇りにしており、観光図の中にまでとりこんでいる。Wood が臨床的に皮下注射法を始めたことは認めているが、Pravaz は皮下注射器の発明者であると区別しているように思えた。

町の名は一五三六年フランソア一世がイタリー遠征の際にこの地に橋をかけたことに由来しており、その橋の両側の町が同じ名を名乗っているのである。この遠征がトリノまで足をのばし、私にとって関心の深い外科医 Ambroise Paré が登場して鉄砲傷の軟膏療法を開発するのであるから、私には大変意義のある旅であった。橋は第二次大戦でドイツ軍によって破壊され現在ののは第二世であるが、今もフランソア一世橋と呼ばれている。この橋を境に、現在は

イゼール県とサボア県が接しているが、Pravaz が生れた頃は一方はフランス、他方はサルディニア王国のサボア地方で国境をなしていた。つまり国境から二軒目の家で Pravaz は生れていたのである。

なお Pravaz の注射器の名が広まった理由であるが、いくつかあるうち、一八五九年頃に皮下注射の論文を書いた Bélier が Pravaz 式注射器と名づけたことが大いに役立っていると思われる。Pravaz は皮下注射をめざして注入器を作ったわけではないのに、計らずも後世その方面の父といわれてしまい、他の業績は忘れられてしまったのである。

(川崎市立井田病院)

「松阪の入目・入歯師」と

「明治期医学生の写真について」

柘植 三郎

松阪は天正十六年（一五八八）蒲生氏郷により開かれた城下町で、のちに伊勢参りの宿場町として、経済的にも文化的にも繁栄した。

氏郷により、近江から移ってきた商人はのちに「江戸店持上方商人」となった。

また、「国学四大人」の一人である本居宣長は、この地の町医者で、彼の入歯をいれた喜びを詠んだ歌は有名である。

私の松阪の生家には、江戸期の入歯師、漢方医の資料が残っているが、最近「家系略」が発見され、その全容が明らかにになったのでここに報告する。

また、私の父慶太郎が志を樹て上京、四ッ谷の中村倭文雄（内科医）に書生として住み込み、かたわら済生学舎に

通い、医師の免許を得るまでの苦難の道程を、彼の写本等によってたどって見、以て明治中期の医学生の気迫の一端にふれてみたいと思う。

（四日市市）

横浜外人墓地に眠る医人・薬人

大 滝 紀 雄

一八五四（嘉永七）年三月三十一日、日米和親条約（神奈川条約）が調印された。それより約一カ月前の三月六日、ミシシッピー号乗組み陸戦隊員ロバート・ウィリアムズが死んだ。これがひきがねとなって、アメリカ軍の強い要請により、一八六一（文久元）年、横浜山手に外人墓地が設けられた。その後、異郷の日本で死亡した外国人（中国人を除く）は増加し、現在同墓地埋葬者の国籍は四〇におよび、総数四、二〇〇人といわれている。

しかし、この外人墓地もこれまでは、横浜という特殊な港町のエキゾチックな名所として有名であったに過ぎない。昭和五三年、横浜市民局では、始めて資料として市民グラフ二七号を通じて、外人墓地埋葬者リストを発表した。今年ふたたび、同誌三三号で外人墓地社会文化「人名辞典」を編さん、一三一名が登載された。私も医学・薬学

関係を担当したので、それについて述べる。

ダリストン James, J.R. Daliston 1821—1875 イギリス

人医師。山手病院第五代名誉院長。神奈川県は一八六九年、山手居留地八二番の土地をダリストンに各国病院地として貸与した。翌年一般病院（いわゆる山手病院）が開設された。ダリストンは外科が専門で、かつて義勇軍の外科医長として、ニュージーランドに出征したこともある。二地 区

エルドリッジ Stuart Eldridge 1843—1901 アメリカ人

お雇い医師で、日本の医学の発展に寄与した。一八七一年二八歳で来日した。翌年北海道に派遣され、同開拓函館医学所教官となり、一人で医学各科を教え、臨床講義も行った。同時に函館病院で患者の診療に当った。一八七五（明治八）年横浜に移り、二六年間山手に在住した。その間十全医院外科医長、山手一般病院院長、神奈川県衛生局顧問、アメリカ領事館衛生顧問、日本政府中央衛生会委員などの要職を歴任した。夫人は夫の死後しばらく日本にとど

まいったが、ロンドンで天寿をまっとした。夫妻揃って四地区に眠る。

ゲールツ (Görlitz) Anton J.C. Geerts 1843—1883

オランダ人の理化学者で、日本薬局方の制定に功績があった。明治二年長崎医学校の教師として着任した。同七年上京、東京司薬場創立に参加した。京都の司薬場試薬監督を経て、九年横浜司薬場主任となった。昭和五一年神奈川県薬剤師会の手で新しい碑が建てられた。九地区

トッサ Emile Massai 1836—1877 フランス人で同陸軍

軍医、晩年には山手病院の内科医であった。明治初年日本の医学はオランダ医学からドイツ医学に転換した。東大医学部の前身である大学東校では、明治四年ドイツ人医師ミユルレル、ホフマンが着任するまでの一時期、臨時にオランダ人ボードイン、フランス人マッセをお雇い教師としたことがある。その期間はいずれも短かった。マッセは高知藩病院、生野鉾山、富岡製糸場で働く同胞のために診療に当った。晩年の数年間を横浜で過ごし、在日同胞から慕わ

れた様子が墓碑に刻まれている。一六区

メクル Alphonse Meere 1846—1917 フランス人で横浜

居留地の医師、ダリストンの後継者として山手病院の院長に就任した。居留地二四番に住んだ。妻アンナと共に埋葬されている。六区

パーセル Theobald Andrew Purcell 1841?—1877 イ

ギリス人で来日当初は同国海軍軍医(外科医)。のち日本政府のお雇い医師となった。鉄道建設が開始され、外国人技師中病氣する者が多かったので工部省は外人医師を採用した。ウィーラーも契約されたが、彼はパーセルの助手であった。二〇区

ウィーラー Edwin Wheeler 1841—1923 イギリス人医

師で同海軍軍医として来日。イギリス公使館付医師となり、工部省鉄道医を兼任した。十全病院にも勤務、山手病院名誉院長となった。のち開業したが、彼の採り上げた赤ちゃんは千人に達したといわれ、居留民の敬愛の的であっ

た。八二歳の長寿を保ったが、大正十二年の関東大震災で不慮の死を遂げた。一六区

以上のほか山手外人墓地には医師、医学薬学関係と思われる者が約十名いるが、その詳細は知られていない。

(横浜市)

明治初期に於ける入歯

細工師の引札

竹内 孝 一

入歯細工の饒ハ和漢洋の妙手を学び金銀ごむ及びもろの骨、石木を以御好に應じ細工可仕候、随事申上候他方にも同じく金銀、木膠諸品の入歯細工師あまた世上にあるといへどもさて、かみあわせ悪く或は口中にそひかね、かへって入歯のためにいたみを起す事あり之は不鍛練のあやまちなり、拙者自慢がましくなれども吾が細工する入歯ハ口中に添ひ方よく、かしゃくの工合よし、若し口中に落付わるく入歯の為にいたみあらば入歯を受取り細工のだいきんハ御返し房り申候間諸君はうたがひなくば来東あるべし

愛知県三河国幡豆郡西尾葵町

入歯細工師松光堂松五郎謹白

むせ歯ののこり歯、正歯或ハもろもの品を以つぎ歯、ねじり留の細工仕可候、正歯耄本のねぢり留金耄円、銀齒耄

本のねじり留金五円より、右にあぐる外歯の凹等を金銀、木膠のるいに埋歯の細工致し候、西洋入目細工金貳円半より可仕候

出張所 豊橋本町梅鉢屋方にて

新八月廿五日より九月廿六日迄

豊橋とは旧東海道三河国吉田宿であり、梅鉢屋は吉田宿本町通り（現新本町）に現存し今は文房具店を営んでいる老舗である。当家の老母の話によると先代は明治二十年まで宿屋を経営していた由である。

吉田が豊橋と改称されたのは明治二年（一八六六）であるからこの間の出来事である。明治十八年（一八八五）に入歯、歯抜、口中療治接骨業者取締り方の通達がされ、明治二十三年（一八九〇）高山歯科医学院が芝区伊皿子町七十五番地に開校された。従って明治廿年以前に豊橋の如き地方小町村に正規の歯科医がいたとは考えられない。コピ―上段に西洋上等と書いてあるが舶来思想による宣伝用語であらう。

目の図は入目を表し黒色の総入歯は御歯黒を示し、白色の総入歯図は普通の歯図である。

松光堂松五郎なる人は江戸時代より伝授された入歯技術を習得した民間歯科治療師であらう。かつこうした入歯細工師が入目（義眼）まで取扱っていたことは注目すべき事である。

価格表（アタイズケ）

一、黄楊木ヲ以入歯老本	代	金八錢
一、黒柿（くろがき）	同	金廿錢
一、黒檀	同	金四十錢
一、備前石	同	金拾五錢
一、正齒	同	金三拾錢
一、支那石	同	金四十錢ヨリ以上
一、象骨	同	金五拾錢
一、虎骨	同	金老円
一、一角	同	金老円半
一、鯨牙	同	金二円
一、銀	同	金貳円半ヨリ以上
一、黄金	同	金五円ヨリ以上

総歯価格（ソウハアタイ）

一、棗 金

一、黄楊		金
一、黒柿	植込	金
一、正齒	同	金
一、黒檀	同	金
一、象骨	同	金
一、虎骨	同	金
一、一角	同	金
一、鯢牙	同	金

此外御好ニ随ひ何品にても細工仕可く候也。

明治初期に於ける地方町村は民間齒科治療師（入齒細工師）がその必要に應じて一定の期間宿屋等に当留してこうした引札（ちらし）を用いて宣伝し巡廻治療したものであらう。

- 文獻 一、藤田恒太郎著 齒のこぼればなし
 一、松宮誠一著 血協守之助伝
 一、中原泉、新藤恵久著 浮世にみる齒科風俗史
 一、山本成之助著 川柳医療風俗史
 一、増田太次郎著 引札絵びら錦絵広告

（豊橋市）

肢体不自由児リハビリテーション の先駆者としての高木憲次博士

福嶋 正和

近年、脳性まひ児など肢体不自由児（以下不自由児と略す）のリハビリテーション療育の発展は目ざましいものがある。とくに早期発見・早期治療により、顕著な機能回復が期待され、あるいは重症例でもその重度化が予防されるようになった。さらに不自由児（者）に対して教育や職能訓練により、社会的自立も配慮されるようになった。

我国の障害児福祉の歴史は古く、六世紀に仏教が伝来した頃にさかのぼる。しかしそれは仏教思想に基づいた救貧的あるいは慈善的事業の域を脱しなかった。仏教の因果応報思想はむしろ障害者を前世の因縁によって忌むべきものとして社会から隔絶しようとした。そのため障害児福祉は千年有余にわたって全く停滞し、明治時代に入ってもほとんど発展しなかった。

本格的な近代的不自由児リハビリテーション療育の端緒を切り開いたのが、高木憲次博士（一八八九—一九六三）（以下博士と略す）である。博士は東大整形外科教室第二代教授として数々の学問的業績を残し、日本整形外科学会の樹立などの功績は高く評価されているが、本題では不自由児リハビリテーション療育に尽された軌跡を追ってみたい。

博士が大正一二年ドイツ留学中に、約一〇〇に及ぶ不自由児施設が全国に整備されているのを見聞し、一方我国にも唯一つの施設もないことを憂慮されたことが、不自由児問題に傾倒するきっかけとなった。博士は我国に療育施設が不可欠であることを主張し、この理念は人類愛から発したものでなければならぬといって世の識者の関心を求めた。しかし当時我国は軍事体制が確立し、社会運動に対してはきびしい弾圧の時代であった。博士はしばしば私服警官に尾行されたとある。それにもまして当時は障害児に対する偏見や蔑視が強く、家族が障害児を隠す傾向があった。博士はそのため世の啓蒙運動を展開し、「隠すなかれ」運動を提唱した。博士は政府に不自由児施設の設立をしば

しば進言したが、理解が得られず、そのため民間の力で施設を建設して政府の蒙をひらこうと決心した。財界に働きかけ、その理解を得るとともに多額の寄付金が集まった。また、その間に入沢達吉博士や長与又郎博士などの理解と協力のあったことも忘れてはならない。紆余曲折の末、博士が療育施設の構想をいだいて二〇年有余の執念が実り、ようやく昭和一七年に板橋区に整肢療護園が設立された。

博士の描いた療育施設の理念は、医療だけでなく、不自由児を社会的に自立するまで見守るべく、教育と職能訓練の機能も具備したものでなければならぬということであった。そのため整肢療護園には診療棟、厚生棟、義肢装具研究所の他、職能訓練部があった。教育に関しては療護園内に不自由児特殊学級を併設することを博士は考えていたが、戦後昭和二七年になってようやく特殊学級二学級が設置された。

近代的リハビリテーションは早期発見・早期治療に始まり、教育、さらには職能訓練を経て、社会的自立を志すことにあるが、博士はすでに大正年間に、医療・教育および職能訓練の三位一体となった療育構想を練り、二〇年有

余の啓蒙運動により、それを達成されたことは誠に驚異である。

昭和二〇年三月東京大空襲で整肢療護園は焼失した。戦後博士は多大の苦勞を重ねて、昭和二七年整肢療護園は再建された。現在も我國の不自由児療育の中心的存在として博士の遺志を繼いで整肢療護園は小池文英園長のもとに活動している。

戦後、博士は児童福祉法の起草委員として療育施設の法制化に努め、不自由児施設の設定・運営が児童福祉法の中に取り入れられることとなった。さらに博士はこの療育事業の輪を地方に拡げなければならないと考え、地方に同様の療育施設を作ること積極的に援助・助言した。その最初のものとして我國最初の県立不自由児施設「群馬整肢療護園」が昭和二五年に創立され、以後全国的に同様の施設が七六カ所（昭和四九年現在）に及んでいる。

最後にもう一つ忘れてはならないのは、昭和二四年から足かけ四年にわたって実施された全国巡回療育相談であった。これは児童福祉法や身体障害者福祉法の施行という歴史的段階において、療育思想の普及・徹底をはからなければ

ばならないとの博士の発案に基づき、政府に進言して実現したものであった。これはリハビリテーションに関する各府県の理解と関心を高めるのに大きな力となった。現在では各府県の事業として巡回療育相談は全国的に定着して、地域での障害児リハビリテーション事業の一つの柱となっている。

博士は東大教授として最高の地位にありながら、不自由児療育こそ博士の情熱であり生き甲斐であった。象牙の塔にこもり切れなかった人間愛にこそ博士の偉大さがある。

（千葉県我孫子市）

戦前の精神科病院における

脚気の発生状況

— 巢鴨病院—松沢病院の統計を中心に—

岡 田 靖 雄

わたしは『私説松沢病院史』の執筆にさいし、現在の松沢病院の最前身東京府癲狂院設立の一八七九年から一九四五年にいたる入院患者の動態をまとめた。すでに立津政順

は戦時中の死亡率激増をあきらかにしたが、松沢村に移転した一九一九年にも死亡率が二五%をこしたことが今回わかった。東京都公文書館資料および病院年報から死因につ

いてほぼたしかめえたのは、一八八八、九四—九六、一九〇〇—四五年の計五〇年分である。死因の第一位をしめるのは衰弱で、結核および脚気がそれにつぐ。しかも死亡率

のたかい年には、脚気による死亡者数もます。杉江薫が一九一六年府下一一の公私立精神科病院の死亡者を分析したところでは、早発痴呆患者の死亡の三分の一は脚気による

のである。また東京府癲狂院は府脚気病院の兄弟病院として誕生し、一時期は向ヶ岡で脚気病院となりあってもいた。そこで、戦前の精神科病院における死因の代表として脚気をとりあげ、すこしく分析してみた。

巢鴨病院—松沢病院における脚気の症状については、一九〇九年の呉秀三の記載をみるだけで、その全貌はつかめないが、致命率のきわめてたかい疾患であった。たとえば、一八八八年には年間在籍五二三名中死亡六二名、脚気の発生は一五名で一〇名死亡、一九二五年の退院者中の脚気合併者は五七名で、うち死亡五五名である！

一九〇〇年後には死亡率は一〇%、ときに一五%をこし、年間の脚気死亡者数も一〇名、二〇名、ときに三〇名をこす。このうち死亡率もへるとともに脚気による死亡が〇の年もあるが、一九一八年から死亡率が急増し、脚気による死亡が激増する。一九一八年の年間在籍六三二名中死亡九九名（衰弱二九、結核二九、脚気二ほか）、一九一九年は在籍六四一名中死亡一六一名（衰弱四六、結核四七、脚気二五ほか）など。一九二六年から白米使用中止によって脚気の発生がおさえられる（この脚気対策はあまりにお

そすぎた)。そして一九四〇年からまた脚気による死亡がではじめる。

立津によれば、戦時中におおかつた栄養失調の診断は、栄養失調の診断を厳密にせよとの占領軍の指令により一九四五年からは慢性胃腸炎や脚気にかえられた。また一九四〇年の内村祐之・古川復一の報告にみる「所謂衰弱」（戦時浮腫）は、神経症状をかくことをのぞくと、呉の記載にかなりにかよっている。立津は、慢性および急性の胃腸炎、栄養失調、脚気を栄養障害によるものとまとめている。一九〇〇年前後と第二次大戦中とでは精神病院における合併症医療の水準はことなるし、同一死因とされるものでもその具体的内容はくいちがうかもしれない。ことに「衰弱」、「虚脱」といった死因の内容はそのときどきにかなりことなるだろう。だが、不完全な戦前の記載から死因をおおづかみになめるには、衰弱、胃腸炎、脚気、栄養失調を栄養障害症候群とまとめてみるべきである。

戦前の精神科病院で、公費患者の食費はきわめて低額におさえられていた。一九一九年前後の米価暴騰期にも食費はなかなかあがらず、また内村らによれば、一九三九年度

まで一日二〇銭をわっていた食費が一九四〇年度からやっと一日二五銭になったのである。死亡率を自費患者と公費患者とにわけてみると、死亡率がたかくなるとき、公費患者のそれは自費患者のそれをいちじるしくうまわるようになる。しかも死亡率の動きは米価の動きに平行するのである。その経過をみても、死亡率増加は主として栄養障害によることがわかる。自費患者、公費患者にわけた死因や脚気発生の統計はないが、公費患者に脚気がおおいことは指摘されていた。これらから、前記のように栄養障害症候群をまとめるのが適切であることがわかるし、その代表として脚気はあったのである。

立津はまた、一九四〇年にふたたび脚気が発生した原因につき、内地米を外米にかえたことが原因であるとする当時の村松常雄副院長の言をひいている。そのまえについては、脚気発生と外米使用とが関係あるかどうかは、購入した米についての記載がととのっている年がほとんどないので、たしかめられなかった。だが、村松のこの言は、脚気の原因がビタミンB₁欠乏だけではないことを示唆している。

（東京都峡田診療所）

比較語学的方法による身体意識史

検討の試み(五) 成長・増殖

三 輪 卓 爾

さきに第七十八回の医史学会総会で空間認識を扱い、その際これと多少とも類推的に意識される一面を持つ時間認識についても若干触れるところがあった。いうまでもなく生物は空間的かつ時間的な存在であるが、今回はその両面に関連した基本過程としての成長を扱うこととする。成長には不可避的に分化・増殖などがからまってくるが、最も単純化していえば、成長というのは時間的経過過度に應じて生物が空間的占有度を変える現象であるといえよう。

成長をさす古い日本語には、上代語にすでに見られる「ひたる」(動詞、「日足る」?)や、後代に現われる「そだつ」などもあるが、これらの合成語と見られるものを除外して、単独語に限るならば、最も多く遭遇する語は「おふ(生ふ)」である。

いま空間的占有度を縦軸にとり、時間的経過度を横軸にとるならば、模式的な一種の成長曲線が得られるであろうが、この場合の縦軸は、おそらく語根 *oy* になぞらえることが可能かと思われ、右の動詞「生ふ」(*otu*)や形容詞「大」(*oto*)はこれから導くことができる。

ヒトの場合、右の模式的な成長曲線をかりに細胞数で表現すれば、受精卵で「(II)」であつたものが、出生時にはほぼ「I」となり、その後も右上方に向かって、成熟時点で約「III」となつて水平化する。老化を単純に数量化するのは困難だが、加齢とともに体細胞数は減少して、新生・再生を欠く脳・脊髄などでは七・五―七割にも低下するといふ。

ここで横軸の時間経過度にもどるが、この軸は語根 *oy* になぞらえることが可能かもしれない。この場合、動詞は「老ゆ」(*oyu*)であり、名詞は「親」(*oya*)である。後者については多少の注釈が必要で、一般に親は親子関係を前提とするものとしてのみ受取られがちであるが、「親どり」・「親がえる」などが所生の子の存在をかならずしも要求しないように、生物として時間経過度を充足し、成長

過程を完了したポテンシャルな『親』たる個体もまた「親」であって、アイヌ語の「親」に年長の意味があり、ドイツ語の「親」(Eltern)が英語 elder (より年かきな)と同源語であるのも、相似の現象であらうと考えられる。

ただし、日本語「生ふ」について注意すべき点は、平安朝まで降らぬ八世紀文献に関するかぎり、主としては植物の成長・繁茂について用いられている点である。『万葉集』には「生ふ」ないしその活用形は約六五箇所出現するが、すくなくとも五三箇所以上が植物(草本・水藻・樹木の頻度順)であって、動物はヒトの毛髪が四箇所に見えるにすぎない(『古事記』もほぼ同様)。生活・出生・成長・分娩・出芽等を意味し、しばしば多義にわたる「いく」・「ある」・「うむ」・「はゆ」・「なす」・「むす」などについても触れるが、これらは一つの漢字「生」が宛てられ、この「生」についても幼若な植物が土から生え出ている象形と解する説が有力である。ただし漢字「生」の場合、右の日本語「生ふ」と異り、すでに紀元前に動物やヒトに適用されている。なおヒトの毛髪のほか爪・歯など、他動物では角・牙・雞冠・四肢なども、可視状態への変化

や成長の様子から、本来は植物の「生ゆ」が類推的に転用されて、この種の転用は毛根・爪根・齒根など現用の解剖用語にも及ぶものと見られよう。

西欧語について多少言及するが、英語 grow はその祖形が、はるか印欧祖語までさかのぼることが可能なのに反して、いわゆる Old English (一二世紀以前)までは植物についてのみ適用されうる語であった点では、日本語「生ふ」などよりさらに新しいというべきであらう。ちなみに、この grow (成長する、生える)が、grass (緑)や green (草)と同源の語である事実も併せ見るに足る。なお O.E. の時代に動・植・鉱物を問わず單純に増大を意味する wacian (現在多くは月が満ちてゆく場合のみ。ドイツ語 wachsen が同源)系の動詞が存在した。grow のように植物の成長から動物・ヒトのそれに及んだのは印欧語一般の傾向でもあるらしく見える。

成長の觀念が右のように広く植物からの類推に依存する面が強かったのは、草本の世代が一般に短く、木本でも部分的成長は季節的变化によって觀察しやすく、しかも農耕社会で植物の成長・増殖は重大関心事であった(そこでこの

首長的発想たる蒼生・青人草などを参照）ためであろう。

ただし、『古事記』の冒頭に食塩の擬出が記されているが、鉱物の成長を極限的に想念して、植物の増殖をそれに重ねた「さざれ石の巖となりて苔のむす」例や、小動物の増殖状況を意識した『さばえなす』例なども、忘れてよいわけではない。

（東芝総合健診センター）

ツウンベリーの来日とその意義

高橋⁽¹⁾ 文・川瀬⁽²⁾ 清

CPツウンベリー（一七四三〜一八二八）は、一七七五年にオランダ商館の医師として来日し、翌一七七六年には江戸参府旅行に参加し、同年十二月に帰国の途についた。約一年四カ月の滞日であったが、その間、日本の通詞や医師達と交流を深め、彼等にヨーロッパの医学、博物学等を教えると共に、日本の植物、動物、鉱物等を観察、蒐集し、帰国後にこれらに関し多くの著書や論文を書いた。

スウェーデンの南部、イエンスヨーピン（Jönköping）に生れたツウンベリーは、一七六一年十八歳でウプサラ大学に入学し、九年間医学、博物学を学んだ。この時の師が、植物の分類体系を確立したリンネであり、ツウンベリーは、地球上の植物をその体系におりこもうというリンネの計画になう、すぐれた一員となるのである。

一七七〇年に奨学金を得てツウンベリーは、さらに医学

の研究を重ねるためにウブサラを發つてパリに向い、途中
アムステルダムで、リンネの友人の植物学者ブルマン教授
に会った。このブルマン教授父子の努力により、ツウンベ
リーがパリ留学中の一七七一年に、日本行きの話が具体化
したものと推察される。パリからそのことを伝えるツウン
ベリーの手紙に対して、師リンネは「……専門の植物学者
が、かつて日本を訪れたことは一度もありません」と書い
て、植物学者としてのツウンベリーに期待すると共に、
「……ケンペル、クライエル、そして貴殿が、日本での三
人目の名医になることを考えて下さい……」と綴つて、医
師としてのツウンベリーにもまた期待を寄せているのであ
る。

一七七一年末、オランダ東印度会社船の外科医としてア
ムステルダムを發つたツウンベリーは、南アフリカのケー
プタウンに三年間滞在した後、バタビア經由で日本に到着
した。

日本では、解体新書の翻訳出版の翌年であり、ツウンベ
リーはオランダ商館の唯一の知識人として、医学のみなら
ず自然科学に関するあらゆる種類の質問をあびた様であ

る。長崎や江戸では、毎日訪ねて来る通詞や医師達と交流
を深めつつ、彼等に当時日本で蔓延していた性病に対し、
水銀療法を教えてその治療に努め、それなりの効果を得た
ことに満足している様子が、その著書や手紙等からうかが
える。ツウンベリーが教えた方法は、昇汞を水に溶かして
内服するものであり、当時ヨーロッパで用いられていた流
涎をもたらずまで水銀剤投与を行う方法とは対照的に水銀
の毒性が現われない程度の用量を服用して効果をあげるも
のであり、ウイーン大学教授ファン・スウィーテンにより
広められていった治療法と思われる。

さらに日本の艾や鍼について観察し、また解毒薬とされ
ていた日本の馬の胃結石を持ち帰り、これらについて後に
論文を書いている。

一七七九年三月に、九年間の旅を終え祖国スウェーデン
に帰つたツウンベリーは、同年八月に王立科学アカデミー
で「日本の貨幣」について講演をし、その記録はオランダ
語、ドイツ語に翻訳された。一七八四年には、リンネの分
類体系に従つてはじめて日本の植物を分類した『日本植物
誌』を出版した。さらに同年十一月、王立科学アカデミー

で行った「日本国民について」の講演は、翌年ドイツ語に翻訳された。一七九三年に出版を完成した四巻からなる『ヨーロッパ・アフリカ・アジア紀行』は三、四巻に日本についての記載があり、ドイツ語、英語、フランス語に翻訳された。オランダ東印度会社の政策や、アフリカ原住民に対して厳しい目を向けているツウンペリーは、日本国民に対しては極めて好意的な印象を述べている。

このように講演、著書、論文等により、当時未知の国であった日本を、ヨーロッパに正しく紹介したツウンペリーの業績は評価されよう。

ツウンペリーと日本とのかわりについては、未紹介の部分が多くあり、今後それらを調査していく中で、ツウンペリー来日の意義を深めたいと考える。

(1) 北陸製薬、(2) 東京薬科大学

明治時代発刊の医学書に見られる 歯科にかかわる医学用語について

岡田治夫

歯科の分野に用いられた医学用語の変遷について追究することは極めて興味があり、とくに、明治時代に発刊された医学書籍の中から明治五年・九年・一六年・二六年発行の次の六冊を選んで調査した。

○明治五年啓蒙義舎蔵版の『官許虞列伊氏解剖訓蒙図』の刻成版では、永久歯を持久歯、乳歯を不久歯とし、歯牙を帽部、頸部、齒根部に分け、齒髓を軟塊腔、白亜質を牙皮といっている。歯牙の形成期を乳頭期・胞状期・囊状期に分類し、乳歯の萌出を乳歯発出と記すなど……。

○明治九年慶応義塾同社の松山棟菴・森下岩楠合訳の『初学人身窮理上巻』では、前歯、門歯、切歯Ⅱインシツソル・珥瑯質Ⅱイ子メル・二尖歯、前臼歯Ⅱバイコスビット・智歯Ⅱウイスドム・尖歯Ⅱコスビット・臼歯Ⅱモラル



図 1 明治 5 年刻成盧列伊氏解剖訓蒙圖

ス・冠の義齒帽Ⅱクラウンなど……。

○明治一六年埼玉県蔵版坪井為春編の『初学生理書』では、門歯Ⅱ即前歯又切歯・犬歯Ⅱ眼歯又武牙・二頭歯Ⅱ小臼歯・知歯Ⅱ即親不智歯・「乳歯根吸収セラレテ、乳歯脱落シ、之ニ代リテ成齒ヲ生ズ」など……。

○明治二六年富山房書店の呉秀三著『新撰人身生理学』では、「消化ノ機制ノ初マル所ハ口腔ニシテ固形食物ハ先ツ此処ニ於テ前歯ニテ切り犬歯ニテ裂キ舌ニテ之ヲ一側ノ臼齒間ニ遣リ頰其外ニ下顎ノ運動ニヨリテ磨碎ス之咀嚼ト

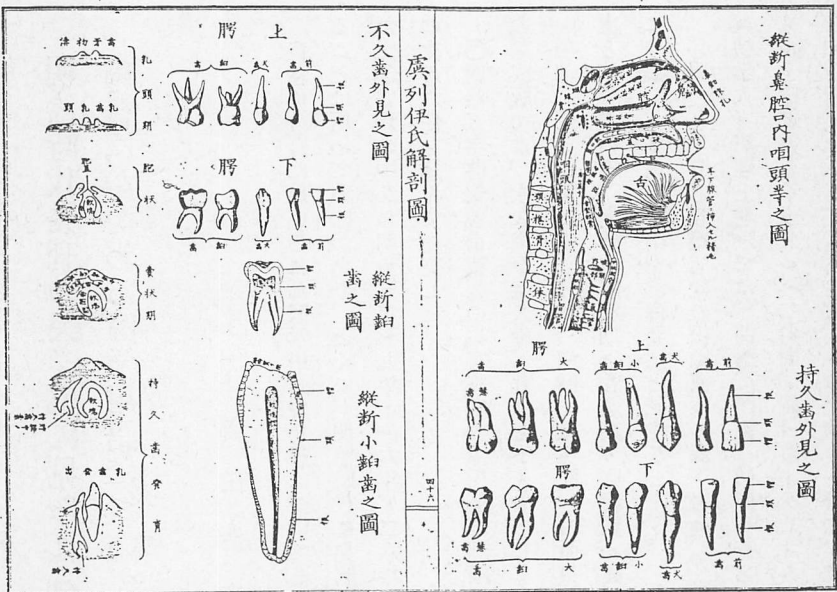


図 2 盧列伊氏解剖図の一部

云フ……」・「齒ハ上下両顎ノ齒槽穴中ニ坐シ牙質ヲ本トシ其ノ心ニ髓ヲ容レ其外ヲ琺瑯質（冠部）ト白亜質（根部）トニテ被ヘリ……」などである。

○明治三九年金港堂書籍株式会社の坪井次郎著『新編生理教科書』では、「成人ノ口中ニハ三十二枚ノ成齒アリ、各齒ノ上下顎骨窩内ニ嵌入スル部ヲ齒根、骨窩ヨリ現ハレタル部ヲ齒体ト云フ、門齒ハノミノ如キ形ヲ有シテ食物ヲ截斷スルニ適シ、犬齒ハ錐ノ如クニシテ食物ヲ裂クニ適シ、臼齒ハ白クシテ食物ヲ捏挫スルニ適セリ。齒ノ組織ハ各齒共ニ齒骨質・琺瑯質及ビ白亜質ノ三部ニ區別ス。齒骨質ハ齒ノ実質ヲ形成シ、齒体ノ中央ニ一小空洞ヲ有ス、而シテ此ノ空洞ハ齒根内ノ小管ト連絡シ脈管及ヒ神經ニ富メル齒髓ヲ含トセリ……」。

とくに、興味深いことには、明治九年松山棟菴・森下岩楠合訳の『初学人身窮理上巻』では「ハイヂン」の項で「齒ヲ丈夫ニ保タントスルニハ之ヲ清淨ニセザル可ラズ故ニ食時ノ後ハ必スブ、ロ、ツ、シト唱フル齒磨ノ道具ヲ用ヒ水ニテ能ク洗フ可シ云々……」。

また明治初期の医書には、腭・齶齒・慧齒などの医語や

外来語そのままの仮名文字によって表現された歯科医学用語が見られるなどについて紹介する。

（津島齒科総合研究所）

仙台領の隠れた本草書

『賢親本草』

ヒキノ ヒロシ

『国書総目録』に「賢親本草けんしんそう 一五巻目録一卷付三二冊（類）本草（著）賢親（成）寛三（享）東北大（原本、仙台本草を付す）」と記載されている本がある。

第一冊は薬材の原植物の日本名および薬材名の目録となっている。第二―十七冊は賢親本草、第十八―二十一冊は仙台本草、第二三冊、二四冊は長氏本草となっており、第二五冊以降は外題がなく、収載内容の表示に止まっている。内容は草、木、穀、菌、虫、魚、貝、鳥、獸、人、水、金、玉、石、土、造製物に及ぶ。

この本は寛政二年から書き始められており、文中最も新しい日付は天保八年である。

記述の方法は必ずしも整備されていないが、見出し語、和名、方言、形状、産地、効用、文献に分けられている。

見出し語は漢名に統一しなかったようであるが、和名や方言、南蛮語も使われている。方言としては蝦夷から琉球のものまで集められている。『賢親本草』に収載されている京方言は、『本草綱目啓蒙』に載っている対応する京方言よりも詳しい。方言のなかでも仙台領のものが圧倒的に多く、全巻の仙台方言を抽出したものは、江戸時代の仙台領における同植物に関する方言辞典ということができ、その質量は『物類称呼』や『本草綱目啓蒙』その他に載っている仙台方言を遙かに凌駕する。

産地も日本中に及んでいるが、仙台領北半分が詳しい。薬効については『本草綱目啓蒙』に比べれば、かなりの配慮が払われている。特に著者自身の治験例が注目される。

この本の特徴の一つは当時の仙台領での薬店における生薬取引の一端が記録されていることである。

この本を執筆するに当っては古今内外の多数の書物が参照されているが、引用回数が多いのは『本草綱目』、『救荒本草』、『大和本草』、『和漢三才図会』、『爾雅』などである。

なお第二三冊は『大和本草記聞』となっており、『賢親本

草』のシリーズとは別のものがまぎれ込んだものと思われる、その内容は既知の『大和本草記聞』のそれとは一致しない。

著者長崎屋儀兵衛賢親は仙台領涌谷の人。長崎屋は代々薬種商を営む。賢親の人となりは不明であるが、当時としてはかなり観察力のある人の方である。本文を読むと小野蘭山に師事したようにも思われるが、詳しいことは判らない。

この『賢親本草』が未定稿に終わったのは、本稿を執筆中に小野蘭山の『本草綱目啓蒙』が世に出たため、完成の意欲を失ってしまったためと推定される。

(東北大薬学部)

カスバルの江戸での伝習

動向について

—『阿蘭陀外科医方秘伝』の紹介—

宗 田 一

カスバル (Casper Schaemburger) は、慶安二年八月十三日 (一六四九・九・一九) 来日、慶安四年九月十八日 (一六五一・一一・一一) 離日した蘭館医で、江戸参府に随行した最初の蘭館医として知られ、前後二回にわたって参府に随行、第一回目は参府の一行と別行動をとって、一〇カ月近くも江戸に滞在して医学伝習を行った。世にカスバル流外科として著名なのは、このような特種の立場にあったのに起因する。

カスバルの医学伝習資料としては、河口良庵の『阿蘭陀外療集』巻六所収の慶安三年十月のもの (恐らく長崎在勤の長崎奉行山崎権八郎に提出の写) が知られるが、新出のものとして『阿蘭陀外科医方秘伝』がある。これには慶安

三年九月の日付があり、恐らく江戸在勤の長崎奉行馬場三郎左衛門に提出された写を含むものと考えられる。

河口良庵の前掲書は、痞腫寒熱風痰之弁、膏藥の順序で、河口系伝書はおおむねこの配列を後代まで使っているが、後代のは見様（診断）と療治にわけているのに対し、前掲書では寒・熱・風・痰の四性毎に見様・治法を記している。また膏藥についてはカスバル一七方と諸家の方を区別しているが、後代の伝授本ではこれらを一括し、方数も増えている。

『阿蘭陀外科医方秘伝』では「夫人間之五体ニモウルト云血ノ名四ツ有」として四体液病理説がラテン語のまま紹介されており、河口良庵のものにもこの型式のものがみられるが、この四体液病理説は南蛮流沢野忠庵の伝書にもみられるところで、忠庵系のそれをも参照して整理しなおしたものが河口良庵系のものなのだろう。そのような整理されない前のカスバルの原姿を窺えるものとして、本書は貴重であり、また「井上筑後守殿御用被召上藥物之事」、「阿蘭陀藥違様井上筑後守殿上写」、「井上筑後守様坊主衆療治」、「水戸中納言様小姓足ノ療治」等の記録がみえる。な

お、カスバル十七方膏藥は原名のままカナ書きされ、訳名は与えられていない。

（大阪大学医学部医学概論）

Bonwill 咬合器の史的考察

永田 和弘

機械としての咬合器が、宿命として孕む技術と思想の分離という問題を顕著にさせたのは、一八五八年の Bonwill の解剖学的咬合器であった。

義歯など口腔に装着される一切を総称して補綴物 (protheses) というが、現代の全ての補綴物は、咬合を機械的に再現する咬合器 (articulator) と呼ばれる装置の上で製作される。咬合を再現すると言っても、その再現能は、咬合器の機械精度によって大きく異なり、簡単なものは歯型模型ないし顎模型の単なる咬み合わせに過ぎないし、高度なものは、コンピュータの制御による顎運動の再現までする。つまり、咬合を再現することは、精粗を問わず顎運動を再現させることであるから咬合器は顎運動の再現装置ということもできる。ここに機械である咬合器が生体の機能運動をどこまで模倣し得るかという問題がある。その問題は本質的には、「機械の再現能」という技術的な問題と、機械では再現しきれぬ「生体とは何か」という思想的な問題に分けて考えることができる。

以来一二〇年。咬合器は機械精度の点でも又、生体の運動観察並びに、運動計測の点でもその技術的側面は、改良が加えられてきた。これらの進歩も観点を変えてみれば咬合器が現実の臨床に有意義でなくてはならないという要請が上記の進歩を促したのであり、上記の進歩を支えたのは、現実の臨床であったということが出来る。つまり、咬合器は生体の顎運動をどのように観察計測し、どのように把握したかという技術と思想の表現であると同時に、各時代における医療状況の水準をも示すものでもある。だから咬合器の発展は、咬合器自体の構造発展の歴史として捕えるだけではなく、各時代における医療状況や、生体観をも含めた歴史環境の中からの産物として捕えなくてはならないのである。

医療技術と生体観測技術を含めた「技術」と、医療観や生体観を含めた「思想」とを統合するものとして咬合器が位置しており、よって咬合器は「医療思想史」の Key

Idea を成していると考えることが出来る。従来咬合器の機械的な構造についての変遷史は数多いが、咬合器の思想構造について史的考察をしたものは、極めて少ない。本旨は、咬合器は技術をも包含した思想の産物であるとの観点から見た歯学思想史の試論である。

(松阪市)

緒方洪庵の薬箱について

青 木 允 夫

適塾の解体修復を記念して、適塾記念会と内藤記念科学振興財団の共催で「緒方洪庵と適塾展」が五月末から八月上旬にかけて大阪、福岡、岐阜・川島、東京で開催された。

この時、洪庵の「薬箱」が出品され、洪庵が使用した薬を知ることができた。

洪庵の薬については、洪庵が大阪で適塾を開いた天保九年（一八三八）の自序がある「適々斎薬室膠柱方」がある。この「膠柱方」については、大塚恭男先生が本誌第九卷第二号（昭和四十八年）に詳細に解説されている。

洪庵の「薬箱」には、紙袋入生薬五十八種六十袋、製剤十種、ガラス瓶十一本（六本欠）が入っている。品名は次の通りである。

崩那 土茯 接花 麦門 精麦 蜀葵 橙皮 加密 芍

藥(二袋) 蒲公英(二袋) 茅根 実菱 葵葉 葵花 亜

麻 冬葵 幾那 活失 蘭苔 格倫 亜児 桂枝 加斯

撰綿 遠志 良姜 茴香 肉蔻 縮砂 苘根 罌粟 甘草

乾姜 撒尔 雙蘭 健質 纈草 山午 橙葉 乾葡 杜子

玫瑰 鹿角 薄荷 七葉 蘇葉 朴屈 蜀羊 杏仁 水梅

茯苓 茜根 野艾 將軍 桔梗 角石 香附 葵根

これらの藥と、開業初期の著述である「膠柱方」と比較してみたい。「膠柱方」については大塚恭男先生の前述の論文を引用させていただいた)

『膠柱方』冒頭の総論としてあげられている薬物は四十品目であるが「薬箱」には次のものが入っていない。

香 羌活 陳皮 半夏 白芷 無花果 欵冬花 海人草

杜松木(霸王塩、瀉利塩はガラス瓶の方に入っていたかどうか判らない)

逆に『膠柱方』のどこにも記載がないが「薬箱」に入っている薬物は次の九品目である。

乾葡 七葉 蘭苔 活失 遠志 野艾 茜根 茯苓 角

石

七葉(樹皮)は幾那の代用に、遠志はセネガと混同し、

活失(亜)、野艾(蒿)は苦味健胃に、茜根は利尿通經に、

茯苓は半夏の代用として用いたものであろう。このうち茯苓と角石は和蘭藥鏡、遠西医方名物考などの洋方藥学書に記載がなく、洪庵訳の「袖珍内外方叢」にも出ていない。

そのほか、洋方藥学書に記載がないが、『膠柱方』に出ており、かつ「薬箱」に入っている薬物として、麦門(冬)、蘇葉、杏仁、桔梗がある。洪庵の江戸での「勤仕向日記」に桔梗を咳嗽に処方した記述がある。洋方書になくとも、著名な薬物は使用していたことがわかる。

「薬箱」に入っている製剤は次の通りである。

健胃丸 伸気丸 和胸丸 阿魏丸 沃承丸

将鹼丸 鳩承丸 下腹丸 芫菁丸 実葱丸

このうち、次の二剤の処方方が『膠柱方』に出ている。

健胃丸 竜胆 縮砂 木香末

又方 当薬 縮砂 木香

和胸丸 海葱 金硫黄 甘草

「薬箱」には、ガラス瓶が五本残っているが、いずれもカラで、何が入っていたか不明であるが、洪庵の日記や書簡によって、サントニン、キナ塩、ホフマン(エーテル精)、

酒石酸、ソイクル（砂糖）、ラウダ（阿芙蓉液）など使用していたことが知られている。

洪庵の「薬箱」にはビン入りのものを除いて、薬物がほぼ完全な形で残っているので、これを通じ当時の洋方医の使用した薬物を知ることができる。また、これら薬物を生薬学的に検討することも必要であろう。

（内藤記念くすり博物館）

山田顕義と公衆衛生

西川 瀨 八

一、大日本私立衛生学会頭

大日本私立衛生会は、明治一二年に設置された官制の中央衛生会に対する民間の団体で、明治一六年二月一八日に設立された。それは、公衆衛生事業は当時発展途上国であったわが国で発達させるには、政府が施策の中心とならなければならぬので中央衛生会を設置したが、民間を疎外しては公衆衛生活動の完璧は期し難いとして大日本私立衛生会を設立した。そのため大日本私立衛生会の目的は「全国民の健康を保持増進する方法を究明し、衛生上の知識を普及し、ひいては衛生上の施設を翼賛する」ことにある。

そして毎月常会を開き衛生教育を実施した。そして後には伝染病研究所を設けて経営し、国内では防疫に関する知識技術を普及させるとともに、人材の養成につとめ国際的にも輝しい研究業績をあげている。会員数は全国でおよそ

四、五〇〇人で、わが国の医学および公衆衛生領域における一大勢力であった。

山田顕義はこの大日本私立衛生会初代会頭佐野常民が病氣勝ちで辞任した後、第三回総会を期して明治二〇年七月一日より会頭に就任した。⁽¹⁾この時の副会頭が長与専斉、評議員は長谷川泰、大沢謙二、太田実、武昌吉、永井久一郎、松山棟庵、後藤新平、銀林綱男、三宅秀、白根専一であり、幹事が後藤新平、永井久一郎であった。わが国のその後の医学および公衆衛生の発展に寄与した逸材が含まれていることが判る。⁽²⁾

会頭に就任後の活動は、同会設立の契機ともなったコレラなど急性伝染病予防を重視し、それには社会衛生上で遅れている上下水などの施設を普及することに重点をおいていた。⁽³⁾

二、衛生工学

山田会頭は就任二年にして衛生工学を推進することを重視する意見を始めて発表している。それは創立第六年の総会における祝詞において強調した。「蓋本邦衛生事業の挙否は本会の進んで其責に任ずる所にして今日の効果を見る

は本会の力亦其幾分に与る事を信ず。而して我が衛生事業の基本とも称すべき衛生工事の起興を実際に見る亦將に近きにあらんとするの今日茲に全国会員諸君と一同に会して此総会の典を挙げ倍進歩の道を図るは亦悦ばしからずや乃ち祝詞とす」と。

また第八次総会祝詞においても「今其進歩の著しきものを特書すれば衛生工事これなり、近來各地方に於て之れが必要を感じ上下水の改良を図るもの多く、本会員の派出を乞い其設計を為せしもの亦少なからず遂ひに政府は専門衛生工師を置きて之れが調査に任せられ且水道条例の發布あるに至る……」と。

このような勢いで上水道が普及し、さらに下水が完備していたら、少くとも水質汚濁による環境破壊に起因する公害病は発生しないで済んだことであろう。

三、北里紫三郎

わが国の国民病とも考えられるほど犠牲者の多かった結核撲滅は医学のみならず公衆衛生上も重大な課題であった。あたかもドイツの R. Koch が肺結核の新治療法を発見したとの報告に接し、Koch のもとに留学していた北里

博士の留学期間延長を可能にし、ひいてはわが国の結核対策に寄与せんと努力したことが明らかにされている。⁽⁴⁾

これは長与副会頭の月次常会における報告の形で発表されている。それによると長与の意見をよしとして山田会頭は自ら宮内大臣を訪問して、留学期間の延長許可と学資千円を下賜されたということである。

参考文献

- (1) 日本公衆衛生協会、公衆衛生の発達——大日本私立衛生会雑誌抄——、五頁、三〇頁、日本公衆衛生協会刊、昭和四二年
- (2) 大日本私立衛生会雑誌、五〇号一頁、明治二〇年
- (3) 大日本私立衛生会雑誌、九七号三九九頁、明治二五年
- (4) 大日本私立衛生会雑誌 一一八頁、明治二三年

(日大医学部公衆衛生)

歩兵屯所医師取締手塚良仙知見

補遺

深瀬 泰 旦

昨年の本総会で、歩兵屯所医師取締手塚良仙について報告したが、その後、二三の文献に徴して新しい知見をえたので報告する。

手塚良仙は、常陸府中藩の医師良仙光照の長男で、名を光亨とよび、はじめ良庵を名のっていた。『適々齋塾門人姓名録』の第三五九番目にある「常州府中手塚良仙粹手塚良庵」がそれで、安政二年（一八五五）十一月二五日に入門した。安政五年（一八五八）のお玉ヶ池種痘所開設にあたっては、その設立資金を拠出しており、すでに江戸に在住しているとおもわれるので、適塾在塾は約二年間と推定される。

文久二年（一八六二）父良仙光照の没後、その後を襲って良仙を名のった。緒方洪庵の『勤仕向日記』によると、

同じ年の閏八月一五日の条に、医学所に出勤しているむねの記載があるので、適塾における師弟関係が、江戸の医学所においても継続している事実をすることができると推察される。

文久二年一二月に歩兵、騎兵、砲兵の三兵を統轄する陸軍奉行が新設され、新しい兵制がしかれた。良仙は翌三年三月に、戸塚静甫、手塚良斎（良仙の義弟）ら六名とともに、歩兵屯所附医師に任命された。その発令は、『勤仕向日記』では、良仙をのぞいた六名は三月一二日付であり、当時主君松平播磨守にしたがって上洛していた良仙は、それよりおかれて、江戸帰府のちに任命されたことがわかる。その日については、『勤仕向日記』には明記されていないが、手塚良斎の『医学所御用留』により、それが三月二八日であることをすることができた。

さらに、この『医学所御用留』によると、三月一二日に歩兵屯所医師を命ぜられたのは一〇名であり、さきにあげた戸塚静甫らのほかに、医学所に所属しない四名の漢方医（吉田策庵、高島祐啓、曲直瀬正廸、吉田瑞春）がふくまれている。

良仙は慶応二年（一八六六）に屯所医師取締介に、翌三

年には取締に榮進した。幕府瓦解後は、明治元年（一八六八）八月に、桑田立斎らとともに種痘館出張を命ぜられ、江戸府内六ヶ所にもうけられた出張所の一、小石川三百坂（良仙の自宅）において新政府の種痘事業に従事した。その管轄する地域は「麴町四ッ谷市ヶ谷牛込小石川駒込大塚巢鴨大久保辺」である。

明治二年三月、良仙は医学所産科教授方に就任し、五月には医学校三等教授試補並産科掛になった。以後医学校において教鞭をとっていたが、明治四年ごろには、三転して軍医畑にもどっている。

西南戦役には近衛歩兵第一連隊第二大隊附の医官として出征し、負傷兵の治療に従事していたが、城山総攻撃により政府軍が勝利を手中におさめ、戦火がようやくやんだ翌々日の九月二六日に鹿児島城の旧趾諏訪の馬場にあった小縄常所で赤痢に罹患した。

ただちに海路、大阪に移送され、大坂城内にあった臨時病院に入院して、佐藤進軍医監、石黒忠憲一等軍医正らの治療を受けたが、その甲斐なく明治一〇年一〇月一〇日に死亡した。このとき、良仙の実弟蛙延良節の嗣子良治が、

軍医試補として同じ病院に勤務していたので、伯父良仙の治療にくわったこととおもわれる。

(順天堂大学医史学研究室)

『臨牀齒科』の歴史について

長谷川 俊 夫

齒科医学専門雑誌『臨牀齒科』は昭和四年（一九二九）四月から昭和十九年三月まで、十五年間にわたって発行された。之は当時一、齒科商店であった森田齒科商店が、当時齒科界の鬼才と言われた谷和文平氏の理想を、時の支配人、大塚精一が受けいれて発行されたものである。当時は齒科医師数約一万五千名、発行部数三千五百部で、最初は申し込みを受けて全部無料配布であった。主幹、谷和文平氏は先ず米国のエス・エス・ホワイト社（当時世界一の齒科器材メーカー）の発行するデンタル・コスモス誌を手本として企画し、先ず日本齒科医専より新進氣鋭の学徒、中野憲次、奈良隆之助を参加せしめ、当時沈滞氣味の齒科界に學閥を離れて自由な筆陣を張り、革新の狼煙を上げたのである。昭和四年の四月の創刊号から第二号を顧り見ると、故小野寅之助教授（大齒）の齒疾の病理、豊田実教授

(日齒)の金属病、若き日の新進学者であつた白数美輝雄先生の結核菌の經齒感染に関する実験的研究などの大論文が載っている。

主幹、谷和文平氏は大阪齒科医専出身、堺で開業したが、市井の開業医としてはあきたらず、齒科器材の研究はもちろん、大阪金属工業(現在のダイキン)の顧問として、当時から既に冷暖房機の研究に参加する程の秀才であつた。支配人大塚精一は氏の才能を賞で、氏の意見ならばどしどし採用するという力の入れ方であつた。

昭和四年というのは世界的不況のどん底で齒科界も例外なく、厳しい時にもかかわらず、『臨牀齒科』は貧乏を通り越して理想の柱を打ち立てたのである。最初は一商店の宣伝雜誌位しか思われなかつたものが、僅か二、三回の発行により純學術雜誌として、高く齒科医学会から評価されることになった。論文はもちろん、齒科医師会、学会、齒科医人の情報或は外国の文献の紹介など、五十年後の今となつても少しも変らない編集振りに、当時の中野、奈良の学徒が今以上に新しい考え、新しいヒロソフイーを持つていたと考えられるのである。やがて慶応出の津下敏夫が参

加、経営の面にタッチして発行部数は、益々増加して七千部に達した。

昭和八年十月号に照内昇教授(日本大学齒専)が、臨牀齒科レントゲン学「此篇を一指針として真面目なる臨牀家に捧ぐ」と題して、一ヶ年にわたる講座を毎月発表せらるに及んで、更に洛陽の紙価を高め、遂に無料から有料に変わったと言ふ逸話が残っている。

日華事変、満州事変によつて日本の經濟は不況から立ち直つて、物、みな凡て、大陸進出に向つていった。その最高潮に達した時が、『臨牀齒科 大陸特集号』である。既に滿鉄病院の重浦卓玉先生、新京(現長春)の渡辺悌先生、ハルピンの福島秀策先生、北京の小林先生等は第一線で、それに日本から出かけて行く人達の交流、写真等が従来より大型そして色彩の特別号で、当時いかに我々が得意の絶頂であつたかを物語っている。

しかし、太平洋戦争の勃発、続いて戦況の不利は遂に紙質の悪化、紙量の制限によつてかううじて生きながらえたが、遂に昭和十九年の三月をもつて十五年の歴史を閉じることとなつた。

これより三八年目、昭和五六年モリタ創業の六五周年の記念事業の一環として、『臨牀齒科』の散逸を惜しみ、第一巻第一号から第十六巻第三号迄、特集号を含めて百七九冊を一組とし、参百組を当時の原型をそのまま復刻することとなった。最早老境にあるが、当時の編集責任者、奈良隆之助、津下敏夫、森田二郎、長谷川俊夫が責任者となり、次の世代の人々にこの大記録を残すこととなった。現在発行の予定は、本年十月と来年十月迄四回にわたって行なうことになった。配布先はご希望により各齒科大学・歯学部、医科大学・医学部口腔外科、図書館、齒科医師会等、当時の執筆者に贈呈することに決定している。

(株式会社モリタ制作所)

齒固の変遷について(第一報)

長谷川 正 康

古来より、わが国の各地で、年一回正月元旦に齒固と称えて、天皇から一般庶民まで鏡餅を喰べる習慣があった。

滝沢馬琴著『玄同方言』に「国俗毎遇春初……命日齒固」とあり、正月に鏡餅をつくり松柏あるいは齒菜などと共に飾り、新春を祝い、その後でこの餅をたべた。これを齒固(波加多免)と名づけた。

その行事の解釈は江戸時代の多くの随筆や宮中行事の仕来りを書いた『江家次第』、『公事根源』などに詳細に述べられている。

その中心となる解釈は、恐らく「人は齒を以て命とするが故に、齒と云ふ字を齡とも訓む也、齒固は齡を固むる心なり」ということに尽きると思う。すなわち、元旦、神に鏡餅を供え人々が雑煮を喰べて長寿を祈ったもので、現在も正月三カ日にたべる雑煮の風習として残っている。

この風習は、延暦一三年（七九四）都が平安京に移され、ここに約四〇〇年に亘る平安時代を迎えるに至り、大陸文化をとり入れる風潮が強く、その影響から宮中年中行事の方式が大体中国風に定まるに至ってからである。

この御歯固は宮中三元の行事で、一年の始として元旦四方拝、朝賀の儀、元旦節会、外任奏と諸司の奏、御業を供する儀、歯固の儀がある。

多くの文献によると、この儀式は中国から渡った行事であることは確かである。

張天如対類大全に「唐土ニ進膠牙錫ト云。膠牙ハ膠ノ字、ニカハトモ又カタムトモ訓ス。牙ハキバ也。錫ハアメ也。錫ヲ食シテ牙ヲ固ムノ意。本朝歯固ニ相似タリ。」

とあり、中国では飴をかむことが中心であった。

なぜこれがなくなり餅（鏡餅）のみになったのか、第一報として、古代天皇制の背景から解釈してみたい。

（東京歯科大学）

伊沢信平 関『小児歯牙衛生論』について

本間邦則、佐藤泰彦

日本の歯科医学の発達は、万延元年（一八六〇）にアメリカ人歯科医イーストレイキが来日して泰西歯科医学を紹介してより目覚ましいものとなった。明治時代になり、とくに欧米との交流が盛んになると、歯科治療関係のみならず口腔衛生に対する研究もまたおこなわれるようになってきた。

現在、小児歯科は歯科医学の専門分科として認められるにいたったが、明治時代における小児の歯科衛生に対する考え方はどのようなものであったのか興味のあることであろう。そこで明治時代に出版された小児の歯科に関する専門書を参考として考察してみたいと思う。

明治三十六年（一九〇三）発行の「小児歯牙衛生論」は重城養二の著になり、歯科医学界の先覚伊沢信平の関によ

るもので三十頁余の小冊子であるが、小児歯科衛生の専門書として充実したものであり、当時のことを知るうえに貴重な資料と思われる。内容は歯牙の名称、歯牙の効用、乳歯の発生、全身病と歯牙の関係、歯牙と食物、乳歯と成歯との関係、嗜好と歯牙の関係、歯牙発生時の注意、常習的衛生法、応急治療法などの十章に項目がわれている。全身病と歯牙との関係の章では、全身的疾患より歯牙疾患を誘起するものとして、クル病、梅毒そのほかに発熱性疾患をあげており、また胎生期における母体の栄養と運動の大切なことを説いている。そして齲歯やそのほかの口腔疾患は、呼吸器や消化器系の疾患を併発することが多いと注意している。この考え方は、W・ハンターの口腔感染症の報告（一九一〇）より先んじることであることに注目したいと思う。そのほか各章において現在でも注意すべき事項について記載していることが多いので、当時の小児歯科について推察するために貴重な資料であると思われる。

本邦における医学放射線

技術文化の開発者

今 市 正義

X線が東漸してきた数年は、主として物理実験技術者が、操作にあたった。

医学の面に、用途を見いだすと、たちまち器械を取扱う人手に困惑した。

その要員に挙げられたのは、なんとしても陸・海軍の衛生部員で、磨工長や磨工卒を第一に、看護長・看護卒の出身者だった。

従って、大学の物理実験技術者は、古代放射線器械の組立てを含めた操作技術の開拓者であり、軍関係の衛生部員、主として下士官以下の人びとは、器械より装置といわれてきた、過程における中継人であった。

このころの技術者は、正直に申して職人であった。あるいは、奈良朝時代に言葉の発祥が見られる、工（たくみ）

・匠（たくみ）に価するであらうか。

一般には、“機械まわしさん”の類属に投入されていた。東京はじめ近郊の医家は、車夫や運転手を、速成の機械まわしに仕立てあげたのが、当時の実状であった。

X線の装置販売業者は、X線管球・発生装置と組み合わせで、機械まわしさんを、医療設備に送りこんだ。つまり、人馬一体ならで人機一所であった。

人は機械の一部であったから、ひとえに、医師の一挙手一投足に従ったのである。

昭和のはじめ、京都に島津源蔵が創立した島津レントゲン技術講習所（京都放射線技術専門学校）は、本邦における医学放射線の技術学を、はじめて体系化した。

このころより、沈黙をまもってきた機械操作の従事者は、専門職として自覚したといつてよいだろう。

技術者にも書く機会が、その場が生誕したのである。

本邦の医学放射線技術文化は、昭和の初頭に、ようやく萌芽した。

演者は、この地域文化の担い手を技術者に絞はり、関忠

孝・綱川高美・細江謙三・滝内政治郎・梅谷友吉・斉樹富太郎・井上喜代太・野村正美・中村實の人びとを通じて語りたい。

（高知県安芸市本町 森沢病院放射線科）

現代史における日記の文獻的利用

性の事例研究（第一報—木戸幸一

日記と厚生省の創設）

沢井^① 清、清水^② 勝嘉

今回は、初代厚生大臣、木戸幸一をとりあげて、現代史研究の重要な証拠物件の一つである「木戸幸一日記」と「木戸幸一関係文書」のなかから厚生省創設時の動きを知ろうとした。木戸の厚生大臣としての任期は昭和十三年一月一日から十四年一月四日までであり、最初は文部大臣と兼任であつたが、十三年五月二十六日に文部大臣が荒木貞夫に親任され、木戸は専任厚生大臣となつた。

「木戸幸一日記」のなかには十二年一月二日から厚生省設置の動き、そして大臣の選出の事情、十三年一月一日に厚生省が発足してからは国民健康保険法のこと、傷兵保護院のこと、地方長官會議、学校衛生主事會議、体育主事會議、学務部長會議、警察部長會議等で訓示をなしたこと、

公衆衛生院の新築のことなどを記載している。

また、木戸は厚生大臣退任後も内大臣として、天皇側近ナンバーワンの実力をいかんなく發揮し、厚生省関連の相談を受けていたことが、日記の内容から知ることができた。

さらに「木戸幸一関係文書」のなかには初代、二代目の厚生大臣の選任のやりとりやエピソードが記されており、当時の裏面史を知るのに好都合である。

『木戸幸一日記』および『木戸幸一関係文書』は戦前の厚生省の変遷や衛生行政を考えるうえで重要な史料の一つとみることができた。

（１）宮城学院女子大学、（２）防衛医科大学校）

木床義齒の製作法について

新藤 恵久

現在まで知られている最も古い木床義齒は天文七年（一五三八）七十四歳で往生した仏姫が使用していたと伝えられる木床上顎総義齒である。その技術水準からみて十六世紀初期にはすでに木床義齒の製作技術は、ほぼ完成していたと考えられる。筆者は最近、日本歯科大学東京校と須田家の木床義齒関係の資料調査の機会に恵まれたので報告する。

（八王子市）

佐藤運雄著『歯科診断学』の推移について

新国 俊彦・工藤 逸郎

本演題の演者の一人新国は昨年の第七回日本歯科医史学会学術大会で「佐藤運雄先生とその著書について」会長講演を行ない、日本大学歯学部創設者佐藤運雄先生の十七著作について述べた。その著書の中で『歯科診断学』が佐藤先生の生涯の信念である「メディコデンタル・システム」の精神が最もよく表れている著書であることを報告した。

今回私達はこの歯科診断学の初版より一〇版増刷迄の著書の内容の推移について検討し、若干の知見を得たのでその概要について報告する。

歯科診断学は大正三年一月に発行されたのが初版であり、昭和二十三年の第一〇版増刷迄恐らく一万部以上発行されたものと思われる。本演題ではこの初版からの推移を

迎るわけであるが、佐藤先生の明治三十八年三月発行の初めの著書『歯牙充填学』の中の附録として診査事項を五十頁に亘って費しており、巻頭にはそれに関する目次はないが、内容をみると第一章一般状態の診査、第二章口腔の診査（第一節一般状態の診査、第二節他覚的症候の診査）に分けられて記載されており、これは歯科診断学の前身をなすものと思われ、診断学の重要性に関する考え方の一端がすでにこの著書の中にかがいが知ることができる。本論に入り、まず序文についてみると、自序、序文が記載されているのが初版、改訂三版序、第八版序、第十版序であり、他の版ではその年代迄の序文が各々記載されている。その中で佐藤先生の「メディコデンタル・システム」に関する記載がみられるのは初版、八版、一〇版であり各時代の変遷に応じて主張が述べられているが、根本精神には変化のないことを強調されている。

本の内容を目次より検討すると初版では概説から始まり、第一編既往歴の診査、第二編自覚的症候の診査、第三編一般現症の診査、第四編口腔現症の診査、第五編歯牙現症の診査、第六編口腔疾患と他部疾患との関係に及んでい

る。この基本的な形態は初版より一〇版迄変更はない。初版は本文六七八頁、文献九頁の大著であり、当時においては画期的な診断学の名著と思われる。文献の数は二一九に及び、本邦の文献四を除き二〇七の文献はすべて欧米のものであり、著者の診断学の著作に関する努力の跡がしのばれる。この文献は初版のみで改訂三版以降には省略されている。文中に挿入された図表はすべて外国の著作から転載されたものであるが、当時としては止むを得なかったものと思われる。本文の内容はかなり大きな活字で記載されており、歯科的診断は勿論であるが、全身との関係についての記載や、歯科医学に必要な医学的事項も多く記載されており、佐藤先生の根本精神が充分に反映されているものと思われる。

大正十年発行改訂三版の序には全体に互り改訂を加え、實際的必要の部分を残して可及的簡潔にしようとしたとあり、本文も三百四十頁に減少している。活字は初版と同様であるが、文章間の間隔が狭くなり、図表も減少している。また初版中の口腔現症の診査中、口腔腫瘍、口腔結核、口腔梅毒の診査が本文中より削除され、附録となつて

活字も小さくなり、七六頁に収められている。更に診断例として歯牙齦蝕症、急性単純性一部性歯髓炎、急性歯齦縁膿瘍、急性顎骨骨膜炎の実際の症例が記載され、患者を通しての学生の実際的な勉強に便利となっている。更にこの版から索引が四頁に亘って記載されているが、文献は省略されている。

第八版（昭和七年）では一時減少していた頁数も五七一頁と増加し、内容も充実してきたが、第三版の附録の口腔腫瘍等の診査はなくなり、第六章に口腔特殊病変の診査として独立し、その他第七章尿の診査、第八章血液の診査の項目が加筆されている。また挿入された図表は初めて日大歯科の症例X線写真等が部分的に挿入されたのが特徴であり、佐藤先生が精神が徐々に実績を挙げつつあることをうかがい知る事ができる。

昭和十五年発行の第二〇版では今迄縦書であったものが横書となり新しい時代を反映している。内容は更に充実しているが横書、活字の関係から索引六頁を含んで本文は四八三頁となっている。八版と比較して図表は更に日大歯科の症例が増え、特にX線写真は多くなっている。戦後昭和

二十三年に発行された第二〇版増刷は一〇版と全く同じ内容である。佐藤先生が昭和二十八年に発行された『口腔と全身疾患』の自序の中に歯科診断学は改訂執筆中とあり、改訂を試みられていたと思われるが、先生の最後の著書「医学歯学辞典」（昭和三十三年、八十歳）の発行に全精力を注がれた関係からか、生前には改訂されずに現在に至っている。しかし医学歯学辞典発行後八十四歳で逝去される四年間は老齢にも拘らず、恐らく歯科診断学の改訂について最大の努力をなされていたものと思われる。

（日本大学歯学部口腔外科学教室）

中国で口齒の医療に用いられた塩

について

戸 出 一 郎

中国では古來、口齒の疾患の予防と治療に塩が用いられていた。

『證類本草』に表れる塩は、食塩、光明塩、戎塩、大塩、鹵鹹の五種類で、このうち口齒の医療に用いられたのは食塩、光明塩、大塩並に戎塩である。

食塩は陶弘景の「集注本草」注によれば、東海塩、北海塩及び河東塩池のもの、梁州・益州（四川・雲南）の塩井のもの、交州・広州の南海塩と、西羌には山塩があり、胡中には樹塩があつて品質は一樣でないと述べている。

即ちここで言う食塩は海塩、池塩、井塩、山塩、樹塩を総称した名称である。

食塩の口齒の疾患への適用は、唐・孟詵の「食療本草」には、皂莢二挺と塩半兩を共に赤く焼いて細くけずり、そ

れを用いて毎夜齒をこすると、一ヶ月後には動いている齒及び出血している齒が共に治癒して牢固となるとある。

『千金方』には、齒齦宜露（齒根露出）を治すには毎朝一握りの塩を口の中に入れ、湯をふくみ齒をこする。また齒を百回叩く、これを毎日百回行つていれば五日以内に齒が堅牢になる。およそ人の齒齦で果菜が食べられなくなるというのは皆齒根が露出するからである。この塩湯をふくみ、齒をこすり、齒を叩く法を行えば必ず治るのだ。とある。

また『肘後方』には、齒痛と齒齦出血に対して塩末を用い、『本草衍義』には齒齦出血に対して塩湯を用いる方法が記載されている。

石塩は『外台秘要』で齒痛に用いられている。『神農本草經』によれば、石塩は光明塩の一名で、塩州五原塩池下で鑿取されるものである。

戎塩は『神農本草經』に「戎塩」は味しおからし、寒にして毒なし。「目を明らかにし、目痛に氣を益し、肌骨を堅くし、毒蠱を去り」胸腹部の痛み、尿血、吐血、齒舌の出血を主る。一名胡塩といい、胡塩山及び西羌の北地、酒泉

の福祿城の東南隅に生ずる。北海の塩は青く、南海の塩は赤い。十月に採集する。とある。

陶弘景の注には、現に戎塩は虜中に甚だ豊富にあつて、甘肅省武威からも来れば、敦煌からも来る。とあり、蘇頌は、医家が眼疾の治療及び補下薬として多く用いている青塩が恐らく戎塩そのものであらうといっている。戎塩には青・紅の二色があり、それぞれ青塩・紅塩と呼ばれるが、医方には青塩のみ用いて紅塩は用いられないことは李時珍や小野蘭山が述べているとおりである。

青塩の産地は内蒙古の青塩諾（タブスノール）。オルドス地方、唐代の塩州五原県青白塩池といわれたところ、甘肅省武威、張掖、寧夏回族自治区の数ヶ所の塩池、青海省の茶卡湖、新疆省の鄯善県、塔城區等が報告されている。

大塩は山西省解州の塩池で採れるいわゆる河東塩で、塩池は解県と安邑県の間にあり、そこでは畦を作り鹹水を入れておくと、天日と強烈な風によって水分が蒸発し、塩が結晶する。それを顆塩、一名大塩という。

『本草衍義』注には歯肉から出血するものは塩湯で口を漱げ、とある。

中国では古来塩は歯口疾患の予防と治療に用いられているが、予防のためには塩水または塩を含む薬方による含嗽、揩歯を行う。歯牙及び口腔軟組織疾患の治療には塩を含む薬方により、内服、口に含む、歯をこする、患部に塗る、含嗽する、すり込む等の方法が用いられている。これらの薬方を用いる疾患を現代の病名でいえば、舌炎、齒槽膿漏、齒肉炎、齦齒、齒周炎、下顎骨潰瘍である。

前記の四種の塩のうち、最も良質のものとして尊ばれたのは青塩で、塩分の純度が非常に高い。光明塩、大塩はこれに次ぐ。しかし中国古代にこれら各種の塩が、口齒の諸疾患に対して使い分けられた理由はわからない。

（東京都世田谷区）

一九世紀前・中葉におけるリゾ

ドントリピーの書誌学的研究

森 山 徳 長

口腔外科の先駆者 S.P. Hullivan は、米国で世界最初に創刊された歯科医学専門雑誌 American Journal of Dental Science の第一巻四号（一八四〇年五月発行）に、『歯痛―歯の疼痛の觀察』と題して、歯痛の原因別の症状と療法を詳説した。その療法のうち、歯髓腔に膿汁が貯留するための歯痛の処置は、初期には膿汁が形成され次第、穿孔して排出してしまうことと、すでに顔に腫張が及び脾動性の痛みがある場合は抜歯が唯一の方法であるとした。また露髓を処置して充填した後、時間が経過して化膿の傾向が現れた場合は、充填を除去し髓腔に穿孔すると記載している。

彼は十年後に、歯科医療の普及に伴って頻発する充填後の歯齦膿瘍の予防処置として、ドリルで異常を訴える充填

歯齦頸部に、歯齦と歯槽骨縁を穿通したのち、歯牙実質に對して、髓腔に達する穿孔を行って、症状の緩解を計る方法を推奨した。

これは Risodontopy, Rhizodontophy など、または Hullivan's Operation と呼ばれ、一時期米国で流行、英国にも追試者が現れて、一九八〇年代までこれに関して活潑な論議が行われた。

歯髓の焼灼か抜歯以外には、効果的な歯痛の療法がなかった時代から、制腐的外科学の原則にもとづく歯内療法が一般化する、八〇年代にいたる中間の時代にあつて、しかもアマルガム戦争に象徴される歯科治療の普及にとともに、臨床歯科医の悩みの側面を浮彫りにするところの歴史的道程であつたと思われる。

当時の文献をたどつてその賛否の論議を分析し、歯内療法発達史黎明期の一角を明らかにしたいと思う。

（東京歯科大学）

日本医史学会会則抄

第一条 この会は、日本医史学会 (Japan Society of Medical History) という。

第二条 この会は、事務所を〒113 東京都文京区本郷二―一―順天堂大学医学部医史学研究室内におく。

第三条 この会は、医史を究研しその普及をはかるを目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 学術集会、その他講演会、学術展覧の開催等

(2) 機関紙「日本医史学雑誌」「日本医史学会会報」および関係図書等の刊行。

(3) 日本の医史学界を代表して、内外の関連学術団体等との連携

(4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 この会の会員は次のとおりとする。

(1) 正会員

この会の目的に賛同し会費年額五、〇〇〇円を納める者ただし、外国居住者は年額30ドルとする。

(2) 名誉会員

この会に対し功績顕著であった者で評議員会の議決ならびに総会の承認を得た者。

(3) 賛助会員

この会の目的事業に賛助し会費年額一〇、〇〇〇円以上を納

める者、または団体。

第六条 正会員になろうとするものは評議員の紹介により、理事長の承認を得て入会金二、〇〇〇円およびその年度の会費を添えて所定の入会申込書を提出しなければならない。

第七条 名誉会員は次の各号の何れかに該当し理事会、評議員会が功績顕著と認めた者であることを要する。

(1) 三十年以上の在籍正会員であつて七十歳に達した者。

(2) 前理事長。

(3) 正会員または外国人で功績顕著な者。

名誉会員は終身として会費を免除することができる。

第八条 賛助会員になろうとする者も第六条に準ずる。

第九条 第六条及び第八条の会員の資格取得は会費納入日より始まる。

第十条 会員には次の権利がある。

(1) この会の発行する機関誌の無償配布をうけること。

(2) 機関誌に投稿すること。

(3) 総会、学術大会、学術集会その他の事業に参加すること。

第十一条 会員は、会費を前納し総会の議決を尊重しなければならない。

第十二条 会員は次の事由によってその資格を失う。

(1) 退会

(2) 会費の滞納が一年以上を経過したとき。

(3) 禁治産、準禁治産または破産の宣告。

(4) 死亡、失踪宣告または会員である団体の解散。

(5) 第十四条による除名処分。

第十三条 この会には、年一回学術大会を主宰するために会長を一名おく。

1 この会は学術大会を毎年一回開催し、学術集会は随時開催する。

2 会長は、理事会の推薦により、通常総会毎に理事長が委嘱する。

3 会長の主宰する学術大会は、この会の通常総会と同時点で開催することを原則とするがやむを得ない事情のある場合は評議員会または総会の承認を得て変更することができる。

4 会長の任期は、学術大会を議決した通常総会の翌日から次の学術大会を終了するときまでとする。

5 会長は必要に応じ理事会に出席しこれと密接な連絡のものと計上予算を勘案して企画運営する。

6 会長に事故あるとき、または欠けたときは新に会長を委嘱するまで理事長がその職務を代行する。

7 会長は、学術大会関係事務を委嘱するために、会員のうちから学会委員若干名を選任することができる。

8 学術集会は、随事理事長主宰のもとに開くことができる。

文部省科学研究費学術定期刊行物補助金を受ける

本誌は昨年度にひきつづき文部省の科学研究費補助金の交付を受けて刊行している。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行情日 年四回（一月、四月、七月、十月）末日とする。

投稿資格 原則として本会会員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担 表題、著者名、本文（表、図等を除く）で五印刷ペー

ジ（四百字原稿用紙で大体十二枚まで）は無料とし、それを超えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集委員会にて行なう。

別 刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学医学部
医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大島蘭三郎、大塚恭男、蔵方安昌、酒井シヅ、樋口誠

太郎、三輪卓爾、室賀昭三、矢数圭堂、矢部一郎

編集顧問 小川鼎三、A・W・ピーターソン

事務担当 鈴木滋子

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長	小川 鼎三	理事	鈴木 勝	常任理事	大島蘭三郎	大塚 恭男	会計監事	宗田 一	大滝 紀雄	古川 明	理事	石原 明	石原 大矢	大島蘭三郎	大矢 全節	大塚 恭男	小川 鼎三	蒲原 宏	酒井 恒	佐藤 美実	鈴木 勝	宗田 一	中野 操	長門谷洋治	矢数 道明	藤野恒三郎	三木 栄	山形 敏一	谷津 三雄	矢部 一郎	幹事	蔵方 宏昌	酒井 シヅ	杉田 暉道	谷津 三雄	矢部 一郎	評議員	青木 一郎	赤堀 昭	安芸 基雄	阿知波五郎	石原 力	今市 正義	岩治 勇一	内田 醇	江川 義雄	大滝 紀雄	岡田 博	片桐 一男	川島 恂二	久志本常孝	榊原悠紀田郎	末中 哲夫	杉田 暉道	鈴木 正夫	鈴木 宜民	関根 正雄	瀬戸 俊一	高木圭二郎	高瀬 武平	高山 坦三	筒井 正弘	田中 助一	津田 進三	米造 重朗	中川 米造
-----	-------	----	------	------	-------	-------	------	------	-------	------	----	------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	------	------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

中沢 修 中西 啓 中山 沃
服部 敏良 樋口誠太郎 福島 義一
富士川英郎 古川 明 堀江 健也
本間 邦則 丸山 博 松木 知
三浦 豊彦 三輪 卓爾 室賀 昭三
守屋 正 矢数 圭堂 山下 喜明
山田 光胤 安井 広 矢部 一郎
山中 太木 米田 正治 渡辺左武郎
(理事の名は省略)

名誉会員
赤松 金芳 石川 光昭 大塚 敬節
王丸 勇 杉 靖三郎 三廻 俊一
吉岡 博人

編集後記

涼しいというより肌寒い日の多かった今年の夏も、残暑という名にふさわしい日々を交えて、ようやく終りに近づいた。外来診療をしていても、七月だから、八月だから、というたぐいの固定観念に日常生活をつい流されたために、体調を崩した人も少なくなかったように思う。

気象異変の原因として海底の噴火活動を重視する意見、この種の気象は明治時代の夏には稀でなかったとする見解など、さまざまな報道にも接したが、何にしても予想と古典的下着は外れやすい（と申しました

か）といった俗諺に類する態度で済ませる問題ではない。

人の営為についても、つねに当面の見通しと長期のペースペクティブの双方を持つて当たるべきだというのは、まさしくそうあるべきことだと思われるが、自然気象の単純な類推からしても、これは容易なことでない。

いずれにせよ、来るべき総会の時期には爽秋の天候が定着して、会員一同が気持よく会期を過せるようであってほしいものである。

(T・M)

昭和五十五年七月二十五日 印刷
昭和五十五年七月三十日 発行

日本医史学雑誌

第二十六巻第三号

編集者代表 大島 蘭 三郎

発行者 日本医史学会
代表小川 鼎三

〒二三 東京都文京区本郷 二一
順天堂大学医学部
医史学研究室内

振替 東京六二五二五〇番

製作協力者 金原出版株式会社
日本医学文化保存会

〒二三 東京都文京区
湯島二二一四

印刷所 三報社印刷株式会社
〒二六 東京都江東区亀戸

漢 方 薬

高 島 堂 薬 局

東京都文京区本郷 5 - 24 - 4

TEL (03) 811-1657 赤門となり

全国 医学・薬学・化学・雑誌広告取扱

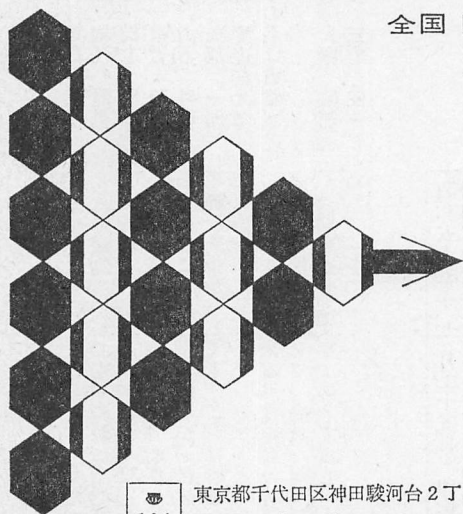
本 誌 広 告 取 扱

祝 盛 会

各学会の雑誌、抄録、プログラム及び名簿
等の印刷並に広告掲載のお世話を致します

広 告 代 理 店

日本医学広告社



東京都千代田区神田駿河台2丁目9番地
電 話 (292) 6 9 6 1 (代表)

Medical education in Edo by Casper Schaemburger ...	Hajime SODA...	(97)
A note of the history on Bonwill's articulator.....	Kazuhiro NAGATA...	(99)
On the drugchest used by Dr. Kōan OGATA.....	Nobuo AOKI...	(100)
Akiyoshi YAMADA and Public health.....	Shinpachi NISHIKAWA...	(102)
Ryosen Tezuka, Army Doctor-in-Chief of the Infantry Regiments (Further Report)	Yasuaki FUKASE...	(104)
A history of the "Rinsho-Shika" dental journal	Toshio HASEGAWA...	(106)
Change of the Hagatame (part 1)	Masayasu HASEGAWA...	(108)
Remarks on the Shoni-Shigaeisei-Ron, edited by Dr. S. Izawa	Kuninori HONMA, Yasuhiko SATO...	(109)
The developer of Medical radio technical culture in Japan	Masayoshi IMAICHI...	(110)
View of "Kido Koichi Nikki" Related to Foundation of Ministry of Health and Welfare	Kiyoshi SAWAI, Katsuyoshi SHIMIZU...	(112)
The way to make the wooden dentures	Yoshihisa SHINDO...	(113)
Concerning the change of Kazuo Satō "Dental Diagnosis".....	Toshihiko NIIKUNI, Itsuro KUDO...	(113)
Salt for the oral medicine in ancient China	Ichiro TODE...	(116)
Bibliographical Studies on Rizodontrypy in the mid-19th century	Norinaga MORIYAMA...	(118)

..... Sen NAKAHARA, Kuninori HONMA...	(65)
Foreign doctors who had contributed their papers to	
The Sei-I-Kwai Medical Journal in the Meiji era	
..... Hiroshi KANBARA...	(66)
The dissection of "Heijiro" —The place and the	
inhabitants feeling—.....Yoshikazu SUGITATSU...	(68)
The Disease in authentic records of the Sui and	
Tang Dynasty.....Noriko YAMAMOTO...	(70)
A Problem of the Season on Chinese Traditionary Medicine	
..... Toshiaki MARUYAMA...	(73)
The Denture of Kyokutei Bakin. Part 3, Denture prognosis	
..... Sataro MOTOYAMA...	(74)
Gabriel Pravaz and his hypodermic syringe	Toshio OHMURA...(76)
On "Craftmen of Artificial eye and denture in Matsuzaka"	
and "Reproductions by medical student in the Meiji	
era".....Saburo TSUGE...	(79)
Some doctors and pharmacists who are burried in the	
Yokohama International Cemetery	Toshio OTAKI...(80)
Advertising papers of denture craftman in the beginning	
of the Meiji era.....Koich TAKEUCHI...	(82)
Dr. Kenji Takagi as a pionier of rehabilitation of the	
physically handicapped	Masakazu FUKUSHIMA...(84)
The Incidence of the Kakke-disease in Pre-War Mental	
Hospitals	Yasuo OKADA...(87)
An Approach to the Historical Study of Body Consciousness by	
Multilingual Comparison (5) Growth and Reproduction	
..... Takuji MIWA...	(89)
The significance of C.P. Thunberg's visit to Japan in	
1775-1776	Fumi TAKAHASHI, Kiyoshi KAWASE...(91)
Medical Terms related to Dentistry and Odontology as	
they appeared in the Literature published in the	
Meiji era	Haruo OKADA...(93)
"Kenshin-honzō", an unknown herbal written in	
Sendai in the 18th century	Hiroshi HIKINO...(96)

The Circumferences of Roentgenological World in Older Time	Hisaji NUMATA...	(34)
Some questions as to historical sources on smallpox and measles	Shunichi MII...	(37)
Death report at the early years of Meiji-era	Atsushi UCHIDA, Itsuro TASHIRO...	(39)
A View of health written in the Buddhist literature and a peculiar syndrome.....	Shigeharu SUGIMOTO...	(40)
The Table of Temperature in Kanazawa at the Early Meiji Period	Kisaku TERAHATA...	(43)
Athenian Plague	Meguru HADA...	(45)
On two kinds of first edited Biographical dictionary of doctors in the Edo era.....	Misao NAKANO...	(47)
The Transcript of Lectures given by Prof. Shimizu—The Transcript of Lectures given by Dr. I. Shimizu, the first Professor of Gynecology and Obstetrics in the Medical Department of Tokyo University	Masaru MATSUNAGA...	(49)
Achievements of Masayo OBA, the Founder of the medical cooperative Association in Shimane.....	Hiroshi NAKAO...	(52)
Department of Biochemistry, Aichi Medical University	Yukio SHIBATA...	(54)
On the cost expenditure of medical treatment of factory girls engaged in the silk mill on OKAYA MUNICIPAL RAW-SILK MUSEUM collection (Report 1. Meiji 20. 30's).....	Katsuyoshi SHIMIZU...	(57)
On the cost expenditure of medical treatment factory girls engaged in the silk mill on OKAYA MUNICIPAL RAW-SILK MUSEUM collection (Report 2. Meiji 40's)	Katsuyoshi SHIMIZU...	(58)
Public Health of Ancient India	Kido SUGITA...	(60)
Dr. E. Sato: Industrial physician from 1890s to 1910s	Toyohiko MIURA...	(62)
Fusayoji (Tufted toothpick)		

The General Meeting of Japan Society of Medical History, Dental History and History of Pharmacy

Special Lecture:

The Rod and Serpent of Asklepios, Symbol of Medicine,

Dentistry and Pharmacy.....Akira FURUKAWA...(1)

Ancient Dentistry in ChinaChou Ta-shing...(4)

Drugs described on Ayur veda.....Kazuhiro ITO...(7)

President's Lecture:

Retrospection on Advances of the Japanese Association for

Dental ScienceMasaru SUZUKI...(9)

Member's presentations:

A comparative study of the "Kaitaishinsho" with the

"Ontleedkundige Tafelen"Hisashi SAKAI...(13)

Time when the elevators with wood handle were used

.....Takaji SHIMOOSA...(15)

New Materials on Dr. Ruijter at Okayama medical College

.....Sumio ISHIDA...(18)

Early History of Cholecystic Surgery in Japan...Akitomo MATSUKI...(21)

Cesarean Section during Meiji-era in JapanAkitomo MATSUKI...(21)

On "Chokusha Denkisho" by C. Shibue—in special reference

to Shotetsu KiriyaAkitomo MATSUKI...(23)

Josen Morii and Internal MedicineShoichi YAMAGATA...(24)

A Study of Wallace Tayor (1835-1923).....Yoji NAGATOYA...(25)

The traditional Chinese Medicine (old age) and Taoism

..... Shoji YOSHIMOTO...(27)

Dental products exhibited at the Fourth National Exposition

for the Encouragement of Industry, I. Dental materials,

instruments and equipments

.....Masayoshi OHASHI, Masahide NIHEI...(29)

Why did Dr. W. Willis want high salary in Yedo?

.....Tadao HARAGUCHI...(30)

On "Bessi Naikagaku" —translation of E. Baelz's

"Lehrbuch der Inneren Medicin"Hiroshi YASUI...(33)

第81回 日本医史学会
第8回 日本歯科医史学会
日本薬史学会

合同総合

会長 鈴木 勝

副会長 谷津 三雄

会 期：昭和55年10月11日（土）9：00—18：00

終了後懇親会 18：00—20：00*

昭和55年10月12日（日）9：00—18：00

* 懇親会会場…主婦の友ビル2階張夫人ホームキッチン

会 場：日本大学歯学部大学院講堂

東京都千代田区神田駿河台1—8—13

TEL 03—293—5711

日 程 表

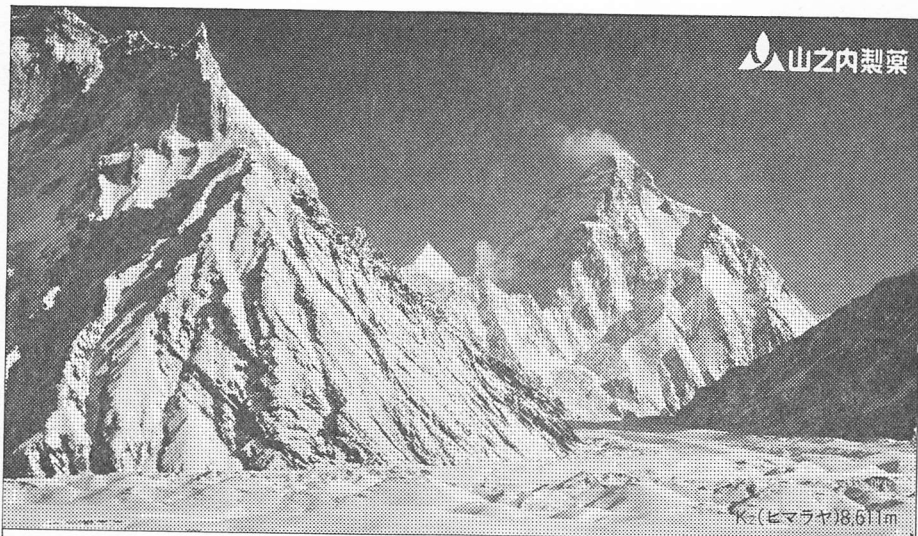
第1日 10月11日（土）9：00～18：00

終了後懇親会 18：00～20：00

- 9：00～ 9：10 開会の辞 鈴木 勝（会長）
- 9：10～11：40 一般口演（1～12席）
- 11：40～12：15 特別講演Ⅰ 古川 明（医史学会）
- 12：15～13：15 記念写真撮影，昼食
- 13：15～13：50 特別講演Ⅱ 周 大成（歯科医史学会）
- 13：50～16：20 一般口演（13～22席）
- 16：20～16：30 休 憩
- 16：30～18：00 一般口演（23～29席）
- 18：00～20：00 懇親会
（主婦の友ビル2階張夫人ホームキッチン）

第2日 10月12日（日）9：00～18：00

- 9：00～11：30 一般口演（30～39席）
- 11：30～12：05 特別講演Ⅲ 伊藤和洋（薬史学会）
- 12：05～13：05 昼 食
- 13：05～13：35 総 会
- 13：35～14：10 会長講演 鈴木 勝（日本大学総長）
- 14：10～14：20 休 憩
- 14：20～17：50 一般口演（40～55席）
- 17：50～18：00 閉会の辞 小川鼎三（日本医史学会理事長）

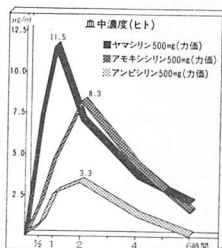


K-(ヒマラヤ)8,611m

呼吸器感染症に… 尿路感染症に…

■ヤマシリンは吸収が良好で、高い血中濃度が速やかに得られます。

ヒトにヤマシリン、アモキシシリンおよびアンピシリンを空腹時に500mg(力価)経口投与して血中濃度を測定したところ、ヤマシリンは1時間後にピークに達し、他の二剤の2時間後のピークに比べると速くて高い血中濃度が得られました。



●抗菌スペクトルが広く、グラム陽性菌・陰性菌に有効 ●経口投与時の吸収がすぐれ、高い血中濃度・臓器内濃度が得られる ●食後投与・反復投与でも吸収率は殆んど変わらない ●尿中に高濃度に排泄される。

【適応症】アンピシリン感性的黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌、化膿レンサ球菌、肺炎球菌、大腸菌、プロテウス・ミラビリス、インフルエンザ菌による下記感染症。急性気管支炎、咽頭炎、喉頭炎、扁桃炎、急性腎盂腎炎、猩紅熱。

包装 250mg 100cp 500cp 薬価 250mg 1cp 256.50

ヤマシリン[®] カプセル 250

●用法・用量、使用上の注意については説明書をご覧ください

803YC3A1

★250mgカプセルのほかに、山之内製薬㈱製造の125mgカプセルをビーチャム薬品㈱より発売しております。

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 26, No. 3

July 1980

CONTENTS

The General Meeting in Japan Society of Medical History, Dental History and History of Pharmacy

Special Lectures

- The Rod and Serpent of Asklepios, Symbol of
Medicine, Dentistry and PharmacyAkira FURUKAWA...(257)
Ancient Dentistry in ChinaChou Ta-shing...(260)
Drugs described on Ayur veda.....Kazuhiro ITO...(263)

President's Lecture

- Retrospection on Advances of the Japanese
Association for Dental ScienceMasaru SUZUKI...(265)

Member's Presentations.....(269)

Miscellaneous(275)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1, Bunkyo-Ku, Tokyo